

2 九国条約関係国会議

889

昭和12年10月8日

在ジュネーブ宇佐美国際会議事務局長
代理兼総領事より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約関係国会議に対する独伊両国の動向
など天羽国際会議事務局長の報告

ジュネーブ 10月8日後発

本 省 10月9日後着

第二八五號

往電第二七四號ニ關シ

局長ヨリ

(一)九箇國條約太平洋會議ニ對スル伊國及獨逸(聯盟規約及九箇國條約ニ關係無キモ太平洋利害關係國トシテ招請セラルルヤニ傳ヘラル)ノ態度ニ關シテハ當地新聞ニ於テモ問題トシ居ル處八日伊國公使「ボバ・スコパ」ハ伊ハ獨ト態度ヲ一ニスヘキカ當地獨逸總領事ノ談ニ依レハ獨逸ハ參加セサルヘシトノコトナルヲ以テ伊國モ恐ラクハ

890

昭和12年10月9日

在英国吉田大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議に向けて英米兩國が事前協議を行っているとの情報報告

拒絶スヘシト話シ居タルカ尙右兩國政府ニ對シテハ不參加ニ決定スル様豫メ談合セラレテハ如何カト存ス
(二)又今回ノ總會ニ於テ諸小國カ滿洲事件ノ時ニ比シ一般ニ溫和ナシカリシカ右ハ必スシモ日本ニ同情セシ爲ニアラスシテ主トシテ徒ニ騒クコトノ無用ナルコトヲ悟リ大國ニ追從シタル氣味アル處茲暫ク聯盟モ休會シ居ル此ノ際關係國政府ニ對シユツクリ我方ノ立場ヲ説明シ置クコト適切ナルヘシ特ニ諮問委員會關係諸國政府當局ニ對シテハ特ニ此ノ必要アルヤニ認メラル
~~~~~  
英、米、佛、獨、伊へ轉電シ在歐各大公使へ暗送セリ

ロンドン 10月9日後発  
本省 10月10日前着

第七五〇號

九日「ジェロスオール」カ米國官憲ヨリノ聞込トシテ富井ニ語レル所左ノ通り

米國ハ「ノーマン、デイビス」ヲ當地ニ派シ英國トノ間ニ充分下打合ヲ遂ケタル上ニテ九箇國條約會議開催方ノ段取ニ入ラントノ意嚮ヲ有シ居ル處英米双方共自國首都ニ於テ之ヲ開催スルコトニハ難色アリ且會議ハ兩國共 consultation conciliation mediation ノ範圍ヲ超ユル意嚮ナク「ボイコット」ハ問題トナラス

右ハ八日「イーデン」カ米國代理大使ト會談ノ節談合アリタルニアラスヤト察セラレ

米、壽府ヘ轉電シ在歐各大使ヘ暗送セリ

~~~~~

891

昭和12年10月11日
在ジュネーブ宇佐美國際會議事務局長
代理兼総領事より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約の締約国たる連盟国の會議開催に關

する連盟總會議長勸請への中国政府回答振りについて

ジュネーブ 10月11日後発
本省 10月12日前着

第二九一號

往電第二七九號ニ關シ

九箇國條約當事國宛總會議長勸請ニ對シテハ支那ノ外未タ回答セルモノナキ處事務總長宛八日附支那側回答ハ右勸請ヲ喜ンテ受諾スルト共ニ日本軍ノ侵入ノ爲日々災害力齎サレツアルヲ以テ關係國力速ニ交渉ヲ開始シ紛爭ヲ即時終了セシムル爲有效ナル方法ヲ執ランコトヲ希望スル趣旨ヲ述ヘ居レリ

在歐各大使、蘭、葡、瑞典、瑞西ヘ暗送セリ

~~~~~

892

昭和12年10月11日  
在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議のブリュッセル開催案に對する  
ベルギー外務省の応答振りについて

第一九一號  
往電第一八九號二關シ

ブリュッセル 10月11日後発  
本省 10月12日前着

九箇國會議當地開催說ニ關シ十一日好富外務省官房長「ル  
ゲー」ヲ往訪確メタル處英國ヨリ右提議アリタルカ目下國  
王、首相孰レモ留守中ニテ未タ決定ニ至ラサルモ政府大體  
ノ空氣ハ受諾ニ傾キ居レリ今日英國カ特ニ當地ヲ擇ヒタル  
ハ九箇國中白國カ最モ支那ニ政治的利害關係薄ク從テ公平  
ナル立場ヲ持シ得ヘキニ鑑ミ反日的空氣強キ倫敦、華府、  
巴里ニ於テ開催スルヨリモ日本ニ於テ參加セラルルコト容  
易トナルヘシトノ考慮ニ基キタルモノナリトテ在當地英國  
大使ノ「スパーク」宛書翰ヲ内示シタルカ右ニ依レハ  
(イ)當地ヲ適當トスル前記趣旨ヲ述ヘ右ニ關シテハ米國モ同  
意見ト信スヘキ理由アリト附記シ  
(ロ)會議ハ本月二十五日頃開催スヘキコト  
(ハ)招請狀ハ白國首相ヨリ九箇國ニ發シ其ノ他ノ諸國招請方  
ニ付テハ第一會議ノ際論議スヘキコト  
等ヲ記シ居レリ

依テ好富ヨリ私見トシテ

(イ)九箇國條約解釋ノ權利ハ必然締約國ノミニアリ然ルニ聯  
盟カ日本ヲ以テ同條約ノ違反者ト斷定シタルハ筋違ナル  
ノミナラス一旦日本カ斯ル宣告ヲ受ケ乍ラ本件會議ニ招  
請セラルレハ恰モ被告トシテ出廷ヲ求メラレタルカ如キ  
印象ヲ受ケ本會議成功ノ爲ニモ遺憾ニ堪ヘス

(ロ)抑九箇國條約ハ支那ノ領土保全ヲ目的トスルモノナル處  
某國カ外蒙ヲ事實上併合セルニ拘ラス同條約締結國ニ於  
テ之ヲ問題トシタルコトナシ右ハ同條約カ既ニ現在ノ事  
態ニ適合セサルニ至リタル明瞭ナル證左ナリ

(ハ)他面同條約ハ支那ニ「フリーハンド」ヲ與フレハ支那ハ  
自力更生スヘシトノ前提ノ下ニ締結セラレタルモノナル  
處其ノ後ノ支那ヲ觀ルニ右前提ハ根本的ニ覆サレタル次  
第二シテ此ノ點ヨリ言フモ同條約ノ有效性ニハ多大ノ疑  
問アリト述ヘタル處「ルゲー」ハ能ク了解セリ若シ日本  
側力會議ニ於テ堂々其ノ見解ヲ開陳セラルレハ必スや多  
大ノ感銘ヲ與フヘク從來缺席者カ常ニ惡者トナル例ニ鑑  
ミ日本ノ參加方希望ニ堪ヘスト述ヘタリ

在歐各大使、米、壽府へ轉電シ、在歐各公使へ暗送セリ

昭和12年10月11日

在仏国杉村大使より  
広田外務大臣宛(電報)

## 九国条約会議に対する日本の態度に関し報道

## 振り報告

パリ 10月11日後発

本省 10月12日前着

## 第五九六號

九箇國條約國會議ニ關スル「アバス」通信何等御參考迄

一、東京發朝日新聞ハ九日附外務省聲明ヲ論評シテ政府ハ同條約ノ失效ヲ宣言シ且其ノ宣言ヲ容認セサル限り右會議參加ヲ拒否スル旨ヲ明言スヘカリシナリト爲セル處此ノ點ニ關シ外務省方面ト右翼方面トノ間ニ意見ノ扞格アルモノノ如ク前記説明モ政府ノ名ニ依ルヘカリシヲ外務省ノ名ニ依リ發表セラレタルモノナリ右翼方面殊ニ海軍側ニテハ右條約ヲ破棄シ戰爭ヲ宣告スヘシト爲スニ對シ外務省側ニテハ右ノ如キハ聯盟ノ宣告ヲ理由付クルニ過キス故ニ現在必要ナルハ該會議參加ニ關シ諸國ト交渉シテ時日遷延策ヲ講スルト共ニ聯盟ノ對日宣告ヲ取消サシメ場合ニ依リテハ之ニ參加シテ内部ヨリ運動シ戰況ノ進展

ト相俟テ會議ノ決定ヲ緩和スルニアリト主張ス日本政府ハ此ノ點ニ關シ未タ態度ヲ決セス戰況ノ進展ヲ俟ツモノト觀測セラレアリ

二、武府發「プープル」報道ニ依レハ九箇國會議主宰國ハ武府ニ於テ今月中ニ開催スヘキコトニ付白國政府ノ同意ヲ求メ來リタル如ク各國ノ態度ハ右ニ對シ好意的ナリ  
壽府へ轉電シ在歐各大使へ郵送セリ

~~~~~

昭和12年10月12日

広田外務大臣より
在独国武者小路(公共)大使宛(電報)

九国条約會議に関する在本邦独国大使館参事

官よりの情報通報

本省 10月12日後10時15分発

第二三〇號

十一日東京獨逸大使館「ネーベル」參事官ノ堀内次官ニ對スル内話左ノ通り
駐英獨逸大使ヨリノ電報ニ依ルニ英外務省ノ某當局ハ同大使ニ對シ九國條約關係國會議ニ關シテハ目下内交渉行ハレツツアルモ期日、場所及參加國等ニ付テハ未タ決定シ居ラ

サルモ同條約調印國招請セラルコトナルヘク又壽府ニ於テ開催セラレサルコトハ確實ナリ尙今回同會議開催ノ問題起レルハ米國其ノ他非聯盟國ノ參加ヲ可能ナラシムルト共ニ他方聯盟ニ依ル極端ナル措置決定ヲ避ケムトスル趣旨ニ出テタルモノナリト語レル趣ナルカ同大使ノ印象ニ依レハ同會議ハ關係國ノ conciliation ニ依リテ問題ノ解決ヲ計ルコトヲ主タル目的トスルモノニシテ經濟制裁ノ如キ措置ニ出ツルコトナカルヘシトノコトナリ

更ニ又在壽府獨逸總領事ヨリノ報道ニ依ルニ米國大統領ノ「シカゴ」ニ於ケル演說ハ聯盟決議ノ際間ニ合ハサリシモ其ノ效果ヲ強ムル影響アリシハ疑ナシ而シテ聯盟ノ決議カ豫想以上ニ強硬ナリシコトニ付テハ支那代表部モ之レヲ意外トセル位ニシテ殊ニ支那ニ對スル各國ノ個別的援助ニ關スル部分ニ付テハ他ノ參加國代表部ニ於テ却テ今後ノ措置振ニ當惑シ居ルカ如キ有様ナリ尙問題ヲ九國條約關係國會議ニ移スコトニ付テハ米國ノ「オブザーヴァー」ハ大ニ活躍セル趣ナリ

在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典へ轉電アリタシ
米へ轉電セリ

895

昭和12年10月13日

広田外務大臣より
在独国武者小路大使宛(電報)

九国条約會議への独国不参加をわが方希望の
旨堀内外務次官より在本邦独国参事官へ伝達
について

第二三四號

本省 10月13日後11時10分発

往電第二三〇號ニ關シ

右會談ノ際「ネーベル」参事官ハ今回ノ會議ニ對シ日本政府ハ如何ナル態度ヲ執ラルルヤ又若シ獨逸力招請セラルルコトト爲ラバ或ハ會議ニ出席シテ日本側ニ情報ヲ供給シ又會議カ日本ニ有利トナル様仕向クルコトモ考ヘ得サルニ非サルモ日本國民ノ感情モ亦顧慮セサルヘカラス此點ハ「デイルクセン」大使モ心配シ居レルカ日本側ニテハ如何ニ考ヘラルルヤト尋ネタルニ付十三日次官ヨリ同参事官ニ對シ日本ハ未ダ招請ニモ接セズ從ツテ正式ニ決定シ居ル次第ニハ非ルモ日本ノ會議出席ハ困難ナルベク又獨逸トシテモ出席セラレザル方好都合ト思考スル旨傳ヘ置タル趣ナリ
在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典へ轉電アリ度シ

昭和12年10月13日

条約局第三課が作成した「九國條約國會議對策」

九國條約國會議對策

(昭和十二、十、十三條約局第三課)

一、去ル六日ノ聯盟總會ノ決議ニ從ヒ近ク開催セラルベキ九國條約國會議ハ早晚帝國政府ニ對シ會議參加方招請シ來ルモノト想像セラル(註一)(註二)

(註一)在白大使來電ニ依レバ會議ハ白國政府ノ招請ニ依リ來ル二十五日頃武府ニ開催ノ見込ナリ

(註二)聯盟總會ノ報告(第二報告第十一項)ニ依レバ先ヅ聯盟國タル九國條約締約國會議ヲ開催シ同會議ニ於テ非聯盟國タル九國條約締約國(日本及米國)竝ニ東亞ニ利害關係ヲ有スル國(獨逸及蘇聯)ヲ招請スベキヤ否ヤヲ決定スル段取ト爲ルベキ筈ト思考スルモ、在白大使來電ニ依レバ武府ヨリ招請狀ヲ發スベキハ九國トアリ其ノ範圍殊ニ最初ヨリ日米兩國ニ對シテ

モ招請狀ヲ發送スル意思ナリヤ不明ナリ

二、帝國政府ハ左記ノ事由ヨリ九國條約國會議ニ參加スルヲ得ザルベシ

(イ)今回ノ九國條約國會議ハ國際聯盟ノ決議ニ基キ招集セラルルモノニシテ廣義ニ於ケル日支事變ニ關スル國際聯盟ノ手續ノ一部ト見ルベキ處帝國政府ハ既ニ諮問委員會招請狀ニ對スル回答ニ於テ日支事變ニ對スル聯盟ノ介入ヲ一般的ニ拒絕シ居ルコト

(ロ)聯盟總會ハ帝國ノ對支行動ヲ九國條約違反ト斷定シ帝國政府ハ其ノ不當ナル所以ヲ聲明シタリ、此ノ不當ナル九國條約違反トノ斷定ノ存スル限り該九國條約ニ基ク國際會議ニ參加スルコトハ國家ノ名譽ノ問題トシテ受諾不可能ナルコト

(ハ)從來九國條約ノ效力ヲ否認スル方針ヲ執リ來レル帝國政府トシテハ同條約ノ有效存在ヲ前提トシ且同條約ノ一條項ノ發動タル國際會議ニ參加シ得ザルコト

三、尤モ帝國政府ノ招請拒絕ノ回答ニハ前記理由中ノ(イ)及(ロ)ノミヲ掲記スルヲ可トス蓋シ今九國條約ノ效力ヲ正式ニ否認スルガ如キコトアランカ既ニ緊張セル帝國ト列國ノ

關係ハ更ニ惡化シ列國ノ對支同情ヲ深メ對支援助ヲ助長シ帝國ノ今次對支行動ノ目的ノ達成ヲ阻害スベキ重大ナル國際の紛糾ヲ招來スベキコト明白ナレバナリ(註)

(註) 九國條約ノ無效論ハ法律的ニ成立セズ九國條約ノ

一方の廢棄又ハ脫退ハ或ハ可能ナリトスルモ(理論

上疑問ノ余地アリ)政治條約ノ一方の廢棄又ハ脫退

ハ事重大ニシテ一國ノ國力充實シ其ノ國際の地位最

モ強固ナル時ニ於テノミ行ヒ得ベキモノナリ現在ハ

帝國ニトリ此ノ種措置ヲ敢行スベキ時機ニアラズト

思考ス

四、襄ニ諮問委員會ノ招請ヲ謝絶セル帝國ガ今又九國條約國

會議ノ招請ヲ謝絶スルトキハ列國ハ愈々日本ハ武力行使

ニ依リ意ノ儘ニ日支事變ヲ解決セントスルモノナリトノ

印象ヲ深メ日支間ノ調停ニ見切ヲ付ケ平和恢復ノ方途ト

シテ對日壓迫措置ニハ出デズトモ益々支那援助ニ傾クベ

キハ想像ニ難カラズ從テ我方トシテハ會議招請ヲ謝絶ス

ルト同時ニ前述ノ如キ情勢ノ發生ヲ防止スル爲主要關係

國(英、米、佛)ニ對シ今次事變ニ依リ帝國ノ支那ニ求ム

ル所ノモノガ支那ノ容共排日政策ノ放棄ト日支提携ニ依

897

ル東亞平和ノ確立ニ在リ日本ハ支那ニ於テ何等領土の野心ヲ抱懷セズ又支那ニ於ケル列國ノ權益ハ之ヲ尊重シ門戶開放主義ハ依然帝國ニ於テ之ヲ尊重スベキコトヲ説明シテ此等諸國ノ我方ノ眞意ニ對スル懸念ヲ一掃スルニ努ムルト同時ニ我方ガ今次事變ノ拾收ニ付永久且全面的の第三國ノ調停ヲ排斥スルモノニ非ズシテ時機到ラバ一三二三年上海事變ノ拾收ノ際ノ如ク第三國ノ友誼の調停ニ俟ツコトアルベキヲ暗示シテ時機到來スル迄主要關係國ノ自重ヲ望ム旨ヲ申入ルル必要アルベシ(註一)(註二)

(註一) 列國ノ在支權益ノ尊重及門戶開放ノ維持ハ杉山

陸相ノ英米新聞記者ニ與ヘタル「ステートメント」

ニ言明セラレアリ

(註二) 時機到ラバ上海方面ノ事態拾收ノ爲英國邊ノ調

停ヲ期待スル趣旨ハ既に駐英大使ニ於テ言明セラレ

タルコトアリ

~~~~~

昭和12年10月14日

在ベルギー柳沢(健)臨時代理大使より  
広田外務大臣宛(電報)

英国外交官が英国は九国条約會議では条約違

## 反問題には触れないと説明し日本の会議参加

を希望する旨内話について

ブリュッセル 10月14日後発

本 省 10月15日前着

### 第二〇一號

往電第一九一號ニ關シ

十四日當地英國大使館書記官 Harcourt Smith(參事官ハ目下缺員)ヲ好富往訪九國會議ニ關シ懇談ノ際「スミス」ヨリ日本側参加ノ有無ヲ質シタルニ付好富ヨリ私見ニ依レハ聯盟カ既ニ日本ヲ九國條約違反者ト判決シタル事實ハ日本ノ参加ヲ躊躇セシムル一原因ト思考スル旨述ヘタル處「ス」ハ英國政府ノ意嚮ハ同會議ニ於テハ條約違反問題ニハ全然觸レス唯日支紛争ニ關シ關係國カ堂ニ會シ忌憚ナキ意見ノ交換ヲナシ出來得レハ之カ解決方法ヲ發見セントスルモノニシテ米國モ全然同意見ナリトテ英米兩國政府ヨリ駐日兩國大使ニ宛テタル訓令寫ヲ讀ミ右訓令中ニハ會議ニ於テ單ニ「紛争終焉ニ關スル論議ヲ爲ス」トアルモ右ハ條約違反問題等ニハ觸レストノ意ナリト説明シタル後假令支那等カ右問題ヲ持出ストスルモ會議ニ於テ指導的立場ニ立

ツヘキハ日英米三國ナルニ鑑ミ三國ノ意見カ一致スル以上支那側ヲ牽制スルコト困難ナラズト思料スル旨答ヘタルニ付好富ヨリ西班牙問題ニ於ケルカ如ク多數國一堂ニ會スル時ハ問題ノ解決ニ却テ困難ナルヘシト述ヘタル處「ス」ハ會議ト併行シテ日英間ニ交渉スルコトモ一策ト思考ス孰レニセヨ日本ノ参加ハ此ノ際英國輿論ノ緩和、日英關係將來ノ爲ニモ希望ニ堪エスト述ヘタル後白耳義ハ原則トシテ會議招請ヲ承諾シタルモ尙其ノ手續等ニ關シ目下歸朝中ノ駐支白耳義大使「ギーヨナム」男今夕出發倫敦ニ赴キ英ト打合後正式ニ之ヲ發表來週月曜頃招請狀發送トナルヘク孰レニセヨ最初ノ豫定通り本月二十五日會議開催ハ困難ニテ多分來月トナルヘシト内話セリ尙本件會議ハ白耳義政府之ヲ召集シ首相「バンゼイランド」議長トナル豫定ノ趣米、在歐各大使(土ヲ除ク)壽府、葡、蘭、瑞典ハ轉電シ在歐各公使ハ暗送セリ



898

昭和12年10月15日

広田外務大臣より  
在米国齋藤大使宛(電報)

九国条約會議へのわが方参加を在本邦米国大



使が打診について

第三五〇號

本省 10月15日午後11時30分發

十五日米國大使本大臣來訪九國條約會議ニハ日本政府ハ參加セラルルモノト推測ス米國ノ考フル所ニ依レバ本會議ハ次ノ二箇ノ目的ヲ有スルモノニシテ一ハ日支兩國ガ其ノ意嚮ヲ此ノ機ニ明ニシ得ルコト、二ハ其ノ結果平和ヲ求メ事態安定ニ貢獻シ得ルニ至レハ日本ノ爲メニモ利益ナルベシト述ベタルニ付本大臣ハ帝國政府ハ未ダ本會議ニ正式ニ招請ヲ受ケザルヲ以テ態度ヲ決定シ居ラザルモ大体ノ傾向トシテハ不參加ト爲ルモノト思考スル旨ヲ答ヘタルニ米國大使ハ早速其ノ旨本國政府ニ電報スベシト述ベタリ  
尙雜談トシテ米大使ハ本事變ニ對スル日本ノ眞意ヲ明カニスルコト可ナルヘシト云ヘルニ對シ本大臣ヨリ帝國政府ノ意ノアル所ハ過去四年間蔣介石トノ交渉ニ依リ支那側ニ於テ大体了解シ居ルモノト思考スル處聯盟ニ於テハ日本ヲ非難シ支那ノ抵抗力ヲ弱メザル様決議セルコトニモアリ今回ノ九國會議モ其趣旨ニヨリ行動スベク斯クテハ現ニ支那側ハ今尙依然抵抗ヲ繼續スル意嚮ヲ表明シ居ル際ニテモアリ

一層支那ノ抵抗ヲ長引カセ却ツテ時局收拾ヲ遅延セシムルノ結果トナルニ過ギサルベキ旨ヲ話シ置キタリ  
白ニ轉電アリ度シ

白ヨリ在歐各大使、壽府、和蘭、葡、瑞典へ轉電アリ度シ

~~~~~

899 昭和12年10月15日 広田外務大臣より
在英國吉田大使宛(電報)

九国条約會議へのわが方参加を在本邦英国大

使が要望について

付記 昭和十二年十月十六日起草、広田外務大臣より

在英國吉田大使、在米國斎藤大使宛電報案
九国条約會議參加拒絶および列國の和平仲介
に対する対処方針について

本省 10月15日發

第四四二號

十五日英國大使本大臣ヲ來訪九國條約會議ハ聯盟總會ノ決議ニモアル通り協議ニ依リ(bv agreement)紛爭終結ノ方法ヲ見出スコトヲ目的トスルモノナリ目下ノ状態ハ英國政府トシテハ憂慮ニ堪ヘス日本政府ニ於テ前記目的ニ協力シ

會議招請ヲ受諾センコトヲ切望スル旨述ヘタリ仍テ本大臣
ハ米國大使モ本日來訪同會議ニ對スル日本ノ意嚮ニ付話ア
リタルニ付日本政府ハ未タ同會議ニ對シ何等正式ニ照會ヲ
受ケ居ラス從テ日本政府ノ方針モ未タ決定シ居ラサルモ日
本側ノ態度ハ大体之ヲ拒否スル方向ニ傾キ居ル旨米國大使
ニ回答セルカ右ハ直ニ唯今ノ御話ニ對スル御答ヘトモナル
ヘシト思ハル御承知ノ通り南京政府ハ目下ノ處飽迄抵抗ノ
態度ヲ採リ居ルニ付唯今話合スルモ容易ニ纏マルモノトハ
思ハレス尤モ日本政府モ今次紛爭ヲ協議ニ依リ收拾スルコ
トハ最モ希望シ居ル所ニシテ日支間ノ協議ニ依リ收拾シ度
キ考ニテ進ミ居ル次第ナル旨述ヘタル處同大使ハ蔣介石ハ
頗ル頑強ニ抵抗ノ決意ヲナシ居ルニ付時局ヲ收拾スルコト
困難ナリト思ハル尤モ日本側九國條約會議ニ出席セラレ事
態收拾ノ協議ヲ進メラルト共ニ日本側ノ主張ヲ明白ナラ
シムルコトハ日本側ニモ利益ナリト思ハル旨述ヘタルニ
付本大臣ハ日本側ノ主張ハ假令會議招請ヲ拒絕スル際ニモ
ハツキリセシメ得ルモノト考ヘ居ル旨應酬シ置キタリ
米、北平、天津、上海ヘ轉電セリ

英ヨリ土ヲ除ク在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典ヘ轉電ア

リ度シ

(付記)

(極祕、部外嚴祕、館長符號扱)

事變勃發以來各地ニ於ケル段々ノ御盡力ハ本大臣ノ深く多
トスル所ナリ目下ノ處列國ノ態度ハ先般聯盟決議ノ趣旨ニ
應シ九國條約國會議ヲ開キ協議ニ依リテ紛爭終結ノ方法ヲ
見出サントスル方向ニ進ミツツアルモノノ如キモ帝國ノ態
度ヲ以テ諸條約違反ナリト獨斷シタル不公正ナル聯盟決議
ニ其ノ端ヲ發スル本件會議ヘノ招請ハ九國條約ニ對スル帝
國從來ノ方針ニモ鑑ミ之ヲ受諾シ得ル限ニアラズ依テ招請
狀ノ形式ノ如何ニ拘ラズ會議ニハ參加セザル方針ナリ
然レトモ右ハ帝國政府ガ將來ニ亘リ第三者ノ好意的斡旋
(good offices)ヲモ絶對ニ排斥セントスル趣旨ニ出ヅルモ
ニアラズ事變ノ終極的解決ハ固ヨリ日支兩國間ニ於テ爲
サルベキモノナルモ其ノ端緒ヲ擱ム動機トモ爲ルベキ有力
ナル少數第三者就中英米獨伊等ノ好意的周旋アルニ於テハ
必シモ之ヲ排斥スルモノトハ限ラズ尤モ右ハ今後狀況ノ如何
ニ拘ルコト勿論ニシテ少クトモ現在ハ其ノ時期ニアラズ

右我方ノ眞意ヲ早計ニ外部ヲシテ察知セシムルコトハ我方ノ態度軟化ノ如キ誤解ヲ與ヘ極メテ不利ナルニ付此ノ點特ニ御留意相成ルト共ニ將來此ノ種企圖ノ行ハレントスルコトアル場合ニ之ニ對スル障礙ト爲ル如キ虞アル結果ヲ作ラザル様御含置相成度

英ヨリ土ヲ除ク在歐大使、壽府へ轉電アリタシ
米へ轉電セリ

編 注 本電報案は廃案となり發電されなかつた。

900

昭和12年10月15日 在ベルギー柳沢臨時代理大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議招請狀發送の見通しについて

ブリュッセル 10月15日後發
本 省 10月16日前着

第二〇三號

貴電第六九號ニ關シ(九國會議開催ニ關スル白國ノ意向報道ノ件)

官房長「ルゲー」ヲ好富往訪之ヲ質シタル處全然虚構トシ

テ否定シタル後「ゲイヨル」大使今朝英國政府ト打合せノ結果意見一致ヲ見タルニ付(往電第二〇一號御參照)多分今夜中ニ九箇國竝ニ條約加入國ニ招請狀發送ノ運ヒニ至ルヘク而シテ招請狀ニハ

(イ)先般ノ御話ノ通り聯盟カ本問題ニ介入スルコトカ日本ノ參加ヲ困難ナラシムル一原因ナルヤノ趣ナリシニ付何トカシテ日本ノ參加ヲ容易ナラシムル趣旨ニテ招請狀ニハ一切聯盟ニ觸レサルコトトセリ

(ロ)白耳義ハ支那ニ於ケル其ノ利害關係薄キニ付本問題ニ關シ「イニシヤテイーヴ」ヲ執ルヘキ筋合ニモアラスト思料セル爲特ニ英國ノ懇請(米國ノ贊同ヲモ得)ニ基キテ招請スル旨

明記スルコトトナリタル旨述ヘタル後會議開催ハ早クトモ本月三十日頃トナルヘク第一次會議ニ於テ第三國ノ招請問題論議ノ際多分獨逸ヲモ招請スルニ至ルヘキ旨内話セリ在歐各大使(土ヲ除ク)壽府、米、葡、瑞典、蘭へ轉電セリ

901

昭和12年10月16日 広田外務大臣より
在伊国堀田(正昭)大使宛(電報)

九国条約會議への伊国対応振りに関して在本

邦伊国大使がわが方希望を照会について

本省 10月16日午後11時10分発

第一八五號

往電第一七九號二關シ

十日伊國大使本大臣來訪ノ節同大使ヨリ(一)九國條約國會議ニ對スル我方ノ態度及意嚮ヲ質問スルト共ニ(二)伊太利ハ聯盟ニ對スル特殊ノ地位ヨリ其ノ行動ヲ局限セラルルコトアルベキモ伊太利政府ノ極メテ強キ意嚮ハ日本ノ意嚮及希望ニ應ジテ日本ノ利益ト爲ル様行動シ出來得ル限り日本ヲ援助支持セントスルニ在リト述ベ伊太利ノ態度ニ對スル我方ノ希望ヲ尋ネタルニ付十六日伊國大使ノ來省ヲ求メ次官ヨリ第一ノ點ニ付テハ日本政府ハ未ダ正式招請ニ接セザルガ故ニ態度ヲ確定シ居ラザルモ現下ノ事情ノ下ニテハ參加ハ恐ク困難ナルベキ旨ヲ述ヘ又第二ノ點ニ付テハ日本側ノ感^{カンシ}ヨリ言ヘバ日本ハ會議ニ參加セザルガ故ニ伊太利ガ參加セザル方ヲ結構ト思フモ伊太利ガ會議參加ニ決定セラルル場合ニハ之ニ反對スベキ筋合ニ非ズ日本政府ハ伊太利ガ如何ナル場合ニモ日本ノ利益ノ爲行動シ日本ヲ支持援助スベキ

コトヲ表明セラレタルヲ大ニ多トスルモノニシテ伊太利ガ會議ニ於テ右精神ニ從ヒ行動セラレンコトヲ希望スルモノナリト答ヘ置キタリ

尙伊國大使ハ日本政府ハ會議ニ於ケル伊太利ノ行動ニ對シ如何ナルコトヲ希望セラルルヤト質問セルニ付次官ヨリ差當リノ問題トシテハ第一ニ日本ハ如何ナル制裁ニモ反對シ第二ニ例ヘハ停戰條件ヲ決定スル等日支間ノ直接交渉ヲ妨クルガ如キ如何ナル決議ニモ反對スルモノナルニ付此點ヲ支持セラルルト同時ニ會議ノ模様ニ付隨時情報ヲ與ヘラルルヲ得バ幸ナリト答ヘタルニ大使ハ御話ノ次第ハ直ニ本國政府ニ電報スベシト述ベタル趣ナリ

在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典へ轉電アリ度シ
米へ轉電セリ



902

昭和12年10月16日 在ベルギー柳沢臨時代理大使より
広田外務大臣宛(電報)

ベルギー外務当局が九国条約會議の招請状内
示について

第二〇五號

ブリュッセル 10月16日後発
本 省 10月17日前着

十六日官房長「ルゲー」ノ求メニ依リ好富往訪セル處

一、實ハ本日大臣ヨリ會議不參加ノ懸念アル日、伊、獨三國ノ大公使ヲ招致參加方勸誘スル積リナリシ處來栖大使ニハ今夕晚餐ノ際ニ御話スルコトトシ伊國大使ノミヲ招致スルコトトシタルカ獨逸公使ニハ條約締結國タラサル關係上正式ニ招致スルモ如何カト考ヘ居リタル處幸ヒ本日新任武官紹介ノ爲同公使來訪スルニ付其ノ節御話スルコトトナリタリト斷ハリタル後別電招請狀寫シヲ提示シ會議ノ目的ヲ「紛爭終焉ヲ促進スル有效の方法考究ノ爲」トシ特ニ「有效の方法」ト斷ハリタルハ經濟封鎖等強制手段ヲ考究スル爲ニハ全然アラサルヲ明示スル爲ナリ
二、本月三十日開會ノ後日曜及「*Thursday*」等ノ休日續キナルト又第一次會議ニ於テ新ニ招請スヘキ國ノ代表者到着ヲ待ツ等ノ爲休會スルコトトナルヘシ
三、各國代表者ニ關シ英ハ「イーデン」、米ハ「デヴィス」等ノ噂アルモ未タ確報ナク「イーデン」ハ多分開會式ノ

ミニ出席スルコトナルヘシト思料ス

四、會議「プログラム」等ハ未タ何等決定シ居ラスト内話セリ

在歐各大使(除土)、壽府、米、蘭、葡、瑞典ハ轉電セリ
米ヨリ墨ハ轉電アリタシ

~~~~~

903

昭和12年10月17日

在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛(電報)

ベルギー外相が九国条約會議へのわが方参加を要望について

ブリュッセル 10月17日後発  
本 省 10月18日前着

第二〇九號

貴電第七〇號ニ關シ(九國會議條約案<sup>(1)</sup>ニ關スル件)

晚餐後外務大臣ハ本使ヲ一隅ニ招キ今回ノ會議ニ日本ノ參加ヲ切望スル旨ヲ述ヘタルニ付本使ハ未タ招請狀ヲモ拜見セス帝國政府ノ回答振ニ關シテモ何等決定的ニ承知シ居ラサルモ既ニ日本ヲ以テ九國條約違反者ナリト斷定シ加之今回會議被招請國多數ノ贊成セル過般ノ聯盟決議ニ於テ各國

各自ニ支那ヲ援助スル方法ヲ考究スルコトナリ居ル經緯ニ鑑ミ帝國政府トシテハ折角ノ御招請ニ對シ多分不參加ヲ表明セサル能ハサルコトナルヘシト思考スル旨答ヘタル處外相ハ實ハ御説明ノ點ヲ充分考慮シタル結果今回ノ會議ハ過般ノ聯盟決議ト何等關聯ナキヲ明カニシタル次第ナリト述ヘタルニ付右様ノ法律家の「ニューアンス」ハ一般民衆殊ニ國ヲ舉ケテ事變ニ對處シツツアル我國民現下ノ心理ニ於テ到底納得シ得サル所ナルヘキハ多年實際政治ノ體驗ヲ有セラルル貴大臣ノ充分理解セラルル所ナルヘシト應酬シ本來如何ナル國際紛爭ノ處理ニ於テモ豫メ何等主要關係國ノ下交渉ニ依リ地均シ工作ヲモ行ハス直ニ多數國ノ會議ヲ開催シ各代表勝手ノ演說ヲ試ミ以テ案件ニ解決ヲ與フルカ如キコトノ殆ト不可能ナルハ幾多會議ニ參列ノ經驗ヲ有セラルル貴大臣ノ了解セラルル所ナルヘク

殊ニ今回ノ會議ノ如キ墨西哥、「ボリビヤ」等支那問題トハ緣遠キ國々ヲモ招請シ彼等ノ現實ヲ超越セル理想論ヲモ考慮ニ加ヘタル末如何ナル決議ヲ採擇セラレタリトスルモ問題解決ニ何等資スル所ナカルヘキハ勿論却テ時局ヲ長引カシムルニ過キサルヘキハ豫測ニ難カラサルヲ以テ此ノ際

ノ方策トシテハ帝國政府カ既ニ繰返シ何等領土の野心ナク且外國權益ヲ尊重スヘキヲ聲明シ居ル點ヲ充分翫味セラレ先ツ主要利害關係國ニ於テ何等カ現實ニ即セル方法ヲ考慮セラルルヲ一層實際のナリト思考スト述ヘ更ニ米國大統領ノ會議ニ對スル意嚮トシテ「コミユニケ」、新聞報等ノ傳フル所ニ依レハ同大統領ハ日支兩國ヲ交ヘタル諸締約國トノ會談ニ依リ平和的解決策ヲ求メントシツツアルモノノ如ク從テ帝國政府ノ不參加カ愈々明瞭トナルニ於テハ少クトモ米國トシテハ豫想セサリシ新事態ニ直面スル次第ニ付其ノ間主催國トシテモ會議開催ニ關シ何等カ御再考ノ必要ヲ生セラルヘキ儀カト思考スト述ヘタル處外相ハ米國代表ハ既ニ出發シタルニアラスヤト質問セルニ付新聞報ニ依レハ本月廿日出發ノコトトナリ居ルカ如シト答ヘタル處外相ハ何レ英國大使トモ相談ノ上或ハ更ニ會談ノ機會ヲ得度シト述ヘ居リタルカ米國代表愈々出發トモナレハ會議ハ何ノ道先ツ開催ト觀ルノ外ナカルヘシト思考ス英國大使トノ會談ニ關シテハ別電ス

米、壽府、在歐各大使へ轉電セリ

904

昭和12年10月17日

在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛(電報)

## 在ベルギー英國大使が九国条約會議へのわが

## 方参加を慫慂について

ブリュッセル 10月17日後発

本省 10月18日前着

## 第二一〇號

往電第二〇九號ニ關シ

同夜英國大使「クライブ」トノ會談ニ於テモ大體外相ニ對スルト同シク應酬シ置キタルカ同大使ハ今回ノ會議カ聯盟決議ヲ離レ何等カ平和的解決ノ準則ヲ發見スルヲ主眼トスルモノナル旨ヲ述ヘ此ノ際日本ノ公正ナル態度ヲ各國ニ表明スル好個ノ機會ニシテ是非我國ノ参加ヲ切望スル旨ヲ繰返シ當地支那大使トモ既ニ二回會見シタルカ第一回ノ會見ニ於テ支那側ハ顧維鈞<sup>(イ)</sup>ニ大使ヲ代表トスル意嚮ナル旨ヲ述ヘタル上會議ノ成果トシテハ何等カ具體的方策ノ決定ヲ主張シ居リタルモ說得ノ結果第二回ノ會見ニ於テハ一般的ナル平和的解決ノ準則ニテモ可ナル旨ヲ述ヘ居リタリト内話シタルニ付本使ハ一己ノ私見トシテ假令如何ナル決議ヲ見

ルトスルモ支那側ハ之ヲ以テ支那ニ對スル聲援ト解シ自然蔣介石左右ノ長期抗日論者ニ勢ヲ與ヘ或ハ蔣介石自身ノ意ニモ反シ徒ニ事變ヲ長引カシムル結果トナルヘク又日本側ニ於テモ會議ノ結果又々條約違反其ノ他ノ惡名ヲ背負ハセラルル以上ハ寧口領土の野心ノ否定等ヲ一擲シ名實共ニ違反者トシテノ現實的收穫ヲ得ルニ如カストナスカ如キ矯激ナル議論スラ萬擡頭シ來ラストモ限ラス

從テ恐ラク事態ハ益々紛糾ヲ見ルニ至ルヘク常ニ冷靜ニシテ實際的ナル貴國政府カ日本ノ不參加殆ト明カナル今日無理遣リニ會議開催ヲ促進セラルル次第本使トシテ甚タ了解ニ苦シム所ニシテ貴國政府トシテハ此ノ際寧口領土保全、權益尊重ノ具體的事例ニ關シ更ニ帝國政府ノ意嚮ヲ徵スル等何等カ實際的ノ措置ニ出テラルルヲ一層適切トスヘキニアラスヤト述ヘタルカ同大使ハ滿洲事變ノ際ト同様事變ノ上海二波及セルヲ頗ル遺憾トスル旨ヲ述ヘタル外頻リ二日本ノ會議參列ニ關スル希望ヲ繰返スノミ結局其ノ儘物別レトナリタル次第ナリ蓋シ同大使ハ最初白國政府ノ態度未決定ノ間英國外務省ヨリ白國ノ受諾取付方ニ關シ電話ニテ矢ノ催促<sup>(促)</sup>ヲ受ケ居リタル旨ノ信スヘキ内報アリ兎ニ角英國政



府ハ頻リニ會議開催ヲ急キ居ルヤニ認メラルルノミナラス  
米國政府ノ態度モ之ニ對應スルモノアルヤニ見受ケラルル  
ヲ以テ會議ニ關スル帝國政府何分ノ御意嚮御決定ノ上ハ在  
京主要國大使ニ對シ充分之ヲ印象セシメ置カルル方然ルヘ  
キヤニ思考ス

米、壽府、在歐各大使ニ轉電セリ



905 昭和12年10月19日 広田外務大臣より  
在伊国堀田大使宛(電報)

伊国の九国条約會議參加決定および同會議を  
めぐる対日協力方針に關し在本邦伊国大使が  
通報について

本省 10月19日後9時20分發

第一八八號

往電第一八五號ニ關シ

十九日午後伊國大使次官ヲ來訪、本國政府ヨリ至急日本政  
府ニ通報方電訓ニ接セリトテ左ノ趣旨ヲ述ベタリ

九國條約會議ニ關シ伊太利ハ最初聯盟ヨリ招請ヲ受ケタル  
ガ其ノ後白國政府ヨリ又招請ニ接シタリ白國ノ招請狀ハ聯

盟ニ言及セズ且同國外相ハ今次九國條約會議ハ聯盟トハ何  
等ノ關係ナキモノニシテ所謂侵略國ヲ決定スルヲ目的トセ  
ズ事件ノ解決ヲ見出サントスルモノナリト説明シテ伊太利  
ノ參加ヲ求メタリ仍テ伊國政府トシテハ之ヲ拒絕スルコト  
困難ナリ同國參加ノ上ハ過日貴方ヨリ希望トシテ述べラレ  
タル日本側ニ於テ制裁及調停ニ反對ストノ點ハ之ヲ支持ス  
ルノ用意アリ尙今後日本政府ノ爲サルベキ如何ナル  
suggestionモ最モ友好的精神ヲ以テ考慮スベシ  
在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典ヘ轉電アリ度シ  
米ヘ轉電セリ



906 昭和12年10月19日 在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議不参加の場合のわが方対応振り  
につき意見具申

ブリュッセル 10月19日後發  
本省 10月20日前着

第二一二號(極秘)

九國條約會議招請ニ對スル回答振ニ關シ何等膠モナク招請



ヲ一蹴スルハ今次事變ノ收拾ハ兎ニ角今後ノ外交工作ノ見地ヨリスルモ將又對外宣傳ノ見地ヨリスルモ餘程考究ノ要アルヤニ思考セラレ恐ラク其ノ點御苦心ノ存スル所ト拜察セラルル處今回會議ノ實際上ノ主催國タル英米カ今次事變ニ關シ當該條約締約國中最も重要地位ヲ占ムル我國ニ對シ事前ニ何等相談ヲモ爲サス且同條約第七條ノ「コンサルテイション」カ必スシモ多數國間ノ會議ヲ必要トセサルヘキニ拘ラス突如トシテ會議ヲ招請セシメ假ニ日本カ受諾シタル場合ニ當然考慮セラルヘキ日本國ヨリノ代表派遣ヲ不可能ナラシムルカ如キ期日ヲ選定シタル理由ニ關シテハ招請國及英米政府ニ對シ先ツ質問ノ要アルヘク一方英米カ頻リニ會議ヲ急キツツアルハ何レモ近く議會ノ開會ヲ控ヘ國論ノ手前何トカ和平解決ニ努力シ居ル形ヲ示サルヘカサル苦衷ニ出ツル所モ有之ヘキヲ以テ英米兩政府カ國民ニ對シ既ニ東京ニ於テ少クトモ「コンサルテイション」ノ準備工作進行中ナリト應酬シ得ルカ如ク誘導シ置キツツ其ノ間ニ何分ノ對策ヲ決定セラルルコト然ルヘキヤニ思考ス往電第二〇九號外相トノ會談ニ於テ同外相ハ本件會議ノ當地開催ハ一二英米等ノ注文ニ出テ同外相トシテハ餘リ進ミ居

ラサルヤニ印象セラレタル點モ有之右卑見敢テ申進ス  
米、壽府、在歐各大使へ轉電セリ

~~~~~

907

昭和12年10月19日

在ベルギー來栖大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議招請狀に対する各国回答について

ブリュッセル 10月19日後發

本 省 10月20日前着

第二一四號

十九日官房長「ルゲー」ノ好富ニ對スル内話

一、九箇國會議招請狀ニ對シ英、米、佛、支、加奈陀、葡萄牙ノ六箇國ヨリ既ニ受諾ノ旨回答セリ伊ハ未タ回答セサルモ諸種ノ情報ニ依レハ參加ニ傾キ居レルヤニ思料セラ

ル
二、招請狀ハ締約國竝ニ加入國(瑞典、諾威、丁抹、墨西哥、「ボリビヤ」)ニ發セラレタルカ夫レ以外ニ招請スヘキ國ハ御承知ノ通り第一次會議ニ於テ決定ノ筈ナルモ何國モ異存ナカルヘキハ獨逸蘇聯邦兩國ニシテ又場合ニ依リ暹羅ヲ招請スルモ一案ナルヘシ

三、萬一日本側ヨリ代表派遣ノ場合ハ到底期日ノ間ニ合ハサルヘシトノ間ニ對シ日本ニ於テ參加セラルル以上開會期日ノ如キハ枝葉ノ問題ニシテ之ヲ延期スルカ如キ左シテ困難ナルヘシト思料ス

米、壽府、英、佛、獨、伊、蘇、蘭、瑞典、葡へ轉電セリ

~~~~~

908

昭和12年10月20日

広田外務大臣より  
在仏国杉村大使宛(電報)

### 九国条約會議へのわが方参加を在本邦仏国大

#### 使が從憑について

本省 10月20日後8時45分發

第三二四號

二十日佛國大使本大臣ヲ來訪本國政府ノ訓令ニ依ル趣ヲ以テ日本政府ハ九國條約國會議ノ招請ヲ受領セラレタリト思考スル處是非日本ノ會議ニ參加セラルルコトヲ希望ス同會議ハ何等壓迫的措置ニ付決議セントスルモノニアラズ日本ノ立場ヲ明白ナラシムル好機ナルヘシト述ヘタルニ付本大臣ハ日本ハ未ダ正式招請ニ接セズ(此ノ點ニ關シ大使ハ頗ル不思議ナリト述ブ)從ツテ政府トシテハ未ダ正式ニ決定

シ居ラザルモ一般ノ情勢ハ參加不可能ノ傾向ニアリト答ヘ置キタリ

土ヲ除ク在歐各大使へ轉電アリ度

~~~~~

909

昭和12年10月20日

広田外務大臣より
在英國吉田大使宛(電報)

九国条約會議へのわが方参加を在本邦英國大

使が勸説について

本省 10月20日後9時30分發

第四五一號

二十日英國大使本大臣ヲ來訪九國條約會議ニ關スル先日來ノ貴大臣、次官トノ會談ハ本國政府ニ報告セルガ更ニ本國政府ヨリ日本ハ正式招請ヲ受領セラレタル筈ニ付日本ノ參加勸説方訓令ニ接シタリ聯盟ニ於テハ日本缺席ノ爲支那側ノ言分ノミ採用セラレタル觀アルモ今次會議ハ日本側ノ主張ヲ十分ニ明白ナラシメ得平和ヲ招來スル絶好ノ機會ナリト思考スル處若シ日本不參加ノ事トモナラバ英國ノ平和回復ノ力ヲ減殺セラルルコトヲ虞ルトテ日本ノ出席方再考ヲ促シタルニ對シ本大臣ハ日本ハ未ダ正式招請ニ接セザレド

モ御趣旨ハ了解セリ貴説ノ通スル機會ニ日本ノ立場ヲ明ニ
スルモ一方法ナルガ國內各方面ノ意嚮ヲ探リタル結果ニ依
レハ大体不參加ノ意嚮ナルコトヲ確メ得タリ日本ガ舉國一
致シテ事變ニ對處シ居ル此ノ際國內ニ意見ノ對立ヲ招クガ
如キ措置ニ出ヅルヲ得ズ日本モ速ニ平和ノ回復センコトヲ
希望スルモノナルガ故ニ日本ノ意嚮立場等ハ適當ノ方法ニ
依リ明ニ致度ト答ヘタルニ大使ハ獨逸蘇聯邦ノ如キ九國條
約關係外ノ國ノ參加ガ日本參加ニ對スル障礙トナルコトナ
キヤト問ヒタルヲ以テ本大臣ハ日本ハ根本ニ於テ不參加ノ
意嚮ナルヲ以テソレヨリ先ノコトハ考ヘ居ラズト答ヘタル
ニ大使ハ之ヲ首肯シタリ尙雜談中大使ハ蘇聯ノ參加ハ日本
ニトリ或ハ不利ナランモ獨逸ノ參加ハ日本ノ爲有利ナルベ
シト述べ本大臣ハ平和ノ迅速ナル克復ヲ冀望スル日本ノ眞
意ハ貴大使モ之ヲ熟知シ居ラルル所ナルベキヲ以テ愈不參
加ニ決シタル場合ニハ更メテ會談ノ機ヲ得度ト附言シ置ケ
リ

在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典へ轉電アリ度シ
米へ轉電セリ

910

昭和12年10月20日

在米国齋藤大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議に対する米國政府の態度に関し

同国大統領声明について

ワシントン 10月20日後発

本 省 10月21日前着

第五六四號

「十九日大統領ハ「ハイドパーク」ニ於テ「デヴィス」代
表及「ドット」駐獨大使トノ間ニ夫々協議ヲ行ヒタル後
九國條約會議ニ對スル米國政府ノ態度ニ關シ左ノ趣旨ノ
聲明ヲ公表シタル由ナリ

今次會議ノ目的ハ九國條約ノ規定ニ依リ極東ノ事態ニ關
シ充分且隔意ナキ意見ヲ交換スルニアリテ招請狀ニ依レ
ハ列國ハ極東ノ事態ヲ檢討シ現ニ極東ニ行ハレタル或悲
シムヘキ紛爭ノ終結ヲ速カナラシムヘキ平和の方策ヲ攻
究セントスルモノナリ曩ニ「ラヂオ」放送ニ於テ述ヘタ
ル通り今次會議ノ目的ハ合意ニ依リ支那ニ於ケル事態ノ
解決ヲ圖ルニアリテ吾人ハ此ノ解決案發見ノ爲支那及日
本ヲ含ム九國條約署名國ト協力セントス「デヴィス」代

表ノ會議參列ハ米政府ノ他國政府ニ對スル何等ノ「コミットメント」ヲ伴フコトナク行ハルモノナルコト勿論ナリ

二、右聲明發表ノ内情ニ關シ「トリビューン」特電ハ同日「ハイラム、ジヨンソン」カ米政府ハ「デヴィス」代表ノ會議出席決定以前豫メ英政府トノ間ニ了解ヲ遂ケタリト確信スル旨ヲ聲明シタルニ對スル應酬ナリト報シ居レリ

白へ轉電セリ

白ヨリ在歐各大使、壽府へ轉報アリタシ

編 注 本書第132文書。

911 昭和12年10月21日

在伊國堀田大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議に關する対日協力を伊国外相言
明について

ローマ 10月21日前発

本省 10月21日前着

第二二三號

「二十日會談ノ際「チヤノ」外相ニ九國條約ニ關スル伊ノ態度ニ付質問セルニ「チ」ハ既ニ貴電第一八八號ノ趣旨ヲ在東京大使ヲシテ日本ニ通告セシメタル旨ヲ語り尙白耳義ハ獨逸、葡萄牙ニ對シテモ會議招請狀ヲ發シタル故伊ハ是等諸國ト共同シテ日本ノ爲ニ努力シ得ル次第ナルカ伊ハ日支紛争ニ付テハ飽迄日本ノ味方ヲ爲スコトニ方針ヲ決定シ居ルヲ以テ此ノ點ハ充分伊ヲ信頼セラレテ可ナルヘク從テ會議開催ノ曉ニハ貴大使ト密接ナル連絡ヲ取り伊全權ハ日本ノ代表者ト心得自由ニ註文セラレ度シト述ヘ伊國政府ハ「アルドロバンデイ」(元「リットン」委員會委員)ヲ會議代表トシテ選任セル旨附言セリ

抑々伊カ九國條約關係國會議ニ參加セントスルハ同國カ九國條約調印國ニテモアリ又北支、上海ニ兵力ヲ派遣シ居ル關係上極東問題ニ付英佛ト同等ノ發言權ヲ保有セントスルノ底意ニ出ツルモノニシテ會議開催ヲ阻止スル能ハサル以上ハ伊カ之ニ參加スルコトハ日本ニ對シ利益多シト認メラル就テハ「チ」外相ノ申出モアルコトナレハ會議開催ニ際シテハ先方ト充分連絡出來得ル様日本政府

ノ御方針、御希望等詳細御電報請フ

三、「チ」ノ内話ニ依レハ二十日蔣方震「チ」ヲ來訪シタル
カ「チ」ハ支那カ伊「エ」紛争ノ際聯盟ノ制裁ニ加ハリ
タルコトヲ理由トシテ此ノ際支那援助ノ態度ニ出ツル能
ハサル旨ヲ淡白ニ答ヘ尙蔣ハ「ムソリーニ」首相ニ會ヒ
度キ希望ヲ述ヘタルモ「チ」ハ之ヲ拒否セル趣ナリ
在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典ヘ轉電セリ

~~~~~

912

昭和12年10月21日

広田外務大臣より  
在ベルギー來栖大使宛(電報)

在本邦ベルギー大使が九国条約會議への招請  
状を手交しわが方の参加要請について

付記一 昭和十二年十月二十日付

九国条約會議への対日招請状

二 右和訳文

本省 10月21日後9時50分発

第七六號

二十一日午前十時半白國大使本大臣ヲ來訪シ九國條約會議  
ニ對スル招請狀(貴電第二〇六號)同文ニテ二十日附)ヲ手

交セリ

右交付ニ際シ白國大使ハ白國政府ガ今次會議ノ招請國ト爲  
リタルハ自己ノ發議ニ非ズ白ノ支那ニ有スル利害關係ガ少  
ク從テ日支紛争ニ對シ公正ナル態度ヲ執リ會議ノ成功ニ貢  
獻シ得ベキヲ理由トシテ英米ヨリ慫慂セラレタルニ依ル白  
トシテハ日本ノ爲ニCableナルコト以外他意ナシ本國政  
府ノ電報ニハ本件提議ハ九國條約ノ範圍内ニ於テ且聯盟ノ  
埒外ニ於テ作成セラレタリト在リ日本ノ參加ヲ希望スト述  
ベタリ

本大臣ハ英ガ今次會議ノイニシアチヴヲ執レル動機如何ト  
質問セルニ白國大使ハ何等公ノ情報ヲ有セザルモ英ハ紛争  
ノ圓滿解決ヲ計ルト言フ以外ニ動機ナシト考フト答ヘ、又、  
招請狀ハ九國條約ノ署名國(自治領ヲ含ム)及加入國(瑞典、  
諾威、丁、墨、ボリビヤ)ニ發送セラレタリ尙白國政府ハ  
獨乙ノ參加ヲ希望シ居レリト述ベタリ

尙招請狀持參ノ遲延セル理由ヲ質セルニ本國政府ノ訓令ヲ  
待チ居ルウチ他國ハ招請狀ヲ受領セルモ日本政府ハ未ダ正  
式招請ニ接セザル趣旨ノ新聞報道ヲ見タルニ付昨二十日本  
國政府ニ其旨電報セルニ今早朝二十日附ニテ本國ヨリ訓電

ニ接セル次第ナリト釋明シタリ

在歐各大使、壽府、蘭、葡、瑞典へ轉電アリタシ  
米へ轉電セリ

(付記一)

#### NOTE VERBALE.

Donnant suite à une demande du Gouvernement de Grande Bretagne, faite avec l'approbation du Gouvernement des Etats-Unis d'Amérique, le Gouvernement du Roi propose aux Etats signataires du traité du six Février 1922 de se réunir à Bruxelles le 30 de ce mois à l'effet d'examiner, conformément à l'article sept de ce traité, la situation en Extrême-Orient et d'étudier les moyens amiables de hâter la fin du conflit regrettable qui y sévit.

Tokio, le 20 octobre 1937.

編 注 本付記一は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成

「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結

國會議經緯」より抜粋。

(付記二)

口上書

米國政府ノ同意ヲ以テ爲サレタル英國政府ノ要請ニ從ヒ白耳義王國政府ハ千九百二十二年二月六日ノ九國條約署名國ニ對シ同條約第七條ニ基キ東亞ニ於ケル事態ヲ檢討シ且該地域ニ行ハルル遺憾ナル紛爭ノ終結ヲ促進スヘキ和協手段ヲ攻究スル爲本月三十日「ブリュッセル」ニ會合センコトヲ提議ス

一九三七年十月二十日 東京ニ於テ

編 注 本付記二は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成

「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結

國會議經緯」より抜粋。

~~~~~

913 昭和12年10月21日 在伊国堀田大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議に当たつては英米など關係諸國
の和平斡旋を頑なに拒絶すべきではないなど
會議への対応につき意見具申

ローマ 10月21日後発
本省 10月22日前着

第二二四號(極秘)

往電第二二三號二關シ

一、國際聯盟總會ノ決議ニ基ク九國條約國會議ニ對シテハ我國トシテ參加ヲ拒絕スヘキコト勿論ナリ其ノ理由ハ總會決議カ日本ノ行動ヲ非難シ支那援助ノ性質ヲ有スルノ點ナルヘク(條約論乃至法律論ニ深入リセサルコト得策ナルヘシ)唯此ノ際慎重ナル考究ヲ遂クヘキハ今日迄我方ノ堅持シ來レル第三國介入排斥ノ方針ニ或程度ノ緩和變更ヲ加フルノ要ナキヤ否ヤノ點ニ存スヘシ

二、日本ノ不參加ニ依リ武府會議ハ實質的成果ヲ舉クルコト不可能ニ終ルヘシト推測セラルルモ我國ニ於テ之ニ對シ飽迄拒否排撃ノ非和協的態度ニ終始スル場合ニハ英米ノ輿論ヲ一層惡化シ支那側ニ活躍ノ機會ヲ與ヘ或ハ聯盟ニ於ケルト同一ノ險惡ナル空氣ヲ醸成シ會議參加國ト我國トノ間ニ深刻ナル對抗狀態ヲ出現スルカ如キコトナキヲ保シ難シ

三、英米兩國政府カ日本ノ會議參加ヲ希望スルハ自國ノ在支

權益擁護ヲ念トスルト共ニ平和論乃至人道論の國內輿論ヲ無視シ難キ事情アルニ出ツルモノト觀察セラルル處我方ニ於テ日支兩國間商議促進ノ範圍内ニ於テ其ノ斡旋ヲ認諾スル丈ケノ餘裕アル態度ヲ示スコトトセハ我國不參加ノ儘會議開催ヲ見ル場合ニ於テノ關係諸國トノ個別的接觸ヲ保チ外部ヨリ會議ヲ適當ニ誘導スルコト必スシモ不可能ニアラサルヘク伊國ノ會議參加ハ其ノ意味ニ於テ却テ我方ニ都合ナルヘシ又何等カノ方法ニ依リ、二掲ケタル我方異議ノ理由カ除去セラレタル場合(例ハハ聯盟ノ決議ト離レタル別個ノ會議ト認ムルコトヲ得ルニ至リタル場合)其ノ情勢次第ニテハ(例ハハ停戰及講和條件ノ内容ニ立入りテ干渉セサルコトノ保障ヲ得タル場合)進ンテ會議ニ參加スルコトモ考慮ノ價值アルヘシ

四、今次事變ノ終結ヲ圖ルニ當リ最モ留意スヘキハ對蘇關係ニアルコト言フ俟タス從テ戰局ノ長期ニ亘ルヲ避ケ國力ノ消耗ヲ最少限度ニ止ムル方法ニ出ツルヲ緊要トスヘキ處現下ノ國際情勢ヲ考フルニ九國會議開催ノ此ノ機會ヲ捉ヘ對支平和回復ノ端緒ヲ作ル用意ヲ缺クニ於テハ英米ヲ驅ツテ支那援助ニ走ラシメ延イテ南京政府ノ抵抗力ヲ

増加シ蘇聯ノ地位ヲ強化スル結果ヲ見ル危險アリ我軍ノ
赫々タル戰勝ニ拘ラス時局ノ收拾ニ意外ノ障礙ヲ來スナ
キヤヲ危懼セラレ我政府ニ於テハ是等ノ點ニ對シ既ニ充

分ナル考慮ヲ加ヘラレ居ル儀ト存スルモ外交上重大ナル
時機ニ到達セルモノト思料セラルルニ付蛇足ヲ顧ミス卑
見具申ス

米、在歐各大使(土ヲ除ク)へ轉電セリ

~~~~~

914 昭和12年10月22日

### 九国条約會議に關する外務省首腦と外務長老 との懇話會要旨

九國條約國會議ニ關スル外務長老懇話會(覺)

一、昭和十二年十月二十二日午后四時三年町外務大臣官邸ニ  
於テ開催

一、出席者

長老側 芳澤謙吉氏、有田八郎氏、佐藤尙武氏、長岡  
春一氏、山川端夫氏、永井松三氏、出淵勝次  
氏、松田道一氏、田中都吉氏、林久治郎氏、

大田爲吉氏、松島 肇氏、徳川家正氏、

本省側 廣田大臣、堀内次官、各局部長、祕書官、

一、談話要領

廣田大臣 戰局ノ進展ニ連レ將來ヲ考ヘナケレバナラナイ  
ノデ目下關係當局ト種々打合中デアルガ今迄ニ概念トシ  
テ了解ヲ得テ居ル事項ノ大体ヲ申上ゲル。

先ヅ事變處理ノ主眼ハ出來ルダケ將來ニコ、ダ、ワ、リヲ殘サ  
ヌコトニ置キソウ云フ解決方法ガアレバソレデ進ミ度イ  
ト考ヘテ居ル。從テ領土割讓ハ問題トシナイデ行キ度イ。  
從來ハ北支等デハ相當程度内政ニ干與シテ居タガソレガ  
種々障礙トナツテ居タノニ鑑ミ今次事變ノ處理ニ當ツテ  
ハ成ルヘクソウ云フ遣リ方ヲ避ケ度イ。滿洲國ノ延長ト  
ナルガ如キコトハ極力避ケル。又軍隊ト軍隊トノ衝突ヲ  
防止スル爲ニ現在ヨリモ廣範圍ニ亘リ非武裝地帶ヲ設定  
シ右地帶内ノ治安ハ保安警察ヲシテ當ラシメル積リデ居  
ル。又從來經濟方面デ日支間ノ問題トナツテ居タモノノ  
解決ヲ圖ル考ヘデアル。上海方面ニ於テモ非武裝地帶ノ  
設定ヲ考慮シテ居ル。次ニ日支全般ノ問題トシテハ航空、  
海運其ノ他經濟上ノ諸問題(關稅問題等ヲ含ム)ノ具體的

解決ヲ計リ此ノ「ライン」ヨリ日支親善工作ヲ立テ進ン  
デ防共ヲハツキリサセル方ニ向ヒ度イ。内蒙ハ事情ガ許  
セバ内蒙ト同ジ状態トシ防共ニ資セシメ度イと思ツテ居  
ル。

以上ノ外支那ニアル邦人ノ財産モ多大ノ損害ヲ蒙ツテ居  
ルノデアルカラ賠償ノ問題モ起ツテ來ルト思フ。

以上ハ支那側ガ今直ニ和議ヲ申出テ來ルトキノ條件ノ大  
体デアルガ戦局ガ將來尙相當期間ニ亘ツテ長引クトキニ  
ハ國民ノ犠牲及戰果ニ對スル期待ノ大ナル點等カラ見テ  
更ニ進ンダ條件ヲ出スコトナルカモ知レナイ

自分ノ見ル所デハ蔣介石ハ今日迄ノ所極メテ頑強デアル、  
コレハ或ル種ノ方法デ探グラセタ所ト一致シテ居ル。蔣  
ハ内政關係上ノ立場モアリ最后迄抵抗シテ死ヲ覺悟シテ  
居ル様ニ思フ。若シ上海デ近ク徹底的打撃ヲ與ヘルコト  
ガ出來レバ或ハ蔣ヲ反省セシメルコトニ效ガアルカモ知  
レナイガ、ソレモ果シテドウダカ疑問デアル。自分ハ支  
那ニ勢力ヲ有スル第三國ヲシテ蔣ヲ反省セシメ日支間ニ  
話合ヲ行フ緒ヲツケルコトモ一方法デアルト考ヘ折角關  
係當局間デ打合中デアル。

一方國際聯盟ハ御承知ノ通ノ決議ヲシ又九國條約會議ハ  
武府デ開催サレルコトニナツテ居ル。武府ノ會議ハ直接  
國際聯盟ノ決議ト關係ナク九國條約ノ規定ニヨリ招集サ  
レル形ヲツツテ居ルガ同會議ガ聯盟ト無關係デアルト考  
ヘルコトハ出來ナイ。同會議ニ對シテハ進ンデ出席シ充  
分日本ノ立場ヲ明ニスベシト云フ論モ立ツガ國民一般ノ  
考ヘ方及軍事行動ト相關聯シテ考ヘルト結局之二參加シ  
ナイ方が可ナリト考ヘテ居ル。自分ノ考ヘデハ會議招請  
狀ニ對シテ不参加ノ回答ヲ出スト同時ニ日本ノ氣持ヲ相  
當詳細ニ聲明スル積リデアル。即チ將來ノ外交運用上ノ  
諸點ヲモ考慮ニ入レ會議ガ日支紛爭解決ニ資スル所ナキ  
ヲ明ニシ度イと思ツテキル。只今右同答案及聲明案ヲ朗  
讀セシメルカラ何分ノ御高見ヲ承リ度イ

(三谷條約局長同答案及聲明案ヲ朗讀)

山川氏 不戰條約ニ於テモ九國條約ニ於テモ自衛權ノ發動  
ハ除外例トサレテ居ル。聯盟ノ決議ニ於テハ近衛首相ノ  
演説トカ内閣ノ聲明トカ引用シテ日本ノ行動ハ自衛權  
ノ發動トシテモ不可デアルト云ツテ居ル様デアルガ右ハ  
如何ナル意味デアルカ。

廣田大臣 自衛權ノ發動トシテモ度ガ過ギテ居ルト云フノ  
デアル。

芳澤氏 大臣ノ述ベラレタ事局<sup>時</sup>收拾ノ方針ハ自分達ノ考ヘ  
ト一致スルモノデアツテ自分ハ全面的ニ賛成スル。併シ  
右方針ハ支那側ガ日本ト話合ヲスル氣ニナラナケレバ實  
現出來ナイノデアル。只今ノオ話ニヨルト蔣介石ハ尙極  
メテ頑迷デアツテ日本ト手ヲ握ル意ナシトノコトデアル  
ガ若シソウダトスレバ折角立派ナ方針ヲ立テテモ實行不  
能デアル。御承知ノ通支那人ハ周圍ノ情勢ヲ見テ自己ニ  
有利ニ事ヲ運フコトニ慣レテ居ル。從テ今度ノ會議デモ  
若シ各國ガ日本ニ反對ノ決議ヲスレバ蔣介石ノ態度ハ不  
變デアロウ。ソノ場合ニハ長期戰モ致シ方アルマイ。併  
シソウ云フ場合ニ於テモ戰鬭行爲ハアル限界ニ於テ止マ  
ルコトガ必要デアル。上海戰ハ南京攻略迄ヤラナケレバ  
ナラヌトカ北支ハ黃河ノ南迄追ハナケレバナラヌトカノ  
論モアルガ自分ハ考ヘモノダト思フ。例ヘバ上海ノ攻略  
ガ一段落付ケバ既ニ占據シタ「ボジションズ」ヲ確保シ  
ツツ戦局ヲ見送り其ノ間ニ於テ外國ノ形勢ヲ我方ニ有利  
ニ導ク様外交上ノ努力ヲスルコトガ必要デハナイカト思

フ。南京政府ガ蔣ノ下ニ存續スル場合ノ外色々ノ「ボジ  
リテイズ」ガ考ヘラレルカ自分ハ蔣政權ガ崩壞シナイ  
デ日本トノ間ニ話合ガ出來ル時期ノ來ルコトヲ希望シ只  
今大臣ノ述ベラレタ結構ナ方針ヲ實現スル日ノ近カラ  
ンコトヲ切望スル。

田中氏 只今讀ミ上ケラレタ回答案ニハ第七條ガウ、タ、ツ、  
ナイ様ニ思ツタガ日本ハ第七條ヲ無視スルト云フ意味デ  
ハナイト云フコトヲ明ニスル必要ハナイカ。

有田氏 田中氏ノ意見ニ同感デアル。第七條ハ會議以外ノ  
個別的協議ヲ規定シテ居ルト云フコトハ云ヘナイダロウ  
カ、極東ノ問題ニ直接重大ナ關係ヲ持タナイ國ト一緒ニ  
會同シテ討議ハ出來ナイト云フ氣分カラ云ヘハ第七條ハ  
個別的協議ヲ規定スルモノトノ理屈ヲツケタ方カ好イ様  
ニ思フ。將來九國條約カラ脱退シナケレハナラナイトキ  
ノ伏線トシテモコンナ理屈ヲ必要トスルト思フ。

堀内次官 今次會議ニ付テハ外國ノ調停(メデイエーショ  
ン)ハ一切排除スルト云フ行キ方ト九國條約自體ヲ否定  
スルト云フ行キ方トニツアル。前者ハ露骨ナ直接法デ云  
ヒ表ハスモ又ハ間接法テ直接交渉以外紛爭解決ノ途ナシ

ト云ヒ表ハスモドチラモ面白クナイ。又後者ノ如ク九國條約ヲ陳腐ナモノトシテ否定スレハ外國側ハ日本ハ今次ノ行動ヲ條約違反ニ非スト云ヒ乍ラソレテハ理屈カ通ラナイカラ否定論ヲヤルノテアルト解釋スルテアロウ。又只今ノ御説ノ通第七條ヲ引用スレハソレハ九國條約ノ適用ヲ認メルコトニナリ之レ亦面白クナイ。此等ノ諸點ニ觸レス同時ニ「メデイエーション」ハ不可ナルモノ二國ノ斡旋「グッド、オフィツセス」ハ必スシモ拒否スルモノテナイトノ氣持ヲ婉曲ニ云ヒ表ハス爲ニ草案ノ様ナ表現ヲ用ヒタノテアル。

廣田大臣 會議ハ不可ナルモ外ノ方法ナラハヤリ方モアルト云フ意味ヲ含マセタモノテアル。

出淵氏 第七條ハ個別的協議ヲ規定スルモノテハナイ。當然會議ヲ豫定シテ居ルモノテアツテ會議ヲヤラヌ場合ニ於ケル「コンミュニケーション」ヲ規定スルモノト思フ。廣田大臣 歐米ニ於ケル今次事變ノ取扱方ヲ見ルニ聯盟ハ九國條約會議ニ責任ヲ轉嫁シテ逃ケテ打チ九國條約國ニ付テ見レハ英米共招請國タルノ責ヲ執ルヲ忌避シテ白國ニ頼ミ白國ハ招請ハスルカ米國ノ同意ヲ以テナサレ英國

ノ要請ニ從ヒト云フ形ヲトルト云フ有様テ何レモ責任ヲ轉嫁シテ居ル。之レハ各國共事件ヲ取り上ケテハ見タカ結末ヲツケルノニ苦心ヲシテ居ルコトヲ示スモノテ自分ハ會議ノ結果ハ何レカノ一國ヲシテ日支間ニ口火ヲ切ラセルト云フコトニナリハシナイカト考ヘテ居ル。ソノ一國トハ結極英國ニナルト思フ。

佐藤氏 自分ハ堀内次官ノ意見ニ同感デアル。會議ニ参加スヘキカ否カノ點ニ付テハ不参加ヲ可トスル。其ノ理由ハ會議ニ出席セハ會議ハ先ツ停戰ヲ勸メ停戰ノ實行ヲ見テ而ル後ニ會議ニ入ルト云フ形ヲトルコト必定テアルカラテアル。

事變處理ノ根本問題ニ付テハ大臣ノ説ニ賛成スル。但シ賠償ノ點ハ同意出來ナイ。

要ハ禍根ヲ將來ニ殘サヌ様解決方法ヲ講スルコトテアル。此ノ意味カラ邦人ノ被害ニ對スル賠償ノ如キハ支那側ニ要求スヘキモノテナイト思フ。蔣介石ニ轉向ノ機會ヲ與ヘルコトカ大事ナ點テアツテ蔣ヲシテ轉向シヤウト思ツテモナシ得ナイ様ナ羽目ニ陷ルヘキテハナイ。北支ニ領土的野心ノナイコトハ勿論テアルカ非武裝地帶ノ設定以

外ニハ自治ナトニ拘ハラナイテ奇麗ニ返スヘキテアル。  
然シ蔣カ轉向スル迄ハ何處迄モ戰爭ヲ續ケ一寸テモ手ヲ  
弛メテハイケンナイ。此ノ際政府ノ最モ留意シナケレハナ  
ラナイコトハ軍力別行動ヲ取ラヌ様ニスルコトテアル。  
政府ハ非常ナ決意ヲ以テ上述解決案ノ實行ニ邁進スヘキ  
テアツテ若シ之レカ出來ナケレハ日本ハ信ヲ列國ニ失フ  
コトトナルテアロウ。

國民ノ戰果ニ對スル期待カ過大トナルコトハ必至テアル  
カ政府ハ國民ヲシテ失望セシメナイ爲ニハ軍ニ對シテ工  
作スルト同時ニ輿論ノ指導ニ二分ノ努力ヲ拂フヘキテ  
アル。

廣田大臣 賠償問題ハ極メテ困難ナ問題テアル。第三國カ  
ラ日本ニ對シテ損害賠償ヲ申出テ來ト場合之ヲ跳ネツケ  
ルコトハ相當困難テアルカラ外國人ニ對スルモノハ支那  
側ヲシテ支拂ハシメル様ニシナケレハナルマイ。何レニ  
シテモ國民ヲ満足セシムルコトハ困難テアルカラ自分一  
個ノ考(之レハ未タ何人ニモ話シタコトナシ)テハ西原借  
款ヲ完全ニ支拂フヘシト云フ様ナ形式トシテハ如何カト  
思ツテ居ル。

陸軍ニ對シテ工作スルコトハ勿論大事テアルカソノ點ニ  
關シ杉山陸相ハ過日「ユー、ピー」ノ「イーキンス」ニ  
與ヘタ會談ニ於テ領土の野心ナキコト及列國ノ權益ヲ害  
セス將來ノ協力ヲ望ムコトヲ明言シテ居ルシ又本月二十  
一日陸相ハ英國大使「クレイギー」ニモ同様ノ話ヲシテ  
居ル所カラ見テ軍內部ニ種々ノ論ハアルカ主腦部トシテ  
ハ方針決定シテ居ルモノト見テ好カロウ。

自分ハ戰後經營ニ關シテハ日露戰爭後ト同様ナ考ヘ方カ  
支配スルノテハナイカト考ヘテ居ル。即チ日露戰爭後ハ  
國民ノ注意ハ經濟上ノ利權ニ向ツタノテアルカ今次事變  
ニ於テモソウテアロウト思フ。出先軍人等モ鐵道利權位  
ヲ得レハ大体満足スルノテハナイカト考ヘテ居ル。

山川氏 今次事變ハ自衛權ノ發動テアルカ支那ノ出方テ  
段々擴大シタノタト云フ意味ヲ明確ニスル要カアル。

長岡氏 聲明ノ冒頭ニ滿洲事變迄ニ至ル支那側ノ排外政策  
ヲ書キ加ヘル方カ外國側ヲ納得セシメルニ一層ノ效果カ  
アルト思フ。

出淵氏 九國條約ハ有效テアルカ同條約締結當時ト今日ト  
ハ事態カ變ツテ居リ適用ニ困難カアルト云フ趣旨ヲ一行

テモ好イカラ書キ加ヘテハ如何。

林氏 杉山陸相ノ言ハ形式的ニハソウテアロウカ實際ハソウテハナイト云フ疑問ヲ起サシメル。政府力其ノ所信ヲ實行スル爲ニハ早キニ及ンテ對内的ニ國民ヲ納得セシメル工作ヲヤラナケレハナラナイ。自分ハ今日外交協會ニ出席シテ驚イタノテアルカ同協會ノ名譽幹事タル人ノ口カラ支那共同管理論ヲ聞イタ。外交協會ノ會員ニシテ尙右ノ如キ意見ヲ抱イテ居ルノテアルカラ一般國民ヲシテ政府ノ所信ニ聽從セシムルコトハ極メテ困難テアルコトヲ充分悟ラナケレハナラナイ。

出淵氏 自分ハ蔣介石ハ如何ナル條件ニモ乗ツテ來ナイ様ニ思フカ如何。又國民ヲ指導スルコトハ實際問題トシテハ不可能テアルト思フ。

林氏 兎モ角政府ハ早キニ及ンテ國民ヲ指導スル爲何等カノ手ヲ打ツコトカ急務テアル。

(散會)

915

昭和12年10月22日

在ベルギー好富(正臣)臨時代理大使より  
廣田外務大臣宛(電報)

九国条約會議招請状のわが方への手交遅延につきベルギー外務当局へ注意喚起について

別電 昭和十二年十月二十二日発在ベルギー好富臨時代理大使より廣田外務大臣宛第二二五号

ベルギー側が示した遅延理由

ブリュッセル 10月22日後発  
本省 10月23日前着

第二二四號(至急)

二十二日本官政務局長ヲ往訪最近白國ノ對支武器輸出頻リニ我國新聞ニ報道セラレ輿論ハ九箇國會議ヲ前ニ白國ヲ以テ支那ヲ援助スルモノト爲シ甚タ不滿ノ意ヲ表シ居リタル折柄今次會議招請狀カ米國全權ノ出發後而モ既ニ六箇國迄受諾ヲ回答セル後ニ發セラレタルコトハ愈輿論ヲ激昂セシメ我方參加ヲ益々困難ナラシメツツアルヤニ思考スト述ヘタル處局長ハ招請狀遅延ハ全ク當方ノ手違ニテ(別電ノ事情)何トモ申譯ナキ次第ナリト陳謝シタル後は非日本ノ參

加ヲ切望スト述ヘタルニ付私見トシテ抑々今次會議ハ九國  
條約第七條ニ準據スル趣ナル處今同條ノ規定ヲ見ルニ條約  
ノ適用ヲ必要トスル事態出現セリト思考スル締約國アル場  
合ハ斯ル締約國ノミカ意見交換ヲ爲スヘシトノ趣旨ニシテ  
會議招集等ハ何等問題ニアラサルノミナラス一旦會議招集  
ヲ決定セラレタル後條約適用問題ニ關シ何等意思表示ヲ爲  
ササル墨西哥「ポリビヤ」等迄ヲモ招請スルハ同條ノ範圍  
ヲ逸脫スルモノト言フヘク更ニ締約國以外ノ蘇聯邦等ヲ招  
請セントスルカ如キハ寧口同條ノ違反ナリトノ疑問モ立チ  
得ル譯ナリ何レニセヨ會議招集ヲ前ニ前述ノ通り諸種不幸  
ナル事態出現シ甚タ幸先惡シト言フヘク他面白國ハ北支等  
ニモ利權ヲ有シ日本トノ協調ハ愈必要ナル際面白國カ日本  
ノ感情ヲ害スルカ如キコトトモナラハ日白從來ノ友好關係  
ニ鑑ミ甚タ遺憾ト謂フヘク旁政府ノ訓令ニ依ル次第ニハア  
ラサルモ此ノ際思ヒ切リテ會議ヲ延期スルコト諸種ノ點ヨ  
リ好都合カト思料スト述ヘタル處局長ハ實ハ白國政府内ニ  
ハ自分ヲ初メ本件會議ノ招集殊ニ當地開催ニ反對セル者鮮  
カラス一時ハ日本ノ参加力決定スル迄ハ當地開催ヲ拒絕ス  
ヘシトノ意見モ出テタル狀況ニテ白國ノ招請受諾モ其ノ爲

延引ニ延引ヲ重ネタル次第ナルカ今日ト雖白國トシテハ迷  
惑千萬ニ感シ居ル譯ニテ貴見ノ次第ハ大臣ニ報告スヘク若  
シ會議延期トモナラハ望外ノ幸ナリト頻リニ述懷セリ  
米、壽府、在歐洲各大使(土ヲ除ク)ハ轉電セリ

(別電)

ブリュッセル 10月22日後發  
本省 10月23日前着

第二二五號(至急)

招請狀發電原案ヲ示シ宛先トシテ伊、日、支等列舉シアル  
傍二局長自ラノ筆ニテ大公使駐劄地名記入シアルニ拘ラス  
係官力發電セサリシ趣ナリ  
米、壽府、在歐各大使(土ヲ除ク)ハ轉電セリ



916

昭和12年10月22日 在メキシコ越田(佐一郎)公使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議に関するメキシコ外務次官との  
意見交換について



第一三九號

メキシコシティ 10月22日後発  
本 省 10月23日夜着

一、<sup>(1)</sup>二十一日外務次官(大臣旅行不在)二面會ノ序ヲ以テ本使ヨリ墨國政府ハ白耳義招集ノ九國條約會議ノ招請ニ應シ「イシドロ・ファベラ」(國際聯盟ニ於ケル墨國代表)ヲ委員ニ任命セラレタル様ナルカ既ニ訓令ヲ發セラレタリヤト尋ネタル處次官ハ未タナリ日本ハ參加スヘキヤト反問セルニ付昨夜ノ東京「ラヂオ・ニユース」ニ依レハ招請ヲ受ケタルモ未タ回答ノ運ニ至ラサル由ナリト答ヘ

二、次テ本使ハ右會議ニ於テ墨國委員カ平和促進ニ盡力セラルルコトハ當然ナルヘキモ日支事變ハ頗ル複雑セルヲ以テ之カ取扱ニハ慎重ナルヲ要スヘク往年滿洲事變ニ關スル聯盟總會ノ際東洋ノ事情ニ通曉セサル西班牙ノ「マダリアガ」氏カ濫ニ日本攻撃ノ態度ニ出テ爲ニ日西兩國間感情上少カラサル緊張ヲ生シタルコトアルニ付日墨ノ傳統的親善關係ニ鑑ミ今次ノ會議ニ於テ「ラテン」亞米利加ノ一「リーダー」タル墨國力率先シテ反日的態度ニ出ツルカ如キコトナキヲ希望スト述ヘタルニ對シ

三、<sup>(2)</sup>次官ハ腹藏ナク言ヘハ墨國ハ日支ノ何レニモ加擔セントスルモノニアラスト雖世界平和ヲ擁護セントスルモノナルト同時ニ單ニ過剩人口ノ故ヲ以テ他國ヲ侵略シ得ヘシトスルノ議論ハ承服スルコトヲ得ス若シ此ノ議論カ成立ツ場合ニハ墨國ハ他國ヨリ直ニ侵略セラルルコトナルヘシ從テ曩ニ伊「エ」紛爭ニ關スル聯盟總會ニ於テモ侵略反對ノ立場ヲ執リタルモノナリト答ヘタルニ付

四、本使ヨリ今貴官ハ侵略ナル文字ヲ使用セラレタルカ今同ノ紛爭ニ於テハ日本ハ支那側ノ挑發ニ依リ已ムヲ得ス自衛行爲ニ出テタル被害者ニ外ナラス少シク説明スレハ支那政府ハ既往十數年ニ亘リ學校、軍隊ヲ始メトシテ一般國民ニ對シ總ユル方法ヲ以テ極端ナル反日思想ヲ注入シ來タリ最近國內ノ統一略成リ軍備稍整フニ伴レ自己ノ力ヲ過信シ日本打倒ヲ夢ミ毎日的、挑發的態度ニ轉化シタルモノニテ七月初旬ノ蘆溝橋、通州事件、八月上旬ノ大山事件等ノ如キ何レモ毎日ノ結果ヨリ出テタル攻撃ナルカ右ニ對シテ日本側ハ當初隱忍自衛手段ヲ執リツツ極力不擴大方針ニ依リ局地的解決ニ努メタルニ拘ラス<sup>(3)</sup>驕慢増長セル南京政府ハ之ニ耳ヲ藉サス益々戰備ヲ整ヘ

特ニ上海ニ於テハ僅カ三千餘ノ我陸戰隊ニ對シ十萬ノ兵ヨリ成ル包圍的戰鬪體形ヲ以テ威嚇シ進ンテ射撃及飛行機ニ依リ爆撃ヲサヘ敢テシ來リ我陸戰隊及三萬ノ在留民ノ生命危殆ニ瀕シタル爲送兵シテ應戰スルニ至レルモノニシテ全ク自衛上已ムヲ得サルニ出テタルモノナルハ明白ナル事實ニシテ一方日本ハ何等領土的意圖ヲ有セス平和ヲ念トスルモノナルハ帝國政府屢次ノ聲明ノ通りナル旨詳細説明シ

五、從テ本紛爭ハ極メテ慎重ニ調査研究ノ上判斷セラルルコトヲ要スヘシトテ持參ノ若干資料ヲ手交シツツ尙不明ノ點アラハ本使ハ何時ニテモ質問ニ應スヘク又場合ニ依リテハ駐日墨國公使ノ意見ヲ徵セラルルコトト致度シト附言シ置ケリ

白、米、祕へ暗送セリ

917

昭和12年10月23日

広田外務大臣より  
在ベルギー來栖大使宛(電報)

招請状の遅延に鑑み九国条約會議の会期を日

本の都合に応じて変更する用意がある旨在本

## 邦ベルギー大使通報について

本省 10月23日後4時發

第七七號

往電第七六號ニ關シ

二十三日白國大使本大臣ヲ來訪シ日本政府ニ對スル正式招請ガ余リニ會期ニ切迫シテ提出セラレタルコトニ關シ日本ノ輿論中之ヲ問題ト爲スモノアリトノコトナル處白國政府ニ於テハ日本ノ都合ニ依リ會期ノ變更方考慮スベキ旨電報ニ接シタリト述ベタルニ付本大臣ハ日本政府ハ大体不参加ノコトニ方針ノ決定ヲ見タル次第ナリト答ヘタル處大使ハ本大臣ハ右方針ニ鑑ミ會議延期ニインタレストヲ有セズト報告スベシト述べ居リタリ  
前電通轉電アリタシ  
米へ轉電セリ

918

昭和12年10月23日

在上海岡本総領事より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議へのわが方不参加は諸般の状況

から至当と考えるも対外啓発に一層考慮をめ

ぐらすべき旨意見具申

上海 10月23日後発

本省 10月23日夜着

第一九五六號

九箇國條約關係國會議ニ對スル帝國ノ方針ハ素ヨリ不參加ニ決定ノコトト存スル次第ナルカ當方面外支側ノ意嚮ヲ見ルニ先ツ外人側ニ於テハ一部ニハ過般ノ空爆非議ニ關スル聯盟決議ノ如キハ日本側ノ會議不參加ノ齎セル結果ナレハ此ノ上ノ缺席裁判ハ日本ニ取り不利ナリトテ我方ノ參加方ヲ勸ムル者アルモ多クハ日本トシテハ聯盟ノ執リタル偏頗ナル態度ニ由來シ日本ヲ被告扱トスル如キ會議ニ參加スルコトハアルマシ又日本ノ參加ナキ會議ノ效果ハ自ラ明カナリトテ會議カ時局ノ平和的處理促進ニ資スルコト少カルヘキヲ豫見シ居リ又支那側ニ於テモ往電第一八七三號神州日報論說ノ如ク本件會議カ支那ニ與フル實質的成果ニハ餘リ期待シ居ラス唯例ノ如ク法廷戰術ニ利用セントシ居ルニ過キサルモノノ如シ

更ニ現地陸海軍ニ於テハ日本カ如何ニモ和ヲ急ク様ナル感觸ヲ與フルコトハ不可ナリトノ意見ニテ右ハ當地ノ實情ニ

照ラシ最モ至極ト認メラル

從テ此ノ際我方トシテハ何等躊躇スルコトナク會議不參加ノ旨ヲ闡明シ以テ中外ニ對シ其ノ確固タル決意ヲ示スコト適當ナルト共ニ他面前記支那側ノ宣傳工作ニ對抗スル爲ニモ對外啓發ニ一層考慮ヲ運ラシ從來ノ如ク事變發生ニ關スル我方立場及會議不參加ニ關スル説明ニ止マラス又支那膺懲論ノ如キ外國人ニ「アツピール」セサル放送ヲ止メ日支直接交渉ニ依リ時局收拾ニ關スル帝國ノ抱負經綸ノ大綱ヲ積極的ニ世界輿論ニ披瀝スル等ノ適切ナル措置ヲ講セラルルコト極メテ肝要ト存セラル

以上氣付ノ儘御參考迄

北平、天津へ轉電セリ

919 昭和12年10月26日

広田外務大臣より  
在ベルギー來栖大使宛(電報)

九国条約會議への独ソ両国参加の是非に関し  
英国が各国に対して招請回答の中で意見の開  
示を求めた旨通報

本省 10月26日後4時10分発

第八〇號

二十五日在京英國大使他用ニテ次官ヲ來訪ノ際九國條約國會議ニ關シ同會議ニ獨蘇兩國ヲ參加セシムベキヤニ關スル意見ヲ會議招請ニ對スル回答中ニ於テ表明セラレ度旨英國側ヨリ關係各國ニ通達シタル趣ニテ曩ニ大臣ニ面會ノ際此點ニモ觸レオキタルガ念ノ爲メ改メテ申上グル旨述べ居タリ結局會議ニ參加セザルベキ帝國トシテハ直接考慮ヲ要スル次第二アラザルモ列國ノ回答振ニ關スルコトニモアリ右不取敢

在歐大使(除土)へ轉電アリ度

米へ轉電セリ

920 昭和12年10月26日 広田外務大臣より  
在英国吉田大使宛(電報)

九国条約會議へのわが方参加を在本邦英國大

使が再度要請について

本省 10月26日後7時10分発

第四六一號

二十六日英國大使本大臣ヲ來訪シ英國政府ハ日本ノ九國條

約國會議ニ參加方切望シ居ル次第ハ從來御話申上ゲタル通ナルガ本國政府ヨリ重ネテ訓令ノ次第モアリ更ニ御再考ヲ願ヒ度萬一日本ノ不參加ニ決セラレタル場合ニ於テモ會議ニ對シテ反抗的態度ニ出デラレザル様致度若シ日本ガ斯ル態度ヲ採ラルルニ於テハ會議參加國ヲ敵ニ廻シ支那側ニ有リト爲ル虞アルベキニ付何トカ留意アリ度旨申述べタルニ付本大臣ハ右ハ自分ニ於テモ十分考慮シ居ル所ナルガ政府ハ大体不參加ニ決定シ居リ回答案文ハ一兩日中ニハ決定スベキニ付愈々回答ノ際ハ貴大使ニ對シテモ政府ノ意嚮ヲ御話致スベキ旨答へ置キタリ

米へ轉電セリ

在歐大使へ轉電アリ度

921 昭和12年10月26日 在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛(電報)

ベルギー内閣の総辞職によつて九国条約會議

開催延期について

ブリュッセル 10月26日後発

本省 10月27日前着

第二三四號(至急)

外務省係官ノ内話ニ依レハ内閣總辭職ノ結果九國會議ヲ十一月三日ニ延期セル趣右不取敢  
在歐各大使、壽府、米、蘭、葡、瑞典へ轉電セリ

922

昭和12年10月26日  
在米國齋藤大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議に關する英米事前協議の内容な

ど情報報告

ワシントン 10月26日後発  
本 省 10月27日前着

第五六八號(極秘、部外秘)

(1) 二十二日須磨「クリーブランド」ニ於テ開催ノ「フオリン  
ポリシーカウンシル」ノ會合ニ於テ日支問題ニ關シ講演ノ  
爲同地出張ノ節二紐育「フオリンポリシーアソシエーショ  
ン」會長「ブユーエル」ハ須磨ニ對シ最近國務省方面トノ  
接觸ニ依リ得タル印象トシテ左記趣旨ヲ内話シタル由ナリ  
(將來ノ關係モアリ部外秘トセラレ度シ)  
一、今次九國會議ニ付テハ日本ノ參加ニ便ナラシムル爲聯盟

ト全然別個ノモノトシテ開催方英國側ヨリ米ニ提案アリ  
タルコト

二、米ヨリ英國ニ對シ右會議ヲ成功セシムル爲英ニ於テ如何  
ナル案ヲ有スルヤヲ問合セタルニ英ヨリ今會議ニ於テ日  
支間ノ休戦ヲ提議スルコトヲ考慮シ居ル旨及右休戦ニ關  
シ支那ハ事變前ノ原狀回復ヲ條件トスルコトヲ主張シ居  
ルモ之ハ認ムルコトヲ得ス一方日本ノ面目保持ノ爲北支  
ニ於テ日本ノ特殊地位ヲ認ムルコトモ不可ナリ結局北支  
及上海地方ニ於テ非武装地帶ヲ設定乃至擴張スルカ如キ  
案ニ依ルノ外ナカルヘキ處

若シ支那カ右案ヲ承諾セサル場合ニハ英ハ香港ヲ閉鎖シ  
米ハ中立法ヲ適用スルコトトシテ支那ヲ壓迫シ支那ニ右  
案ヲ認メシムルコト適當ナリト認ムル旨回答アリ米側ニ  
於テモ大體右「ライン」ノ心構ニテ會議ニ臨ムコトトナ  
リタルコト

三、「ノーマン、デヴィス」米國出發前紐育州「ハイドパー  
ク」ノ大統領私邸ニ於テ大統領ニ面會ノ際大統領ハ本會  
議カ何等措置ヲ採ル場合日本カ之ニ耳ヲ傾ケサル場合ノ  
方策ニ付テモ英國等トノ間ニ充分協議シ置クノ要アル旨

ヲ述ヘタルコト

四、米國カ「オワイシアリー」ニ對日「ボイコット」ニ乗出  
スヘキヤ否ヤニ付テハ專ラ一般輿論ノ動向ヲ注意シ居ル  
コト

(紐育ヘ托送ノ筈)

英ヘ轉電セリ

英ヨリ在歐各大使及壽府ニ轉報アリタシ

~~~~~

923

昭和12年10月27日

広田外務大臣より
在ベルギー來栖大使宛(電報)

九國條約會議へのわが方不参加回答を在本邦

ベルギー大使へ手交について

付 記 昭和十二年十月二十七日付

右わが方不参加回答

本省 10月27日後7時45分発

第八二號

二十七日夕白國大使ヲ招致シ帝國政府ノ九國條約會議ニ對
スル不参加ノ回答(佛譯文添附)及參考トシテ帝國政府ノ聲
明ヲ交付シタリ英、米大使ニハ本大臣ヨリ獨(參事官)、伊、

佛大使ニハ次官ヨリ右交付ニ先チ回答ヲ内示シ置キタリ

回答文及聲明英譯文ハ至急情報トシテ又回答文ノ英譯文ハ
一般情報トシテ電報ス回答文ノ佛譯文ハ別電第八四號^(附)ノ通
本電ノミ在歐大使、壽府、蘭、葡、瑞典ヘ轉電アリタシ米

ヘ轉電セリ

(付 記)

十月二十七日帝國政府回答

帝國政府ハ米國政府ノ同意ヲ以テ爲サレタル英國政府ノ要
請ニ從ヒ千九百二十二年二月六日ノ九國條約署名國ニ對シ
同條約第七條ニ基キ東亞ニ於ケル事態ヲ檢討シ且該地域ニ
行ハル遺憾ナル紛爭ノ終結ヲ促進スヘキ和協手段ヲ攻究
スル爲本月三十日「ブリュッセル」ニ會合センコトヲ提議
セラレタル本月二十日附白國政府ノ招請ヲ正ニ受領セリ
國際聯盟總會ハ本月六日日支事變ニ關シ採擇セラレタル報
告書ニ於テ當事國一方ノ陳述ニ依據シ現ニ帝國カ支那ニ於
テ執リツツアル行動ヲ以テ九國條約ニ違反スルモノト斷定
シタリ今次帝國ノ支那ニ於ケル行動ハ支那側ノ極端ナル排
日抗日政策ノ強行特ニ實力ヲ以テスル挑發行動ニ依リ餘儀

ナクセラレタル自衛措置ニシテ九國條約ノ範圍外タルコト
ハ已ニ帝國政府ノ聲明セル所ナリ

聯盟總會ハ更ニ進テ其ノ決議ニ於テ支那ニ對シ精神的的支持
ヲ表明シ且聯盟國ニ對シ支那ノ抵抗力ヲ弱メ現在ノ紛爭ニ
於ケル支那ノ困難ヲ増大セシムル效果ヲ有スルカ如キ行動
ヲ差控ヘ且各個ニ支那ヲ援助シ得ル程度ヲ考慮スヘキコト
ヲ勸奨シタリ右ハ明ニ日支兩國ノ眞摯ナル協調ニ依リ東亞
ノ平和ヲ具現シ依テ世界ノ平和ニ寄與スル所アラントスル
帝國ノ公明ナル意圖ヲ無視シ紛爭當事國ノ一方ニ加擔シ其
ノ敵對意識ヲ鼓吹スルモノニシテ決シテ本件紛爭ノ解決ヲ
促進スル所以ニ非ス白國政府ノ招請ニハ今次會議ト聯盟ト
ノ關係ニ付何等言及スル所ナキモ聯盟力前記決議中ニ於テ
九國條約當事國タル聯盟國ノ會議ヲ示唆シ居リ又英國政府
ノ今次會議招集ノ要請ニ同意セル米國政府ハ十月六日聯盟
ノ決議ヲ支持スル旨ヲ聲明シ居ル事實ニ鑑ミ帝國政府ハ今
次會議力聯盟ノ決議ニ關聯シテ招集セラレタルモノト斷セ
サルヲ得ス而シテ聯盟ハ前項所述ノ如ク帝國ノ名譽ニ關ス
ル斷定ヲ下シ又帝國ニ對スル非友誼的決議ヲ採擇セル事實
アルニ顧ミ今次開催セラルヘキ會議ニ於テハ到底關係國間

ノ充分ニシテ且隔意ナキ交渉ヲ行ヒ日支間ノ事變ヲ現實ニ
即セル公正妥當ナル解決ニ導クコトヲ期待シ難シト認メサ
ルヲ得ス

加之今次ノ日支事變ハ東亞ノ特殊事態ニ基因シ且日支兩國
ノ生存ニ重大關係ヲ有スルモノナルヲ以テ東亞ニ於ケル利
害ノ程度相異リ甚シキハ殆ト利害關係ヲ有セサル國ヲモ含
ム多數國ノ會議ニ依リ之ヲ解決ヲ圖ルハ却テ事態ヲ紛糾セ
シメ之カ正常ナル收拾ニ大ナル支障ヲ及ホスヘキハ帝國政
府ノ確信スル所ナリ

以上ノ觀點ヨリシテ帝國政府ハ白國政府ノ招請ヲ受諾シ得
サルヲ遺憾トス

抑モ今次ノ事變ハ支那政府カ多年國策トシテ國民ニ抗日意
識ヲ扶植シ其ノ排日運動ヲ獎勵スルノミナラス赤化勢力ト
勾結シ排日抗日ノ風潮ヲ激化シテ東亞ノ平和ヲ脅威シタル
結果ニ外ナラス從テ之カ解決ノ要諦ハ支那政府ニ於テ東亞
ノ安定ニ對スル日支共同ノ責任ヲ自覺シ自肅自省以テ日支
提携ノ政策ニ轉向スルニ在リ帝國ノ列國ニ期待スル所ハ列
國カ此ノ要諦ヲ充分ニ認識スルコトニシテ此ノ認識ニ基ク
協力ノミ東亞安定ニ寄與スルコトヲ得ヘシ

昭和十二年十月二十七日

編 注 本付記は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成

「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結
國會議經緯」より抜粹。

924
昭和12年10月27日

九國條約會議不参加に關する日本政府聲明

付 記 右英訳文

九國條約國會議不参加ニ關スル帝國政府ノ聲明

帝國政府ハ九國條約國會議ニ關スル本月二十日附白耳義國
政府ノ招請ニ回答スルノ機會ニ方リ、詳細從來ノ經緯ヲ敘
シ弘ク其ノ所信ヲ中外ニ闡明セントス

一、支那ハ辛亥革命以來幾多政權ノ興亡アリタルモ其ノ一貫
セル對外政策ハ排外ニアリ、殊ニ中國國民黨カ國民政府
ヲ廣東ニ樹立シ中央政權獲得ノ手段トシテ大正十三年聯
蘇容共政策ヲ採ツテ以來其ノ排外政策ハ一層尖鋭露骨ト
爲リ支那民衆ノ排外思想亦頓ニ熾烈ヲ加フルニ至レリ之

カ爲列國ニシテ既得ノ權益ヲ犠牲ニ供シタルモノ比々皆
然ラザルナキハ今尙世人ノ記憶ニ新ナル所ニシテ殊ニ最
近十年支那ハ排外政策ノ目標ヲ主トシテ帝國ニ置ケリ
帝國ハ夙ニ東亞諸國ノ親善提携カ東亞安定ノ樞軸ナルヲ
確信シ銳意之ガ實現ノ爲努力シ來リ、就中隣邦支那ガ民
國革命以來次第ニ國家意識ニ目覺メ來レルハ日支ノ依存
關係ヲ強韌ナラシムル所以ナリトシ帝國ノ歡迎セル所ニ
シテ、帝國ハ努メテ支那ノ正當ナル國民的要望ニ副ハン
トスルノ政策ヲ採リ、或ハ支那ノ關稅自主權回復ニ卒先
協力シ、或ハ治外法權撤廢ニ關スル支那ノ要望ニ對シテ
好意的態度ヲ表明スル等、只管日支親善ノ増進ニ努力ス
ルト共ニ支那ガ之ニ順應シ來ランコトヲ待望セリ 然ル
ニ南京政府ハ帝國ノ斯ノ如キ同情アル態度ヲ多トセザル
ノミナラズ、却テ益々排日ノ武器ヲ翳シ支那ニ於ケル帝
國ノ權益ヲ潰滅セシメズンバ已マザラントスルノ慨ヲ示
シ、特ニ最近數年來ハ排日及抗日ヲ以テ國內ノ統一南京
政權強化ノ具ニ供シ、軍隊、學校ニ於テハ排日ヲ以テ精
神教育ノ根幹ト爲シ、純真ナル幼年時代ヨリ善隣ヲ仇
敵視スルノ思想ヲ注入スルガ如キ世界ニ其ノ類ヲ見ザル

ノ暴擧ヲ敢テシ、其ノ結果帝國ノ平和ナル通商、經濟上ノ活動ノ妨礙ハ固ヨリ我居留民ノ安住ヲモ脅威スルニ至リ、進デハ組織の恐怖行爲ニ迄發展シ、單ニ茲一兩年ノ例ニ徴スルモ昭和十年十一月ノ上海ニ於ケル水兵殺害事件ヨリ汕頭、成都、北海、漢口、上海ニ於ケル帝國官民ノ殺害、長沙、汕頭ニ於ケル邦人住宅ノ爆撃等戰慄スベキ事件ノ續發ヲ見タリ 深ク事態ヲ憂ヒタル帝國政府ハ隱忍以テ幾度カ南京政府ノ猛省ヲ促シタルモ其ノ效ナク、折柄客年暮ノ西安事件生ジ茲ニ國民黨共產黨ノ妥協成リ、共產分子ハ抗日ノ旗幟ノ下ニ北支竝ニ滿洲國擾亂ヲ企圖スルニ至リ、其ノ勢ノ赴ク所遂ニ本年七月七日蘆溝橋ニ於ケル支那軍ノ日本軍不法攻撃事件ヲ惹起スルニ至レリ 三、右事件發生スルヤ帝國政府ハ之ヲ以テ日支間ノ大事ニ立至ラシメザランコトヲ期シ、直ニ事態ヲ擴大局地解決ノ計ヲ立テ、作戰上多大ノ犧牲ヲ忍ンデ派兵ヲ見合セ、戰機ヲ逸スルヲ覺悟ノ上、二十數日ニ亘リ積極の軍事行動ヲ差控ヘ、以テ慎重處理ノ手段ヲ盡シタルニ反シ、南京政府ハ却テ梅津何應欽協定ヲ蹂躪シテ南京政府直屬ノ大軍ヲ續々北上セシメ、帝國軍隊ヲ脅威スルト共ニ現地支

那軍ヲ煽動スルノ擧ニ出デ、事態ハ遂ニ全面的衝突ニ迄發展スルニ至レリ 蓋シ排日ヲ國內統一ノ具トスル南京政府ハ、最近兩三年日本ヲ目標トシテ國民ニ對シ盛ニ軍事思想ヲ鼓吹スル一方多量ノ武器輸入、要塞ノ構築、軍隊ノ訓練等ニ依リ急速ニ軍備ヲ強化シタル結果支那軍憲ハ自負ノ念ニ驅ラレ國民亦自力ヲ過信スルニ至リ、帝國ニ對シテ戰ヲ挑ムノ風潮國內ニ瀰漫シ、既ニ今回ノ事變前支那ノ言論機關ハ日本及日本人ヲ敵國又ハ敵人ト呼ンデ憚ラザリシモノニシテ、一度蘆溝橋ニ事起ルヤ、南京政府ハ自ラ釀成シタル國內情勢ニ驅ラレ、帝國ノ慎重ナル態度及局地解決ノ方針モ遂ニ施スニ由ナカリシ次第ナリ

事態ハ斯ノ如クシテ擴大セラレ北支ノミナラズ中南支各地ニ於ケル帝國臣民ハ愈々生命ノ危險ニ暴サルルニ至リ 遂ニ多年營々建設セル生活ノ本據ヲ棄テ各地ヨリ全面的ニ引揚グルノ已ムナキニ至レリ。他方上海ニ於テハ、南京政府ハ從來共昭和七年ノ停戰協定ヲ遵守セズ非武裝地帶内ニ密ニ堅固ナル陣地ヲ構築スル等着々戰備ヲ整フル所アリ、於茲帝國政府ハ本年六月特ニ協定關係国会議ノ

開催ヲ求メ、支那側ノ注意ヲ喚起シタルガ、支那側ハ聊カモ其ノ態度ヲ改メズ、北支ニ於ケル衝突勃發スルヤ公然停戰協定ヲ蹂躪シテ正規軍ヲ非武裝地帯ニ侵入セシメ、遂ニ八月九日帝國海軍將兵ノ慘殺ヲ契機トシテ愈々租界攻撃ノ鋒銳ヲ現シ帝國政府ガ停戰協定關係國トモ連絡シ、隱忍ニ隱忍ヲ重ネ、作戰上重大ナル不利ヲ忍ンデ、軍事衝突回避ノ爲最後ノ瞬間迄百方努力シタルニモ拘ラズ支那側ハ突如租界防備ノ帝國軍隊及我が在留民ニ對シ空爆砲撃ヲ加ヘ、寡少ナル陸戰隊ハ固ヨリ帝國三萬ノ居留民鑿殺ヲ企圖スルニ至レルヲ以テ、事茲ニ至リテハ帝國トシテモ自衛ノ爲反撃スルノ餘儀ナキニ至レル次第ナリ

以上ニ依リ明ナル通り今次事變ノ根源ハ南京政府ノ徹底の排日政策ニ存シ、事態擴大ノ直接原因ハ南京政府ガ梅津何應欽協定ヲ侵犯シテ中央軍ヲ大舉北上セシメ、又上海ニ於テ停戰協定ヲ蹂躪シテ兵ヲ租界ニ進メタルニアリ、此處ニ於テ遂ニ帝國ハ已ムナク自衛ノ爲蹶起シ、此ノ機會ニ於テ東亞百年ノ平和確立ノ爲南京政府ノ反省ヲ求メツツアル次第ナリ 依テ今次事變解決ノ要諦ハ南京政府ニ於テ顯然其ノ非ヲ改メ排日政策ヲ拋棄シ日支提携ノ我

ガ國策ニ協調スルニアルノミ

三、顧ルニ近年南京政府ヲシテ排日ニ狂奔セシムルニ至レル重要ナル原因ノ一ハ、往年滿洲事變二際シ、國際聯盟ガ東亞現實ノ事態ヲ無視シテ採擇セル決議ニ依リ支那ノ排日政策ヲ鼓舞スル結果ヲ招來セルニアリ 然ルニ國際聯盟ハ今又卒然南京政府ノ提訴ヲ取上ゲ虚構ノ報告ニ依據シ深ク事變ノ眞因ヲ究明スル所ナク、九月二十七日ニハ防備最モ嚴重ナル南京、廣東ノ軍事施設爆撃ヲ無防備都市ノ空爆ナリト斷定シ、帝國ヲ非難スルノ決議ヲ爲シ、更ニ十月六日ノ聯盟總會ニ於テ帝國ノ行動ヲ以テ九國條約並ニ不戰條約違反ナリト斷定セルノミナラズ進デ公然支那援助ノ決議ヲ採擇シタルガ如キハ、列國ノ干涉ヲ導入シテ帝國ヲ抑ヘントスル南京政府ノ奸策ヲ支援スル結果ト爲リ、支那ノ抗日決意ヲ愈々鼓舞シ事態ノ收拾ヲ益々困難ナラシムルモノニシテ、往年ノ過誤ヲ再ビ繰返シツツアルモノト謂ハザルヲ得ズ

抑モ帝國今次ノ行動ガ支那側ノ挑發ニ對スル自衛手段ニシテ九國條約違反ノ問題ヲ發生スルノ余地ナキハ明ナルノミナラズ、近時支那ニ於ケル赤化勢力ノ浸潤、國內情

勢ノ變化等ニ依リ東亞ノ事態ハ九國條約成立當時トハ著シク異レルモノアリ。殊ニ今次招請セラレタル九國條約會議參加國ノ大多數ハ畢竟前記聯盟ノ決議ニ拘束セラルベキニ依リ、假令帝國政府ニ於テ同會議ニ參加スルモ滿洲事變ノ際ニ於ケル聯盟ノ會議ト同様到底公正ナル結果ヲ期待シ得ズ、況ヤ東亞ニ殆ド利害ノ關係ヲ有セザル諸國ヲモ加ヘタル此種ノ會議ハ徒ニ日支兩國ノ民心ヲ刺戟シ、却テ事態ヲ益々紛糾セシメ、時局收拾ニ毫モ資スル所ナカルベキヲ以テ、帝國政府ハ茲ニ參加ヲ拒絕セル次第ナリ

帝國ハ今ヤ舉國一致萬難ヲ排シテ南京政府ノ反省ヲ求メ事態ノ速ナル解決ニ邁進セントス 然レドモ帝國ハ固ヨリ列國トノ協調ヲ顧念セザルモノニ非ズ 只日支ノ紛爭ハ東亞ノ安定ニ共同ノ責任ヲ負擔スル兩國間ノ直接交渉ニ依リテノミ之ヲ解決シ得ベキモノニシテ、要ハ兩國協和ノ障礙ト爲リ常ニ帝國ノ權益ヲ脅威シツツアル南京政府ノ排日政策ト之ト勾結セル赤化勢力トヲ排除シ、以テ日支提携ニ基ク東亞恆久ノ平和ヲ確立スルニアリ 從テ帝國ハ支那ノ民衆ヲ敵視シ、其ノ領土ヲ侵略スルガ如キ

意圖ナキノミナラズ却テ支那國民ノ物質的精神の向上ヲ祈念スルモノニシテ、外國ノ在支權益ハ飽ク迄之ヲ尊重シツツ列國ト共ニ支那ニ對スル文化的又經濟的協調ヲ期シ居ル次第ナリ 故ニ若シ列國ニシテ能ク右帝國ノ眞意ヲ理解シ、南京政府ノ反省ヲ促スニ適切ナル措置ニ出ヅルニ於テハ茲ニ初メテ今次事變ノ解決ニ關シ帝國ト協調ノ途ヲ開クコトヲ得ベキナリ。

編 注 本文書および本文書付記は、昭和十二年十二月、条約

局第三課作成「『ブリュッセル』ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結國會議經緯」より抜粋。

(付記)

STATEMENT OF THE JAPANESE GOVERNMENT
REGARDING JAPAN'S NON-PARTICIPATION IN THE
CONFERENCE OF THE NINE POWER TREATY
SIGNATORIES.

October 27th, 1937.

The Japanese Government, having replied to the

invitation of the Belgian Government to the Conference of the Signatories of the Nine Power Treaty of 1922, take this opportunity of making public at home and abroad a statement of their views.

1. China has witnessed the rise and fall of countless régimes since the Revolution of 1912, but her foreign policy has been consistently one of anti-foreignism. Especially since 1924, when the Kuomintang set up the Nationalist Government in Canton and entered into alliance with the Communists as a means of winning control of the central administration, the anti-foreign policy began to be pursued with unprecedented vigour and ruthlessness, and anti-foreign sentiments were kindled ablaze among the populace. The memory is still fresh of the way in which foreign Powers, one after another, were victimized and deprived of their vested rights and interests. It happens that Japan has been made for the past ten years the principal target of this anti-foreign policy of China.

Japan has always striven to promote friendship and

cooperation among the nations of East Asia, in the firm conviction that therein lies the key to the stability of that region. Japan welcomed the deepening of Chinese national consciousness which followed upon the Revolution, believing that it would conduce to intimate Sino-Japanese collaboration, and she adopted the policy of meeting the legitimate national aspirations of China to the utmost possible extent. For instance, in 1926 Japan took the lead in assisting China to recover her customs autonomy, and took a firm stand in favour of China on the question of the abolition of extra-territoriality. Japan, so cultivating China's good-will, looked patiently and eagerly forward to a favourable response that would consort with her ideal of friendship and cooperation. However, China showed no signs of appreciation of this sympathetic attitude on the part of Japan. On the contrary, she hoisted still higher the banner of anti-Japanism, and seemed resolved to annihilate all Japanese rights and interests in China.

The Nanking Government employed anti-Japanism as

a convenient tool in domestic politics for the mobilization of public opinion in support of their régime, and resorted to the unheard-of tactics of making it the foundation of moral education in the army and in the schools, so that even innocent children and youths were taught to look upon their friendly neighbour country as an enemy! As a result, not only were the peaceful trade and economic activities of Japan interrupted, but even the very lives of Japanese nationals were jeopardized. This anti-Japanese campaign finally took the form of organized terrorism as in the cases of the killing of a Japanese blue-jacket at Shanghai in November, 1935, and of the subsequent murderous attacks upon Japanese subjects at Swatow, Chengtu, Pakhoi, Hankow and Shanghai, and the bombing of Japanese residences at Changsha and Swatow. In the face of the alarming situation the Japanese Government remained calm and forbearing. Urgent demands were repeatedly made upon the Nanking Government for the reversal of their disastrous policy, but to no avail. Then towards the

end of last year there occurred the Sian Incident, in which Chiang Kai-shek was held captive for some days. Though the exact circumstances surrounding that sensational incident remain a mystery, it is an indisputable fact that shortly afterward Communist elements, gaining the ascendancy in the Nanking Government, began to conduct campaigns of disturbance in North China and Manchoukuo under the banner of "Anti-Japanese People's Front", which finally led to the Lukouchiao Incident of July 7 of this year, in which Japanese soldiers were unlawfully fired upon by Chinese troops in the outskirts of Peiping.

2. Upon the occurrence of the Lukouchiao Incident the Japanese Government, desirous of averting a possible Sino-Japanese crisis, immediately formulated a policy of non-aggravation and local settlement, and devoted their best efforts toward bringing about an amicable solution, despite the intolerable situations that were created, one after another, by the Chinese on the spot. On the other hand the Nanking Government, in violation of the Umez-

Ho Agreement, moved north the vast forces under their direct command, to threaten the Japanese garrisons, and also instigated local Chinese armies against Japan. The situation was thus aggravated until a general clash between the two countries became inevitable. It should be recalled that the Nanking Government, which employs anti-Japanism as an instrument of internal unification, had been conducting for some years a militaristic propaganda aimed at Japan, and that at the same time, by importing vast quantities of munitions, constructing fortifications, and giving intensive training to the troops, they had succeeded in building up strong armaments, so that their military men grew over confident of their own strength and the people themselves were deluded into putting an exaggerated estimate upon their country's fighting power. A belligerent spirit towards Japan came to prevail throughout the land. Long before the present outbreak, Chinese newspapers and magazines were accustomed to call Japan the "enemy country" and Japanese their enemies. At the time of the

Lukouchiao Incident the Nanking Government being driven to action against Japan by the internal situation they themselves had created, Japan's cautious attitude and her policy of local settlement were both doomed to utter failure.

With the aggravation of the situation all Japanese residents not only in North China but also in Central and South China became exposed to imminent danger, and were compelled to evacuate *en masse*, abandoning the enterprises that they had toilsomely built up during long years in the past. At the same time the Chinese in Shanghai, in contravention of the 1932 Truce Agreement, secretly set out to construct military works in the demilitarized zone and to perfect their war preparations. Accordingly in June last the Japanese Government made a request for a special conference of the Powers concerned, and called the attention of the Chinese Government to the matter. The Chinese refused to alter their attitude, but upon the outbreak of the armed conflict in North China,

they moved troops into the prohibited zone in flagrant violation of the Truce Agreement, and finally following upon the murder of an officer and a man belonging to the Japanese Landing Party on August 9, they launched an attack upon the International Settlement. While the Japanese authorities were still engaged in negotiations with the representatives of the Powers concerned, in a desperate attempt to prevent hostilities with extreme patience and forbearance and bearing serious strategical disadvantages, the Chinese began to shell and bomb the Japanese quarter of the Settlement as well as the Japanese garrison defending it, with a view to annihilating the 30,000 Japanese residents as well as the Japanese forces who were hopelessly outnumbered by the Chinese armies. Thereupon Japan was compelled to take counter-measures in self-defence.

As is clear from the foregoing account, the fundamental cause of the aggravation of the present affair is to be found in the policy of the Nanking Government who

moved large, threatening forces into North China in contravention of the Umezu-Ito Agreement, and also tore up the Truce Agreement by marching troops on the International Settlement. Japan was compelled to take up arms in self-defence, and she has chosen this opportunity to make the Nanking Government revise their attitude for the sake of the permanent peace of East Asia. Therefore, the present affair can never be settled until the Nanking Government mend their ways, abandon once for all their anti-Japanese policy and accept Japan's policy of cooperation and collaboration between the two countries.

3. It should be remembered that one of the important factors underlying Nanking's feverish agitations of more recent years against Japan is the action taken by the League of Nations at the time of the Manchurian Incident. That body then adopted a resolution framed in utter disregard of the realities of the situation in East Asia, which strongly stimulated China in her anti-Japanese policy. Now the League has once more taken up the appeal of the

Nanking Government. Without going fully into the real causes of the present affair, it has concluded on the basis of false reports that the bombing of the military works in strongly fortified Nanking and Canton was an attack upon defenceless cities, and adopted the resolution of September 27 condemning Japan. Again on October 6 the Assembly of the League of Nations not only concluded that Japan's action constituted a violation of the Anti-War Pact and the Nine Power Treaty but also adopted a resolution which openly calls for assistance to China. Such proceedings on the part of the League only fall in with the cunning scheme of the Nanking Government to exert pressure upon Japan by inviting the intervention of third Powers, and serve no useful end but to encourage China in her resolve to oppose Japan to the last and to render a settlement of the affair more difficult than ever. It must be said that the League of Nations is repeating the error that it committed but a few years ago.

Japan's action is a measure of self-defence taken in the

face of Chinese challenge, and obviously there can be no question of violation of the Nine Power Treaty. Moreover, as compared with the time when that treaty was concluded, the situation of East Asia to-day has been rendered totally different, owing to the infiltration of Communist influence and the changes of internal conditions prevailing in China. In any case, as regards the conference that has been convened of the signatories to the Nine Power Treaty, it is a foregone conclusion that a majority of the participants will hold themselves bound by the above-mentioned resolutions of the League of Nations, and even if Japan took part in its deliberations, no fair and just results could ever be expected therefrom as in the case of the League meeting at the time of the Manchurian Incident. Especially as this Conference is to be attended by Powers which are not directly interested in East Asia, it is calculated to arouse popular feeling both in Japan and China, thereby complicating the situation still further but contributing nothing toward a solution. The Japanese

Government have, therefore, decided to decline the invitation.

The Japanese nation, rising as one man, is united in the determination to surmount all obstacles for the purpose of effecting a speedy settlement. Japan is by no means indifferent towards international cooperation. But the Sino-Japanese difficulties can be solved only through direct negotiations between the two Powers on whom falls the common burden of responsibility for the stability of East Asia. What is needed is the elimination of Nanking's anti-Japanese policy and the Communist elements which are identified with it, so that there may be established an enduring peace based upon Sino-Japanese unity and cooperation. Japan never looks upon the Chinese people as an enemy, nor does she harbour any territorial designs. It is rather her sincere wish to witness the material and spiritual advancement of the Chinese nation. And it is her desire to promote cultural and economic cooperation with foreign Powers regarding China, while at the same time

she will respect fully their rights and interests there. Accordingly, so soon as the Powers understand the true intentions of Japan, and take suitable steps to make the Nanking Government reconsider their attitude and policy, then and only then a way will have been paved for their cooperation with Japan respecting the settlement of the present conflict.

~~~~~

925 昭和12年10月27日

広田外務大臣より  
在英国吉田大使宛(電報)

九国条約會議不参加に關する在本邦英米白三  
國大使への広田外相説明振りについて

本省 10月27日後11時30分發

第四六六號

白宛往電第八二號ニ關シ

英米白三國大使トノ會談ニ際シ本大臣ヨリ英米大使ニ對シ  
テハ日本不参加ノ理由ハ回答ニ依リ承知セラレ度ク日本ノ  
意ノ在ルトコロハ回答及聲明ヲ熟讀セラルレバ判明スベシ  
東亞ノ事情ニ通曉セル國ガ協力シテ吳ルルコトハ結構ナリ

貴國政府が事變解決ノ爲日支直接交渉ヲ開始スル様南京政府又ハ蔣介石ヲ説得セラルコトハ desirable ナリト思考スト述べ、白國大使ニ對シテハ回答ト聲明トハ一体ヲ爲スモノニシテ聲明ノ方ニテ事變ニ對スル日本ノ態度及會議ニ對スル方針ハ詳細説明シアル旨述べ置キタリ  
前電通り轉電アリタシ米へ轉電セリ

編 注 第三国による日中直接交渉斡旋に関する外務・陸軍・海軍三省決定については、本書第173文書参照。

~~~~~

926 昭和12年10月27日 広田外務大臣より
在伊国堀田大使宛（電報）

九国条約會議不参加を在本邦独仏伊三国大使へ説明について

本省 10月27日午後11時30分発

第二一九號

白宛往電第八二號ニ關シ

一、二十七日次官伊太利大使ノ來訪ヲ求メ白國大使ニ回答手交前同寫及聲明ヲ内示シ伊太利ノ從來ノ好意態度ヲ謝シ

タル處同大使ハ右内報ヲ謝シ次デ次官ヨリ會議ニ關シ何等情報アリヤト尋ネタルニ大使ハ伊國ガ正式ニ會議ニ參加スル旨回答ヲ發シタル外何等ノ情報ナキ旨答ヘタリ尙次官ヨリ適當ノ時機ニ支那側ヲシテ直接交渉ヲ開始セシムル様伊國側ヨリ誘導セラレハ好都合ナリト謂ヘルニ對シ大使ハ早速其ノ旨本國政府ニ傳フベキ旨ヲ述べタリ

三、次ニ獨逸參事官ハ回答佛譯ヲ一讀ノ上日本ノ態度ハ明瞭ナリト認ムル旨ヲ述べ次デ會議ニ關シテハ先般獨逸ノ不参加ニ決定シタルヤニ認メラルル來電（獨宛往電第二四九號）ニ接シタル外何等ノ情報ナシト述べ次官ヨリ伊大使ニ對スルト同様支那側誘導ノ點ニ言及シタルニ對シ參事官ハ其ノ旨傳達スベキ旨ヲ述べタル後伊太利ノ態度ニ付質問セルニ付次官ハ伊太利ハ參加ニ決シタル上會議ニ於テ日本ノ立場ヲ支持スル旨ノ申出アリタルニ付會議ガ對日制裁乃至休戰條件ノ決定等ヲ爲スニ至ラザル様希望スル旨ヲ伊太利ニ傳ヘ置キタル次第ヲ申述置キタリ
三、佛大使ハ内示ヲ受ケタル上日本ノ拒絕セラルベキコトハ豫期セラレタル所ナリト述べ居タリ
米へ轉電セリ

在歐大使、壽府へ轉電アリ度

編 注 第三国による日中直接交渉斡旋に関する外務・陸軍・海軍三省決定については、本書第173文書参照。

927 昭和12年10月28日 在ベルギー来栖大使より
広田外務大臣宛(電報)

独ソ両国に対して九国条約會議の追加招請状
が発せられたとの情報について

ブリュッセル 10月28日後発
本省 10月29日前着

第二四二號

諜報ニ依レハ白國政府ハ九國會議關係國ト協議ノ結果獨及
蘇聯邦ニ對シ二十八日夫々招請狀ヲ發送セル由

928 昭和12年10月28日 在ベルギー来栖大使より
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議における伊国利用には一定の限
度があり慎重対処方意見具申

ブリュッセル 10月28日後発
本省 10月29日夜着

第二三八號(極秘、館長符號扱)

⁽¹⁾武府會議ノ動向歸結ニ關シテハ俄ニ豫斷ヲ許ササルモ大體
過般ノ聯盟會議ト同シク英米ノ動向ニ追隨スルモノト大觀
セラルル處他方帝國トシテハ差當リ在支英國權益ニ關スル
同國ノ危惧ヲ一掃セシムルカ如キ具體的緩和策モ不可能ナ
ル御事情アリ且上海戰況未タ急速展開ヲ豫測シ難キ情勢ナ
ル限り東亞ニ於ケル主動的地位ヲ堅持シ飽迄日支直接交渉
ヲ主張スル我國ノ立場ト支那ノ赤化ノ危險ヨリ寧ロ我國ノ
軍事行動ヲ以テ一層急迫且直接ナル危險ナリト認メ太平洋
關係諸國ト集團機構創設ニ依ル我國掣肘ヲ最後ノ目標トス
ルヤニ見受ケラルル英米現在ノ立場トハ妥協頗ル困難ナル
ヘク從テ我國ノ參加セサル今回會議ノ歸結カ我國ニ對シ少
クトモ有利ナラサルヘキハ今日ヨリ豫測ニ難カラス右ハ我
國官民ヲ舉ケテ當然覺悟シ置クヘキ所ニシテ既ニ帝國政府
トシテ斷然不參加ニ決シ回答文其ノ他ニ於テ堂々所信ヲ中
外ニ宣明セラレタル以上我國民論等カ會議ノ經過ニ一喜一
憂シ或ハ名ヲ政府攻撃ニ借リテ硬軟兩論ノ内輪揉ヲ暴露ス

ルカ如キハ決シテ帝國ノ威信ヲ宣揚スル所以ニアラサルハ申ス迄モナク斯ノ如キハ今後ノ列強關係上頗ル憂慮スヘキ影響アリト思考セラルルニ付此ノ點ニ關シテハ豫メ充分御指導置キアリ度シ

會議⁽²⁾ノ席上伊國代表ヲシテ我國ノ主張ヲ代辯セシムル御方策ト東亞ニ於ケル我國ノ主動的地位堅持ノ建前トノ間ニハ適宜調和ノ要アルヘク旁少クトモ現地ニアル出先トシテハ飽迄帝國使臣トシテ堂々且冷靜ナル態度ヲ堅持シ苟モ物欲シ氣ナル行動ハ之ヲ慎ミ度ク從ツテ現地ニ於ケル他國代表ノ利用ニハ一定ノ限度アルヘキ儀ト思考スルノミナラス獨伊トシテハ目下同時ニ問題トナリ居ル西班牙不干渉委員會トノ關係上種々駢引モ有之ヘキハ豫想ニ難カラサルト共ニ兩國何レモ內心對英工作ニ顧念シ居ルコト及兩國共支那問題ニ關シ一層有力ナル地位ヲ占メントスル底意ヲモ有スルコト等ニ關シテハ我國トシテモ事前ヨリ充分打算ニ加ヘ置カレ度ク結局會議埒外ニアル本使ニ於テハ如何ニ努力スルモ其ノ成果ニハ一定ノ限度アルヘシト思考スル處本省ニ於テハ貴電合第一九四三號ノ如ク國內一部ノ世評ニモ介意セサルヘカラサル御事情モ有之ヤニ拜察セラルルヲ以テ右ニ

關シテハ豫メ本電前段ノ趣旨ニ依リ然ルヘク御措置置キ相成度シ

米、在歐各大使(土ヲ除ク)ヘ轉電セリ

~~~~~

929 昭和12年10月29日 在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議不参加に關する日本政府声明を  
ベルギー政府へ手交について

ブリュッセル 10月29日後発  
本 省 10月30日前着

第二四九號

貴電第八三號ニ關シ

聲明書二十八日夜接到二十九日本使政變ノ關係上特ニ外務次官ト會見之ヲ手交スルト共ニ右ハ回答文ト一體ヲ成ス旨説明シ置キタル處次官ハ日本不参加ヲ殘念ナリト述ヘタルニ付本使ハ帝國政府不参加ノ理由ハ回答文及聲明書ニ依リ御承知アリタシト述ヘタル後例ヘハ米國ト墨西哥トノ紛爭審議ノ爲豫メ何等米ニ相談ナク日英兩國カ打合ノ上第三國例ヘハ葡國ヲシテ里斯本ニ會議ヲ開催セシムルコトトシ米

ノ参加ヲ求メタル場合米カ果シテ参加スヘキヤト尋ネタル  
處能ク了解セリト答ヘ次テ本使ヨリ本件聲明書ノ公表方ヲ  
依頼セル處次官ハ既ニ昨朝ノ「タイムス」ニ全文掲載セラ  
レ居ル際新聞等ニ掲載セシムルハ困難ナルモ會議直前二何  
等カノ方法ヲ考究スヘシト答ヘタリ  
米、壽府、在歐各大使へ暗送セリ

930

昭和12年10月30日

在独国武者小路大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議の招請に対して独国政府が拒絶  
回答をした旨同国外務次官内報について

ベルリン 10月30日前発  
本省 10月30日後着

第四六〇號

往電第四五九號ニ關シ

二十九日「マツケンゼン」次官ニ面會ノ際同次官ハ武府會  
議ニ對シ白國ノ招請狀ハ二十八日夜(冒頭往電發後)在伯林  
白國公使側ヨリ接受シタルカ獨政府ハ右ニ對シ二十九日正  
午不參加ノ回答ヲ發シタリト述ヘ大要別電ノ如キ回答寫<sup>(省略)</sup>ヲ

示シタルニ付本使ハ右ハ當方ニ於テモ豫テ期待シ居リタル  
所ナリト述ヘ置ケリ  
冒頭往電ノ通り轉電セリ

931

昭和12年10月30日

在英国吉田大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議は事態回復まで一旦閉会し裏面  
で英米が日中直接交渉を斡旋するよう英国外  
相へ提案について

ロンドン 10月30日前発  
本省 10月30日後着

第八三八號(極秘)

貴電<sup>(1)</sup>第四六六號ニ關シ

今二十九日外相ヲ往訪全然政府ノ訓令ニ基カス本使一己ノ  
隔意ナキ私見ヲ開陳シ度ク全ク事態ヲ憂フルノ餘リト承知  
ヲ請フト前置申入レタルニ「イーデン」ハ諒トシ欣然座ニ  
招シタルニ付本使ハ先ツ九箇國會議招請ニ關スル外相ノ希  
望ヲ東京政府ニ傳達セル次第ヲ述ヘ其ノ參加ヲ見ルニ至ラ  
サリシハ遺憾ナルカ上海戰局發展ノ今日事態回復ヲ考慮シ



得ル時機ト思考ス幸ニ廣田外相ヨリ「クレギー」ニ日支直接交渉開始ヲ誘導スルノ desirable ナル旨ヲ告ケラレタリ英政府ハ右希望ニ對シ適宜ノ措置ヲ執ラルルコトト信スト切り出セル處外相ハ稍躊躇ノ後九箇國會議ヲ前ニシテ英米カ單獨ニ支那政府ニ對シ何等カノ行動ニ出ツルハ他ノ參加國ノ手前至難ナリ廣田外相ノ希望ニ對シ眞ニ當惑セサルヲ得ス然レトモ會議ハ御承知ノ通り日支兩政府何レヲモ批判スルノ意毫モ無之一ツニ和平回復ノ途ヲ見出サントスルニアリ故ニ貴國政府參加ニ至ラサリシヲ深ク遺憾トス會議ノ成行ハ素ヨリ豫斷スヘキニアラサルモ

會議<sup>(2)</sup>ノ趣意右ノ通りナレハ會議ノ決定カ日支双方ニ和平勸告スル場合ニ於テモ貴國政府ハ世界輿論ノ反響ヲ慮リ無下ニ之ヲ拒否セラレサランコトヲ切望スト言ヘルニ付本使ハ貴意ハ然ルコト乍ラ國際會議ニ對シ我國民ニ一種偏見アリ華府會議ニ於テハ Ratio Clause ヲ、倫敦會議ニテハ Submarine Clause ヲ我全權ハ英米側ヨリ押付ケラレタルカ如クニ妄信シ又日清戰爭ノ終ニハ三國干涉ヲ受ケ(ト言ヘルニ外相ハ英ハ之ニ加ハラスト言ヲ挿メリ)兎角國際會議外國干涉ヲ喜ハス故ニ會議決議トシテ日支双方ニ和平勸

告セラルルニ於テハ假令帝國政府ハ之ヲ欲スルモ國內政情其ノ勸告ヲ受諾スルヲ困難ナラシムル立場ニ置カルノ危険アリ懸念ニ堪ヘスト答ヘタルニ外相ハ會議ノ手前單獨行動ハ出來ス會議決議ニ依ラントスレハ貴國政府ノ立場ヲ困難ナラシムトセハ如何ニセハ可ナルヘキヤト憂色アリ本使曰ク會議ハ英米小委員會附托トシテ餘リ publicity ヲ爲サス一應閉會シ behind screen ニ於テ英米カ日支ノ間ヲ然ルヘク斡旋セラレ事態回復ノ後ニ適宜ニ結果ヲ會議報告ノ手筈ニセラルレハ可ナルヘシ

外相ハ暫時沈思ノ後貴國政府ハ事態恢復ヲ眞ニ考慮セラルヘキヤト問ヘルニ付然リト確信ス本使ノ承知スル限りニ於テモ今回ノ事變ハ初メヨリ帝國政府ノ豫想スル所ニアラス故ニ第一回軍事費見積額モ大ナラス再度議會ヲ開キテ軍事費見積替ヲ爲セルヲ見テモ其ノ邊ノ事情ハ了解セラルヘク支那側ニ引摺ラレテ遂ニ今日ノ事態ニ至レリ支那側ノ計畫的陷穽ニ trap サレタリトノ信念カ國民的憤激トナリテ舉國政府ヲ支持シ居ル次第ナルカ戦局一段落シテ排日膺懲ノ趣旨貫徹セハ茲ニ兵ヲ戢メテ日支國交ヲ新關係ノ上ニ置カント欲スルハ近衛首相ノ聲明ノ如シ軍側モ素ヨリ大規模ノ

戰ヲ爲スノ意ナク寡少ノ兵ヲ上海ニ送リタルコトカ偶戦局ヲ意外ニ長引カシメタル所以ナリ一九三二年ニ其ノ例アルカ如ク戦局一段落ト共ニ成ルヘク速ニ撤兵ノ決意ナルヲ確信スト言ヘルニ外相ハ深ク本使ノ來訪ヲ謝シ貴見篤ト考慮スヘシ云々ト言ヘリ

米、白へ轉電セリ



932

昭和12年10月31日

在独国武者小路大使より

広田外務大臣宛(電報)

# 九国条約よりの離脱を内外に宣言すべきとの

## 重光大使意見具申

ベルリン 10月31日前発

本省 10月31日後着

第四六八號(極秘)

<sup>(1)</sup>重光大使ヨリ

今般東亞ニ於ケル我主動的地位ノ確立ト赤化ノ危険除去ハ我根本方針タルヘキ見地ヨリ東亞問題ニ關スル他動的手段機構ノ設定(武府會議ノ如キ)ヲ見サル様特ニ平和安定ノ攪亂者(蘇聯乃至赤化セル支那)ヲ斯ル機構ニ包含セシメサル

コトニ付テハ今日ヨリ最善ヲ盡スノ要アルヘキ處(往電ノ通り蘇聯ヲ武府會議ニ參加セシムルハ大ナル後難ヲ殘スヘシ)聯盟ニ於テ條約違反ノ決議ヲ爲シ米國大統領ニ於テ同様ノ言明ヲ爲シタル後武府會議開催トナリタル此ノ形勢ニ對シテハ帝國ニ於テモ我立場ヲ闡明シ今後ノ地步ヲ固メ併セテ列國トノ個別的關係ニ資スル爲默殺の消極ノ態度ヨリ進ンテ政治的積極的措置ヲ執ルノ要アル様思ハル(右ノ時期ハ武府會議ノ結果ヲ見タル上ノ方良キヤモ知レサルモ)即チ他ノ調印國カ主義上ノ規定トモ見ルヘキ條約ヲ

<sup>(2)</sup>政治的ニ惡用シ日本ヲ以テ侵害者ナリト判定セル條約特ニ九國條約ハ既ニ死滅セルモノナルコト且日本ハ他ノ調印國ト同條約ノ解釋(日本ハ條約ニ違反セス)適用(同條約第七條ハ單ニ情報ノ交換ノ規定ニシテ會議等集團機構ノ設定ニアラス)ニ付意見ヲ異ニスルコトヲ理由トシテ茲ニ同條約關係ヨリ離脱スルコトヲ通告シ(尤モ其ノ内容趣旨ニ反對意見アルニアラサルコト及列國ノ有スル經濟的利權ノ尊重ヲ明カニシ)我方ノ確乎不動ノ態度ヲ内外ニ宣言セハ將來英米蘇聯其ノ他ノ各國トノ交渉ニ却テ新生命ヲ與ヘ有利ナルコトト思料ス即チ一度ハ右ノ措置ヲ經テ初メテ我東亞ノ

地位ノ確保及列國ヲ覺醒了解セシメテ我ト親善關係ヲ進捗セシメ得ルノ域ニ達スルモノト思料セラル尙九國會議ニ關スル氣付ノ點ハ別電ス

蘇ヲ除ク各大使へ轉電セリ

933

昭和12年10月31日  
在独国武者小路大使より  
広田外務大臣宛(電報)

### 九國條約に關する重光大使氣付きの点について

ベルリン 10月31日前発  
本省 10月31日後着

第四六九號(極祕)

重光大使ヨリ

九國條約ニ關シテハ既ニ省議ノ決定セルモノアル様記憶スル處尙左ノ點氣付ノ儘

一、條約締結後支那ハ國民黨ノ連蘇北伐赤化革命アリ尙又最近同様連蘇赤化シ抗日人民戰線ニ合シテ對日戰爭政策延テ東亞ノ安定ヲ破壞セルコト

二、支那自身諮議院裁兵トモ其ノ他總テ不履行ノ儘ナルコト  
三、然ルニモ拘ラス華府會議ノ精神實現ハ日本ニ於テ最モ熱

心ニ實現ヲ期シタル歴史アルコト

一、軍縮條約モ今日其ノ效力ヲ失シ華府會議精神ハ一律全部消滅シ居ルコト

二、事態ノ變化ハ例ヘハ

(イ)露國赤禍ノ危險東亞全面ニ再出現セルコト及日本ハ之カ防衛ニ全力ヲ傾倒シ居ルコト

(ロ)佛蘇同盟條約ハ「ロカルノ」條約廢棄ノ理由トナレリ  
露蒙條約及露支條約ハ九國條約離脫ノ理由トシテ充分ナルコト

一、利害關係ノ厚薄ニ拘ラス多數國間ニ表白シタル主義表白ヲ主トシタル期限ノ規定モナキ條約ナルコト

二、主動者タルヘキ日本ハ條約違反トシテ判定ヲ受ケ他國ト見解ヲ異ニスル今日條約存在ノ無意味ナルコト

一、九國條約ハ集團機構ヲ設定スルモノニアラス東亞ノ事態ニ付テハ日本ニ於テ「イニシアチーブ」ヲ取り必要ト信スル時及場所ニ於テ適宜利害關係國ト交渉シ得ヘキ意嚮ナルコト

蘇ヲ除ク各大使へ轉電セリ

934

昭和12年11月1日

広田外務大臣より  
在ベルギー来栖大使宛(電報)

伊国代表と密接連絡を保ち九国条約会議を有

名無実化すべく側面より工作方訓令

本省 11月1日後3時30分発

第九二號(極秘)

在伊大使宛往電第二二五號ニ關シ

累次往電ニ依り御承知ノ通我方ハ今日迄在京伊國大使トノ  
接觸ニ依り伊國側ニ對シ武府會議ニ關スル情報ノ供給方ヲ  
求メタル外對日制裁ノ決議ヲ爲シ又ハ調停等日支間交渉ヲ  
阻害スヘキ措置ニ出ヅルコトナキ樣會議誘導方ヲ希望スル  
ト共ニ會議トハ離レ伊國ニ於テ日支直接交渉ニ付支那側ヲ  
説得セラルレハ好都合ナル旨申入レ置キタル處貴地ニ於テ  
モ伊國代表部ト密接ナル連絡ヲ保チ前記我方希望ノ徹底ヲ  
期セラルルト共ニ我方トシテハ九國條約ニ對スル根本方針  
(昭和十一年一般執務提要一四一頁參照)ニ鑑ミ九國條約會  
議ソノモノヲ有名無實ノモノト爲シ後日事變解決上第三國  
ヲシテ日支間ニ橋渡シヲ爲サシムル場合アリトスルモ右ハ  
九國條約トハ別箇ニ主要關係國トノ話合ニ依ルコトト致度

キ意嚮ナルコトヲ御含ミノ上今次會議ヲシテ出來得ル限り  
在苒無爲ニ終ハラシムル樣側面ヨリ御努力アリ度ク伊國代  
表部ニ對スル具體的要望ハ會議ノ模様ヲ見テ隨時電報致ス  
ベシ

在歐各大使及蘭、葡、瑞典へ轉電アリ度シ米へ轉電シ米ヲ  
シテ墨へ轉電セシム



935

昭和12年11月1日

在英国吉田大使より  
広田外務大臣宛(電報)

九国条約會議をめぐる駐英米國大使との意見

交換について

ロンドン 11月1日後発

本省 11月2日前着

第八四九號

「ノーマン、デヴィス」渡白ノ途中當地ニ立寄ラス會談ノ  
機ナカリシニ依リ數日前米國ヨリ歸來セル「ビンガム」大  
使ヲ去ル十月三十日往訪シ往電第八三八號ト同様ノ「ライ  
ン」ニテ私見ヲ述ヘ「デヴィス」ニモ傳ヘ吳ルル様申入レ  
タルカ其ノ節「ビ」ハ之ヲ聞キ終リタル後最モ眞摯ナル態

度ニテ語り出テ曰ク日本ノ立場ハ正ニ貴大使ノ言ノ如シト  
信ス然ル處自分カ歸國中ニ知り得タル所ニ依レハ目下ノ米  
國輿論ハ事ノ外ニ惡化シ居リ日本非難ノ聲ハ甚タ囂々タル  
モノアリ何分空爆、非戰鬪員殺戮等戰爭慘禍ニ關スル「ニ  
ユース」ハ米國人人心ヲ痛ク刺戟シ其ノ刺戟ハ深刻ニ人民ノ  
腦裡ニ刻ミ込レツツアリ斯ル印象ヲ拭ヒ去ルハ容易ナラス  
九箇國會議ハ日本ノ立場ヲ説明スル絶好ノ機會ナリシナラ  
ンモ其ノ參加ヲ得サリシハ日本ノ爲ニ遺憾トセサルヲ得ス  
此ノ上ハ一日モ速ニ日支ノ間ニ平和ノ回復セラレ日本ニ對  
スル誤解ノ消散スルコトヲ切望ス云々  
米、白へ轉電セリ

936

昭和12年11月3日

広田外務大臣より  
在英国吉田大使宛(電報)

九国条約會議では将来の和平斡旋の途を閉塞  
しないよう措置すべき旨本国政府に上申した  
と在本邦英国大使内話について

本省 11月3日後2時0分発

第四七七號(極秘、館長符號扱)

三日次官英國大使ト他用ヲ以テ會談中九國會議ハ甚ダ困難  
ナル立場ニ在ルモノノ如キモ英米等ニハ如何ナル案アリヤ  
ト質問セルニ大使ハ極ク内密ノ話トシテ最近自分ハ本國政  
府ニ對シ武府會議ニ於テハ(一)對日制裁ハ論議スベカラズ(二)  
未ダ適當ノ時機ニアラザルヲ以テ即時調停又ハ斡旋ヲ決ス  
ベカラズ(三)此ノ際東亞ニ特殊ノ利害關係アル二、三國ヨリ  
成ル小委員會ヲ設置シテ日支問題ニ關シ連絡ヲ保持セシメ  
適當ノ時機ヲ俟チ一國又ハ數國ニテ斡旋ヲナス途ヲ開キ置  
クベク要スルニ此ノ際將來ニ於ケル單獨 individual ノ斡旋  
ノ途ヲ全然閉塞セザルコト最モ肝要ナル旨ノ意見ヲ上申シ  
タリ右意見ハ當地ニテ米、佛、白三國大使ニモ之ヲ内話シ  
タルニ何レモ贊成シ三大使ヨリ夫々本國政府へ上申セル次  
第二シテ武府會議ニ對シ相當效果アルモノト思考スト述ベ  
タルニ付右貴官限り御含ミアリ度ク尙次官ノ問ニ對シ支那  
ノ態度ニ付テハ何等情報ヲ有セザルモ會議ニテハ恐ラク顧  
維鈞邊ノ演說ヲ聞キタル上之ニテ支那側ノ意嚮ハ承知シタ  
リトシテ小委員會設置ヲ取纏ムルコト望マシト述べタル趣  
ナリ

佛獨伊白蘇へ轉電アリタシ

米へ轉電セリ

937  
昭和12年11月3日

条約局第三課が作成した「對支宣戰ト聯盟規約」

對支宣戰ト聯盟規約

一、序 論

(一九三七、一一、三 條三)

支那ハ九月十二日規約第十條第十一條及第十七條ヲ援用シテ事變ヲ聯盟ニ提訴、十六日理事會ハ問題ヲ既存ノ日支問題諮問委員會ニ付託シ、十月五日諮問委員會ハ聯盟總會ニ對シ帝國ノ支那ニ於ケル行動ヲ以テ不戰條約及九國條約違反ト認定シ九國條約ノ締約國タル聯盟國其ノ他ノ會議ヲ開催シテ東亞ノ平和回復ヲ圖ルベク不取敢支那ニ精神的支持及援助ヲ與ヘンコトヲ提言シ、翌十六日總會ハ全會一致(棄權ニ)之ヲ採擇シタリ右決定ニ基キ九國條約締約國ハ内々準備ヲ進メ居リタル處結局英國ノ主動的斡旋及米國ノ贊同ニ依リ締約國タル白國政府ニ於テ九國條約第七條ニ基ク會議ヲ招集スルコトト爲リ、會議ハ本月三日ヨリ武府ニ會合

シ居レリ

即チ今日迄ノ所聯盟ハ日支事變ニ對シテ規約ノ直接適用ヲ差控ヘ諮問委員會ヲ利用シテ九國條約ノ發動ヲ誘致シ九國條約關係國ヲシテ問題ノ和平解決ヲ策セシムルノ方途ニ出デタリト言フヲ得ベシ聯盟ガ此ノ態度ニ出デタル動機ハ嘗テ滿洲事變、伊惠紛爭ノ取扱ニ失敗シ又現ニ西班牙内亂ノ處理ニ手古擦リツツアル聯盟ガ或ハ過ヲ再ビセンコトヲ慮リ体良ク日支問題ヨリ手ヲ引カントスルニアリタルヘシトハ容易ニ想像セラルル所ナリ

從來帝國ハ其ノ對支行動ハ支那ノ挑發行爲ニ依リ餘儀ナクセラレタル自衛措置ナリトノ見解ニ立チ、從テ日支間ニ正式ノ戰爭ノ存在ヲ否認シ其ノ行動ノ目標ヲ嚴格ニ支那ニ限定シ來レリ今對支軍事行動ノ目的ヲ迅速ニ達成スル爲第三國ニ對シテモ或種ノ戰時措置ヲ執ル必要アルニ顧ミ支那ニ宣戰ヲ布告シテ日支間ニ正式戰爭ノ存在ヲ宣布スル場合聯盟規約トノ關係ニ於テ如何ナル結果ヲ發生スベキ乎

上述ノ通日支事變ハ未ダ規約ノ發動ヲ受ケズシテ現ニ九國條約關係國會議ニ繼續中ナリ斯ル情勢ノ下ニ於ケル宣戰ノ布告ハ帝國ノ關スル限り對支行動ノ自衛措置タル性質ニ影

響スルコトナシトスルモ、帝國ノ行動ヲ以テ九國條約及不戰條約ニ違反スル侵略行爲ナリトノ見解ヲ執リ來レル支那及列國ニトリテハ右ハ日本ガ從來自衛措置トシテ理由付ケツツ徐々ニ展開シ來レル支那侵入ノ企ヨリ公々然タル支那侵略戰ニ乗出シタルモノト映ジ、加フルニ其ノ結果列國自身モ中立法規ノ適用殊ニ海上封鎖ノ適用ヲ日本ヨリ強制セラルル羽目ニ立ツベキヲ以テ、一面支那トシテハ日支問題ノ諮問委員會付託ノ際必要ノ場合更ニ理事會ニ對シ規約ノ條項ヲ援用スヘキ權利ヲ留保セル次第モアリ必スヤ規約ノ發動ヲ要求スベキト共ニ他面列國亦規約ノ發動ヲ拒否シ得サルニ至ルベキヲ虞ル而シテ規約ノ發動ヲ見ル場合日本ハ總テノ聯盟國ニ對シ戰爭行爲ヲ爲シタルモノト看做サルルニ至ル場合アリ得ベク、即チ此ノ場合ニハ中立國ナキ戰爭ノ場合ニシテ日本ガ宣戰布告ヨリ期待スル中立法規ノ發動乃至海上封鎖ノ第三國船舶ニ對スル擴張ハ意外ノ困難ニ逢著スルコトアリ得ヘシ。

聯盟國ト非聯盟國トノ間ノ紛爭ニ適用セラレ得ル規約ノ條項ハ第十七條又ハ第十條第十一條ナリ

## 二、本論

聯盟規約ハ「戰爭ニ訴ヘザルノ義務ヲ受諾シ」「各國間ノ平和と安寧ヲ完成セムガ爲」(前文)「世界ノ平和ニ影響スル一切ノ事項ヲ其ノ會議ニ於テ處理」(第三條三項、第四條四項)スルコトヲ定メ且「聯盟各國ノ領土保全及現在ノ政治的獨立ヲ尊重シ」「外部ノ侵略ニ對シ之ヲ擁護スルコトヲ約」シ(第十條)若シ「戰爭又ハ戰爭ノ脅威」アルトキハ聯盟國ノ何レカニ直接影響ノ有無ヲ問ハズ聯盟全体ノ利害關係事項ト認メ聯盟ガ「國際ノ平和ヲ擁護スル爲適當且有効ト認ムル措置ヲ執ルヘキ」コトヲ約(第十一條)シ居ル一方聯盟國間ニ「國交斷絶ニ至ル虞アル紛爭」アルトキハ一定ノ手續ヲ經タル後ニアラザレバ「戰爭ニ訴ヘザル」コトヲ規定シ(第十二條、十五條)以上ニ違反シテ「戰爭ニ訴ヘタル聯盟國」ハ他ノ總テノ聯盟國ニ對シテ戰爭行爲ヲ爲シタルモノトシテ一定ノ制裁ヲ課スベキコトヲ規定(第十六條)セリ而シテ前記「戰爭ニ訴フ」ナル字句ニ關シテハ聯盟規約起草ノ當初單ニ「兵力ニ訴フ」トアリタルモノガ「戰爭ニ訴フ」ト修正セラレタル經緯アリト雖モ學者ノ通説ハ事實上ノ戰爭狀態ノ存在ヲ以テ足ルト爲スニ傾キ又伊太利「エチオピア」紛爭ニ際シ聯盟ガ規約第十六條ヲ適用



シ對伊制裁實施ヲ決定スル直接ノ根據ト爲リタル一九三五年十月七日理事會ノ採擇シタル六人委員會報告書モ結論ニ於テ「一聯盟國ガ第十六條ノ適用ヲ要求スルトキハ聯盟各國ハ其ノ特殊ノ場合ノ狀況ヲ審査スベク第十六條ノ適用ハ戰爭ガ正式ニ宣言セラレタルコトヲ必要トセズ」ト明言セリ

故ニ聯盟國ハ嚴格ニハ假令宣戰ナクトモ一般ニ戰鬪狀態ヲ發生セシムルコトニ依リ既ニ規約ニ違反スベキモノナルガ單ナル戰鬪狀態ニ止マルトキハ之ガ確認ニ付異論アルベキ處若シ宣戰ノ布告アルニ於テハ戰鬪狀態ノ存在ヲ自ラ認定スルモノニシテ第三者タル聯盟及聯盟國ハ此ノ明白ナル事例ヲ無視シ得ズ規約ノ建前上之ニ應ジテ一定ノ方向ニ進ムベキコトヲ餘儀ナクセラルルニ至ルベシ

帝國ハ聯盟國ニアラザルヲ以テ假令支那ニ對シテ宣戰ヲ布告スルコトアリトスルモ直接規約違反ノ問題ヲ生スルコトナシ唯支那ハ聯盟國ナルヲ以テ假ニ日本ヨリ侵略セラレタリトセバ(日本側ノ動機ノ如何ニ拘ラズ支那ハ外見の事實ニ基キテ侵略ト叫ブコトヲ得ベシ)規約第十七條又ハ十一條ノ適用ヲ要求スルコトヲ得ベク右ガ戰鬪行爲タルニ止ル

カ正式ノ戰爭ナルカニ應ジテ之ニ對スル聯盟ノ取扱振ノ程度ニ差同アルコトヲ得ベシ(若シ支那ヨリ日本ニ對シテ侵略アリタリトセバ殊更ニ第三國ノ介入ナキ限り十一條十七條ノ何レニ依ルモ聯盟ノ問題ト爲ルコトナシ)

第十七條ハ聯盟國ト非聯盟國トノ間(或ハ非聯盟國相互間)ノ紛爭ノ解決ニ聯盟規約ヲ適用スル爲ニ先ヅ當該非聯盟國ヲ勸誘シ其ノ受諾アリタルトキハ規約第十二條以下ノ規定ノ適用アリ又若シ該非聯盟國ガ右勸誘ヲ拒絕シテ非聯盟國側ヨリ聯盟國ニ對シテ戰爭ニ訴ヘタルトキハ該非聯盟國ニ對シテ直ニ第十六條ヲ適用シ得ベキコトヲ規定ス(三項)

(勸誘ノ受諾アリタル場合ト雖推移ニ依リテハ十六條適用問題起リ得ベキコトハ勿論ナリ)要之十六條ハ聯盟國ニ對シテ適用スル規定ナル爲之ヲ非聯盟國ニ適用スル爲ニハ十七條ノ手續ヲ經ルコトヲ定メタルモノニシテ又聯盟國ニ對スル十六條ノ適用ノ場合ニハ通常事前ノ審議ニ相當ノ時日ヲ經過スベキモ十七條ノ結果十六條ニ至ルトキハ單ニ戰爭ニ訴ヘタルノ事實ノミニテ足ル

(一九三五年對伊制裁ハ十六條ノ一部適用ノ實例ニシテ實施シタルハ武器ノ對伊輸出禁止、金融制裁、伊國品輸入禁

止、特定貨物ノ對伊輸出禁止ノ四ナリキ）

又十七條ニ依ルトキハ日本ガ勸誘ヲ拒否スベキコト殆明白ナルヲ以テ明文上必然的二十六條ニ移ラザルヲ得ザル固定性アリ

第十一條ハ前述ノ如ク第十條ト合体シテ聯盟國ノ領土保全獨立尊重ヲ全ウスル爲聯盟國ニ對シテ外部（國外ヨリタル限り聯盟國ヨリタルト非聯盟國ヨリタルトヲ問ハズ）ヨリ侵略又ハ戰爭アルトキハ聯盟國全体トシテ此ノ脅威ヲ排除シ平和ヲ維持スル爲適當且有效ノ措置ヲ執ルコトヲ約スルモノナル處既ニ戰鬪狀態又ハ戰爭ノ存在スル場合ニ平和ヲ擁護スル爲ノ適當且有效ナル措置トシテハ右狀態ヲ停止セシムルコトヲ唯一ノ策トスベシ而シテ其ノ爲ニハ場合ニ依リテハ實力ヲ伴フ制裁的措置ニモ出ヅルコトヲ要スベキ處十六條ハ非聯盟國ニ對シテ其ノ儘適用スルコトハ不可能ナルヲ以テ別ニ決定セラレベキ措置タルコトヲ要スベク唯斯クシテ決定セラレタル所ガ十六條ノ内容ト同一ト爲ルベキコトハ不可能ニアラズ、唯十六條ハ制裁ノ如キ重大措置ニ參加スル聯盟國ノ負擔ヲ豫見シテ特ニ規定ヲ設ケタル次第ノ處本條ニ依ラズシテ實質的二十六條ニ規定スル如キ重大

ナル決定ヲ十一條ニ基キテ爲シ得ベキカ否カニ關シ多少ノ疑アリ（十六條ノ實施ニハ總會ノ決定ヲ要シ十一條ハ理事會ノ行爲ナルヲ以テ聯盟國全部ノ參加ヲ要スベキ制裁ヲ理事會ノミヲ以テ決シ得ザルベシト爲スハ理事會及總會ガ國際平和ノ維持ニ關シテ明文上同一ノ權限ヲ有シ（三條三項及四條四項）且實際上モ然ルニ徴スルモ正當ナラザルベシ）唯十一條ニ依ルトキハ適當且有效ナル措置ノ何タルベキカニ認定ノ自由アルヲ以テ必シモ制裁ノ如キモノニ進行セズ武器又ハ石油禁輸等ノ中間的措置ニ止ルコトヲ得ル融通性アリ

以上十一條十七條ノ關係ニ於テ非聯盟國トシテモ聯盟ノ措置ヲ免レザルコトアルベキ處右ハ非聯盟國ヨリ聯盟國ニ對シテ戰鬪行爲ヲ爲シタル場合ト正式ノ戰爭ヲ爲シタル場合トニ於テ本質上相異ル所ナシ唯宣戰アリタル場合ハ提訴者タル聯盟國ノ側ニ於テ侵略セラレタリト呼號シ聯盟ニ對シ特定ノ措置ニ出デントヲ要求スルニ當リ其ノ根據ヲ一層有力ナラシムベキノミナラズ聯盟トシテモ右ノ提訴ニ對シテ成ルベク無關心ナルヲ粧ハントスルコトノ困難ナルベキ點ニ事實上大ナル相違アリトイフベシ

## 三 結 論

以上ヲ事實ニ付テ見ルニ今次事變ニ於テ聯盟ハ支那ノ提訴アリタルニ際シ之ヲ一應規約ニ直接關係ナキ諮問委員會ノ議ニ付シタルモ前述(序論)ノ通支那ハ之ヲ以テ不充分ナリト爲シ居ル次第ニシテ聯盟ノ本意ノ如何ニ拘ラズ支那トシテハ其ノ満足ヲ得ザル限り聯盟ヲシテ直接規約ニ基キテ本件ヲ處理シ日本ヲ侵略者ナリト斷定セシメ之ニ對シテ適當ノ措置ニ出デシメンコトヲ切望シ居リ唯聯盟ニ於テ自重シツツ支那ヲ抑ヘ來レル現狀ニ於テ茲ニ日支間ニ宣戰ナル新事實發生スルトキハ支那ノ主張ハ一層有力ナル根據ヲ有スベキニ至リ聯盟トシテモ右ノ新事態ニ應シテ本件ヲ再檢討セザルヲ得ザルニ至リ其ノ結果規約第十七條又ハ第十條十一條ニ基キ對日制裁の措置ニ出ツルヲ餘儀ナクセラルニ至ルモノト斷セザルヲ得ズ(而シテ聯盟ガ果シテ右ノ舉ニ出ヅベキカ否カニ付テハ聯盟内部ニ於テハ英國、外部ニ於テハ曩ニ對伊制裁ノ際米國ノ聯盟トノ協力充分ナラザリシ爲制裁ノ實效ヲ擧ゲ得ザリシニ鑑ミ米國ノ對日態度ガ決定的指標タルベキコトハ多言ヲ要セズ)

938

昭和12年11月4日

 広田外務大臣より  
 在上海岡本総領事宛(電報)

現在直ちにはないが将来伊國が日中直接交渉實現のため中国を誘導することは希望する  
 旨在本邦伊國大使へ説示について

本省 11月4日発

第八二六號(部外絶對極秘)

貴電第二一〇八號ニ關シ

十月二十七日武府會議招請ニ對スル對白回答文ヲ伊國大使ニ内示シタル際次官ヨリ適當ノ時機ニ支那側ヲシテ直接交渉ヲ開始セシムル様伊國側ヨリ誘導セラルレハ好都合ナル旨ヲ述ヘ置キタルカ或ハ先方ニテ之ヲ誤解セルニ非スヤト思考セラレタルニ付四日同大使ノ來省ヲ求メ次官ヨリ右ノ次第ヲ説明セル處大使ハ過日會談ノ際前記對白回答ト支那側誘導ニ關スル伊太利幹旋トノ間ニ特別ノ關係ナキモノト思ヒ且恰モ當日ハ上海附近ニ於ケル日本軍大勝ノ報モアリシ際ナレハ此ノ際直ニ右幹旋ヲ希望セラルルモノト思ヒタル次第ナリト述ヘタリ仍テ次官ハ其ノ點當方ノ説明モ不充分ナリシカ我方ノ意嚮ハ回答ニ在ル如ク列國ノ調停ハ之ヲ

拒絶スレトモ將來適當ノ時機ニ伊太利カ直接交渉ニ支那側誘導方斡旋セラルルコトハ結構ナリト云フ趣旨ナリト説明セルニ大使ハ貴意ノ存スルトコロハ良ク了解セリ早速在支伊國大使ヘ電報スヘシト述ヘタリ右爲念伊藤公使ヨリモ同大使ヘ説明方取計ハレ度シ

~~~~~

939

昭和12年11月8日 広田外務大臣より
在ベルギー来栖大使宛(電報)

わが方に対する九国条約会議再招請状を在本
邦ベルギー大使より受領について

付記 昭和十二年十一月七日付

右再招請状

本省 11月8日前11時30分発

第九八號

七日午后五時在京白國大使ヨリ武府會議ニ對スル再招請狀ヲ受領セリ不取敢

(付記)

口上書

一、十一月三日「ブリュッセル」會議參加國代表ハ十月二十七日白國政府ノ招請狀ニ對スル日本帝國政府ノ回答竝ニ右回答ニ附隨セル聲明ヲ了知セリ

二、日本帝國政府ハ右文書中ニ於テ就中支那ノ領土ヲ侵略スルガ如キ意圖ナキノミナラズ却テ支那國民ノ物質的精神的向上ヲ祈念スルモノニシテ又外國ノ在支權益ハ飽ク迄之ヲ尊重シツツ列國ト共ニ文化的及經濟的協調ヲ期シ居ラルル次第ヲ表明セラレタリ

三、右聲明ニ於テ述ベラレタル諸點ハ千九百二十二年二月六日華盛頓ニ於テ署名セラレタル條約(九國條約)ノ根本原則ノ或モノヲ表ハセルモノナリ該條約締約國ハ右ニ關スル日本帝國政府ノ聲明ヲ了承セリ

四、加之日本帝國政府ハ日本ニ依ル九國條約違反ノ問題ヲ發生スル餘地ナキコトヲ言明セラレ且支那政府ニ對シ幾多ノ苦情ヲ陳述セラレタリ支那政府亦同條約ノ違反アリタリト爲シ日本政府ノ苦情ヲ拒否シ進テ支那ヨリノ苦情ヲ述ベ居レリ

五、九國條約ハ正ニ斯ノ如キ事態ヲ目的トスル規定ヲ包含ス「ブリュッセル」ニ於テ行ハレツツアル意見ノ交換ハ本

質の二此等ノ規定ニ基礎ヲ置キ第七條ニ規定セラルル充
分ニシテ且隔意ナキ交渉ヲ構成スルモノナルコトヲ茲ニ
指摘スルヲ要ス本會議ハ締約國間ノ紛争ノ平和的解決ヲ
援助スル目的ヲ以テ招集セラレタリ該紛争ノ當事國ノ一
方即チ支那ハ會議ニ代表ヲ派遣シ會議ノ事業ニ完全ニ協
力スル用意アルコトヲ表明セリ會議ハ其ノ協力特ニ望マ
シキ他ノ當事國即チ日本國ノ不參加ヲ遺憾トス

六、日本帝國政府ハ「東亞ニ於ケル利害ノ程度相異リ甚シキ
ハ殆ド利害關係ヲ有セザル國ヲモ含ム多數國ノ會議ニ依
リ之ガ解決ヲ圖ルハ却テ事態ヲ紛糾セシメ之ガ正常ナル
收拾ニ大ナル支障ヲ及ボスベシトノ確信」ヲ表明セラレ
タリ

茲ニ注意ノ要アルハ同條約ノ規定ニ依レハ同條約締約國
タル總テノ國ハ該條約力之ニ賦與スル權利ヲ行使スル資
格ヲ有シ、東亞ニ權益ヲ有スル總テノ國ハ目下ノ敵對行
爲ニ依リ影響セラレ居リ且全世界ハ該敵對行爲ノ平和及
國際團體ノ各員ノ安全ニ對スル反響ヲ憂慮シ居レルコト
ナリ

然レトモ「ブリュッセル」ニ會合セル諸國代表ハ此ノ點

ニ關シ日本ノ有スル疑念ヲ解消シ得ヘシト思考ス即チ特
ニ指定セラルベキ少數國代表ト意見交換ヲ爲ス爲日本帝
國政府ガ一名若ハ數名ノ代表ヲ派遣セラルル意思アリヤ
否ヤヲ承知致度シ右意見ノ交換ハ九國條約ノ範圍内ニ於
テ且同條約ノ規定ニ準據シテ行ハルベキモノトス

右意見交換ノ目標トスル所ハ前記ノ點ヲ明ニシ紛争ノ解
決ヲ求ムルニ在ルベシ敵對行爲ノ繼續ヲ遺憾トシ、平和
的處理ノミガ本件紛争ノ永續的且建設的解決ヲ招來シ得
ベキコトヲ確信シ且調停方法ノ有效ナルヘキニ信賴シ
「ブリュッセル」ニ會合セル諸國代表ハ前記ノ如キ處理
ノ實現センコトヲ切望スルモノナリ

七、會議參加國ハ其ノ提案ニ對スル日本帝國政府ノ態度ヲ出
來得ル限り速ニ承知センコトヲ重視スルモノナリ

千九百三十七年十一月七日東京ニ於テ

編注一 本文書の原文(仏文)は省略。

二 本付記は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成

「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結

國會議經緯」より抜粋。

昭和12年11月9日

広田外務大臣より
在伊国堀田大使宛（電報）

九国条約会議再招請へのわが方対応振りを在

本邦伊国大使照会について

本省 11月9日後9時30分発

第二五九號（極秘）

貴電第二九九號ニ關シ

一、八日伊國大使本大臣ヲ來訪政府ノ訓令ニ依ル趣ヲ以テ武府會議ハ日本ニ對シ再招請ヲ發スルコト爲リタル趣ノ處（伊國政府ニシテ再招請發出ノコトヲ事前ニ承知シ居タラハ勿論反對シタルベシト附言ス）日本政府ニ於テハ參加セラルル御意嚮ナリヤ否ヤ承知シ度シ現在武府會議ノ狀況ヲ見ルニ聯盟總會ノ決議ノ方向ニ進ム傾向アル様認メラルルニ付日本側ニ於テ參加セラレザル方可ナルヤニ思考ス日本側ニテ不參加ノ回答ヲ發セラルル場合ニハ伊國側ハ武府會議ハ安定性ナキモノト認メ同會議ヲ脱退シ之ニ最後ノブローヲ與フルコトトスヘシト述べ再招請狀ニ對スル日本政府ノ回答振ヲ尋ネタルニ付本大臣ヨリ自分一己トシテハ不參加ノ考ナルカ本件ハ追ツテ決定次

第何分ノ儀御通知スヘキ旨ヲ答ヘ置キタリ

三、武府會議ニ關スル伊國側ノ我方ニ對スル段々ノ好意的措置ハ帝國政府ノ深ク多トスル所ニシテ貴大使ヨリ責任國政府ニ對シ帝國政府ノ謝意ヲ傳達セラルルト共ニ今後一層ノ好意ヲ期待スル旨申入レラレ度尙伊國代表ニモ適當ノ機會ニ可然我方ノ謝意ヲ傳ヘ置カレ度シ
米ヘ轉電、在歐大使、壽府ヘ轉報アリ度シ
上海ヘ轉電セリ

~~~~~

941

昭和12年11月11日

広田外務大臣より  
在伊国堀田大使宛（電報）

再招請へのわが方拒絶方針にかかわらず伊国  
は九国条約會議から脱退なきよう希望する旨  
同国外相へ伝達方訓令

本省 11月11日後6時45分発

第二六二號（極秘）

貴電第二九九號末段ニ關シ

會議ニ對スル代表部ノ態度ニ關シテハ固ヨリ伊國政府ノ決定ニ俟ツヘキ所ナルモ第一次會合ニ於テ會議ノ經過ガ穩健

妥當ナルヲ得タルハ伊國代表ガ内ニ在リテ會議ヲ指導シタルニ負フ所尠カラズト思考セラル從テ我方トシテハ帝國ノ不參加ニ拘ラズ伊國側ガ依然會議ニ留リテ我方ノ爲一層ノ盡力ヲ爲サンコトヲ希望スル次第ナルニ付（伊國ノ引揚ヲ一層必要且效果のナラシムル事態ハ却テ今後ニ發生スヘキヤモ知レズ）右ノ趣外相ニ傳ヘラレ度右ノ趣旨ハ十二日午前十時次官ヨリ在京伊國大使ニ申傳フベキニ付貴官ハ同時刻後ニ於テ本訓令執行セラレ度  
白ヘ轉電アリ度

942

昭和12年11月12日 広田外務大臣より  
在ベルギー来栖大使宛（電報）

九国条約會議再招請に対するわが方不参加回答

答を在本邦ベルギー大使へ手交について

付記 昭和十二年十一月十二日付

右わが方不参加回答

本省 11月12日後7時50分発

第一〇三號

十二日午後四時白國大使ノ來訪ヲ求メ武府會議再招請ニ對

スル帝國政府不参加ノ回答ヲ手交シタリ

回答文ハ一般情報トシテ電報シ英譯文ハ同盟ヲシテ電報セシム佛譯別電第一〇四號ハ貴官ヨリモ白國政府ニ御傳達相成度

往電第八二號ノ通及米ヘ轉電アリ度

（付記）

武府會議再招請ニ對スル帝國政府回答

帝國政府ハ「ブリュッセル」會議ニ關スル十一月七日附口上書ヲ受領シタリ

帝國政府ハ右口上書ニ開陳セラレタル會議參加諸國ノ見解ハ慎重ナル考慮ニ出ツルモノナルヲ諒トスルモ不幸ニシテ帝國政府カ十月二十七日附回答及聲明中ニ明示シタル其ノ見解及方針ヲ變更セシムルニ足ラサルヲ遺憾トス會議參加諸國ハ今次事變ノ平和的解決ニ關シ帝國代表ト九國條約ノ範圍内ニ於テ且同條約ノ規定ニ準據シテ意見交換ヲ行フ爲少數ノ國ノ代表ヲ指定スル用意アル旨ヲ表明セラレタリ然ル處帝國政府ハ今次帝國ノ行動ハ支那側ノ挑戦ニ餘儀ナクセラレタル自衛行動ニシテ九國條約ノ範圍外ナルヲ以テ同



條約ノ適用問題ヲ討議スルノ餘地ナシトノ見解ヲ堅持スルモノニシテ帝國ヲ以テ同條約違反者ナリトシ乍ラ同條約ノ規定ニ基ク會合ニ招請セラルルモ之ニ參加スルカ如キハ帝國政府ノ到底受諾シ得サル所ナリ

抑々今次ノ事變ハ東亞ノ特種事態ニ基クモノナルカ故ニ直接切實ナル利害關係ヲ有スル兩當事國間ニ於テ處理スルコトニ依リ最公正妥當ナル解決ニ達スルコトヲ得ヘク今次會議ノ如ク集團的機構内ニ於テ之ヲ處理セントスルトキハ徒ニ兩國民心ヲ刺戟シ却ツテ事變ノ圓滿解決ヲ阻害スヘキハ帝國ノ渝ラサル所信ナリ若シ夫レ列國ニ於テモ敍上ノ見解ヲ篤ト了解セラレ現實ノ事態ニ即シテ東亞ノ安定ニ寄與セラルル所アラハ帝國政府ノ欣幸トスル所ナリ

會議參加國ハ東亞ニ權益ヲ有スル總テノ國ハ目下ノ敵對行為ニ依リ累ヲ蒙リ且全世界ハ該敵對行為ノ平和及國際團體ノ各員ノ安全ニ對スル影響ヲ憂慮シ居ル旨開陳セラレタル處此ノ點ニ關シテハ帝國累次ノ聲明ニ明ナル通帝國ハ外國ノ在支權益ヲ尊重スル爲凡ユル努力ヲ爲シ居ルコト竝ニ今次事變ノ圓滿ナル終熄ニ依リ東亞ノ和平確立ニ最大ノ關心ヲ有スルモノナルコトヲ指摘セント欲ス

昭和十二年十一月十二日

編注 本付記は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成

「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結國會議經緯」より抜粋。

~~~~~

943 昭和12年11月12日 広田外務大臣より
在英国吉田大使宛(電報)

九国条約會議再招請に對するわが方不参加回答は列國個別の和平斡旋を拒む趣旨ではない
旨通報

本省 11月12日後10時30分発

第四九二號(極秘、館長符號扱)

貴電第八七四號ニ關シ

武府會議再招請ニ對スル十二日附我方回答ハ第一次回答ノ根本方針ニ準據シ不承諾ノ意思ヲ表示セル處右ハ我方ニ於テ英米獨伊等ノ諸國ガ個々ニ南京政府ヲ誘導シテ日支直接交渉ノ斡旋ヲナスコトヲ却クルモノニ非ルコト從來ノ方針通りニシテ用語モ其積リニテ注意シ起草シアリ大体貴電ノ

趣旨ニ合致スルモノト存ズ右御含迄

米、獨、伊、白へ轉電アリ度シ

上海へ轉電セリ

~~~~~

944

昭和12年11月13日

広田外務大臣より  
在ベルギー来栖大使宛(電報)

わが方が再招請を拒絶すれば列国は対日圧迫  
措置をとる可能性があるのでのUP報道にも鑑  
みブリュッセルにおける世論指導方訓令

本省 11月13日後4時30分発

第一〇五號

十一日貴地同盟電ハUPノ得タル信頼スベキ情報トシテ日本ガ會議トノ和平會談ヲ拒否スル場合ニハ各國ハ調停ノ努力ヲ拋棄シ支那ニ武器及クレヂットヲ供給スルコトニ依リ間接ニ日本壓迫ノ舉ニ出ヅルヤモ知レズ英佛蘇代表ハ戰爭ヲ誘發スル危険ナキ程度ノ强硬手段ヲ執ル可能性ニ付既に相互ノ意嚮ヲ打診セル旨及顧代表ガラヂオ放送ニテ侵略國ニ對スル國際的壓迫ヲ提議シ會議關係者ニ衝動ヲ與ヘタル旨ヲ報ゼルガ其ノ眞偽ノ程ハ兎モ角會議ガ萬一斯ノ如キ措

置ヲ決定スルガ如キコトアラバ我國論ハ沸騰シ政府トシテモ報復的ニ支那ノ對外交通遮斷措置ヲ第三國ニモ擴張スルノ已ムナキニ立チ至ル等重大ナル國際紛糾ヲ惹起スベキ惧アルニ付貴大使ハ此ノ趣旨ヲ体シテ貴地輿論ノ指導竝ニ伊國代表トノ連絡ニ當ラレ度シ

米、在歐大使、壽府へ轉電アリ度シ

~~~~~

945

昭和12年11月13日

日本政府の九国条約會議不参加回答に対する

同會議での各国代表演說要旨

帝國政府ノ回答ニ對スル各國代表演說

十一月十二日帝國政府ヨリノ回答ニ接シタ九國會議ハ十三日午前十一時非公開會議ヲ開催先ツ「スパーク」議長ノ開會ノ辭ニ次テ支那、英、佛、米、伊、蘇聯ノ各國代表ノ發言アリ午後四時半ヨリ議事再開ノコトトシテ一應閉會シタ右代表ノ演說ノ要旨ハ左ノ通りテアル。

△支那代表顧維鈞

本會議カ十日ニ亘ル努力ノ結果日本ニ送付スルニ至ツタ

最モ協調的ナル提案ハ膠モナク日本ノ峻拒スル所トナツタ而シテ日本ハ依然トシテ自衛權ノ發動ヲ理由トシ其ノ行動カ本條約ノ範圍外ナルコトヲ強辯シテ居ルカ同條約第七條ハ正シク今次ノ事態ニ適用サルコトハ何人モ疑ノナイ所タ、又日本ハ重ネテ日支直接交渉ヲ主張シテ居ルカ從來支那ハ斷エス日本ノコトテ苦汁ヲ喫セシメラレタ、又日本ハ極東ノ特殊ナル事態云々ヲ口ニスルモコレハ日本カ武力ニ依リ平和ヲ招致セントスルコトヲ意味スル迄ノコトテ之ヲ除ケハ何等極東ト他ノ地域トニ相違ハナイ、

又日本ハ各國トノ會談カ兩國ノ人心ヲ刺戟スト言フカ之ハ其ノ反對テ既存條約ノ原則ニ從ツテ論議スルコトコソ相互國間ノ疑念ト不信トヲ輕減スルモノテアル、要スルニ支那ノ希望スル所ハ日本ノ侵略カ終熄シ九國條約カ尊重セラルルニ在ル、支那ハ目下之カ爲單獨流血ノ慘ヲ忍ビツツアルノテアル、從テ日本ニ對スル武器及「クレヂツト」ノ供給ヲ禁シ支那ヲ援助スルノ義務カラウ、支那ハ各國カ俱ニ日本ニ對シ戰爭ヲ敢行スルコト迄ハ望マナイカ我等ニ物質的援助ヲ與ヘ以テ抵抗戰ヲ持續シ得ル

ニ至ランコトヲ望マサルヲ得ナイ而モコレハ一刻ヲモ爭フ緊切事テアル、

△英代表「イーデン」

英國ノ目的ハ平和ノ維持ニアル而シテ吾人ノ本會議ニ臨ンタノハ以下ノ理由ニ依ルモノテアル、

一、日支紛爭カ單ニ日支兩國ノミニ限ラレタルモノテハナクテ他ノ國家亦人命及權益ノ被害ヲ受ケテ居ルカ爲テアル、

二、吾人ハ九國條約ノ調印國テアリ從テ吾人ノ調印ヲ尊重スル爲ニハ本會議ニ參加セサルヲ得ナイカラテアル、抑々國際法ノ尊重ハ國家關係ヲ律スヘキ基礎ト言フヘキハ論ナキ所タカ世界ハ正適テナイ以上ハ如何ナル場合モ條約ノ變更ヲ認メスト言フ次第テハナイ、然レト其ノ變更ヲ武力ニ依リ企テントスルカ如キハ認容スルコトハ出來ヌ、斯クノ如クンハ文明ハ必ス危險ニ瀕スルモノタ、吾人ハ日本カ本會議ニ出席シ何等ノ偏見ナク意見ヲ交換シ度シト切望スルモノタ、日本カ出席ヲ峻拒シタ今日テモ尙吾人ハ何等カノ解決方法カ發見セラレナケレハナラヌトノ意見ヲ有シテ居ル、世界ハ近來武力ニ依リ事件ヲ

解決セントスル傾向カ日ニ強クナツテ居ルカ英國政府ハ之ニ反シ平和的方法ニ依ツテノミ紛争ヲ解決セナケレハナラヌトノ信念ヲ益々強ク抱クモノタ、

△佛代表「デルボス」

會議ノ事業ヲ進ムル前ニ余ハ一般原則ニ關スル數個ノ注意ヲ述ヘヨウ、吾人カ極東ニ於ケル權益竝ニ九國條約ニ依リ附與セラレタル權利ト義務トノ外ニ更ニ重大ナル問題ハ世界平和竝ニ文明ノ基礎ヲ爲スヘキ國際條約尊重ノ問題テアル、一旦莊嚴ニ調印セラレタ條約ハ其ノ調印國自身ノミナラス總テノ國家ニ取ツテモ尊重遵守ノ義務カルノタ、勿論如何ナル協定モ永久ノモノテハナク新事態ニ應シテ變更ノ餘地アルノハ當然テ其ノ變更ノ爲ニハ關係各國間ノ自由且平和ナル協力ニ依ルヘキコトハ勿論武力ヲ以テ之ヲ敢行セントスルカ如キハ許スコトノ出來ヌモノタ、次ニ平和ノ第二條件ハ各國家ノ獨立ノ尊重テアル、而シテ各國家ハ何レモ自由ニ其ノ政體ヲ撰フノ權利ヲ有ス從テ「イデオロギー」ノ「ブロック」ヲ作り又利害關係ノ聯携ヲ作ルカ如キハ世界ノ福祉竝ニ安全ニ資スル所以テハナイ、

特ニ自國ノ領土以外ニ於テ一ノ「イデオロギー」ヲ課シ又ハ之ヲ禁止スルカ如キ一切ノ計畫ハ一層相互國家間ノ爭鬭ヲ繁カラシメ世界ニ不和ト混亂トヲ招致スルニ過キナイ、故ニ余ハ平和愛好ノ小國ハ是等ノ現象ニ對シ共同スヘキ義務カアルト信スル、

何レニセヨ日本ノ今次回答ハ會議ニ於テ充分ニ檢討サレネハナラヌカ武力ニ依ル解決ハ單ニ日支兩國ノ國交ノ永久ノ調節ニ資セナイハカリカ世界ノ平和ニモ資セナイコトヲ余ハ宣言スル、

△米代表「デヴィス」

支那ニ於ケル日本ノ行動ハ他列強ノ權益ヲ危殆ニ瀕セシムル事態ヲ發生セシメタ條約履行ノ點ヨリスルモ同國自體ノ物質的利益ノ點ヨリスルモ亦世界ノ點ヨリスルモ日本カ吾人ト協力スヘキ絶對ノ理由カアルト余ハ思考スル、而シテ吾人ハ日本カ吾人トノ商議ノ扉カ開カレテ居ルコトヲ知ランコトヲ希望スル、

△蘇聯代表「ポテムキン」ハ極メテ簡單ニ蘇聯見解ハ前記

各國代表ノ一語一語トモ合致スルモノテアルト述フ、

△伊國代表「アルトロバンディ」

伊ハ他ノ各國ト同シク條約ノ尊重ヲ主張スルモノテアル
カ日支紛争ニ於テハ右ト別問題カ存在シテ居リ其ノ問題
ハ吾人トハ關係ノナイ問題テアル、

今ヤ會議ハ何等カノ決定ヲ爲サントシ居ルカ之ニ關スル
詳細ノ點力判明スレハ重ネテ伊國トシテノ見解ヲ開陳シ
ヤウ、



946

昭和12年11月15日

広田外務大臣より
在ベルギー來栖大使宛(電報)

九国条約會議が何らかの対日共同措置を決議
すれば時局收拾は遅延のおそれがある旨在本
邦英国大使へ注意喚起について

本省 11月15日午後9時30分発

第一〇六號

十五日次官英國大使ト會談ノ際次官ヨリ武府會議ハ近ク第
二次對日通牒案ヲ議決セントスル模様ナリトテ貴電第三三
八號ノ要旨ヲ告ゲ若シ日本側ニテ停戦ニ應ゼザルトキハ會
議參加國ハ何等カ共同的措置ヲ執ラントスルヤニ觀測セラ
ルル處斯ノ如キ場合ニ立チ至ルトキハ豫テ日本側ニテ言明

シ居ル日支直接交渉開始方ニ關スル主要國ノ單獨斡旋ヲモ
我方ニテ受諾困難ト爲リ時局收拾ヲ却テ遅延セシムル虞ア
リト述ベタルニ大使ハ之ヲ首肯シテ同感ノ意ヲ表シ自分ノ
得居ル情報ニ依レバ會議ハ一週間程休會ト爲ル模様ナルモ
御話ノ次第八早速本國政府ニ電報スベシト答ヘタル趣ナリ
米、在歐大使へ轉電アリ度シ
上海へ轉電セリ



947

昭和12年11月15日

九国条約會議声明

DECLARATION BY CERTAIN COUNTRIES REPRESENTED AT BRUSSELS NOVEMBER 15TH, 1937.

The Representatives of the Union of South Africa, the United States of America, Australia, Belgium, Bolivia, Canada, China, France, the United Kingdom, India, Mexico, the Netherlands, New Zealand, Portugal and the Union of Socialist Soviet Republics have drawn up the following declaration:

1. The Representatives of the above mentioned States met at Brussels, having taken cognizance of the Japanese Government's reply of November 12, 1937, to the communication addressed to the latter on November 7, 1937, observe with regret that the Japanese Government still contends that the conflict between Japan and China lies outside the scope of the Nine Power Treaty and again declines to enter into exchange of views for the purpose of endeavouring to achieve peaceful settlement of that conflict.

2. It is clear that the Japanese concept of issues and interests involved in the conflict under the reference is utterly different from the concept of most of other nations and governments of the world. The Japanese Government insists that, as the conflict is between Japan and China, it concerns those two countries only. Against this, the Representatives of the above mentioned States now met at Brussels consider this conflict of concern in law to all the countries party to the Nine Power Treaty of Washington of

1922 and to all the countries party to the Pact of Paris of 1928, and of concern in fact to all the countries members of family of nations.

3. It cannot be denied that in the Nine Power Treaty parties thereto affirmed it to be their desire to adopt the specified policy designed to stabilize the condition in the Far East and agreed to apply certain specified principles in relation with China and, in China, with one another; and that in the Pact of Paris parties agreed "that the settlement or solution of all disputes or conflicts of whatever nature or of whatever origin they may be, which may arise among them, shall never be sought except by pacific means".

4. It cannot be denied that the present hostilities between Japan and China adversely affect not only the rights of all the nations but also the material interests of nearly all the nations. The hostilities have brought to some nationals of the third countries deaths, to many nationals of the third countries great peril, to the property of the nationals of the third countries widespread destruction, to

the international communication disruption, to the international trade disturbance and loss, to the peoples of all the nations sense of horror and indignation, to all the world feelings of uncertainty and apprehension.

5. The Representatives of the above mentioned States met at Brussels therefore regard these hostilities and situation which they have brought about as matters inevitable of concern to the countries which they represent and more to the whole world. To them the problem appears not in terms simply of relations between two countries in the Far East but in the terms of law, orderly processes, world security and world peace.

6. The Japanese Government affirmed in its note of October 27, to which it refers in its note of November 12, that in employing armed force against China it was anxious to "make China renounce her present policy." The Representatives of the above mentioned states which met at Brussels are moved to point out that there exists no warrant in law for the use of armed force by any country

for the purpose of intervening in the international regime of another country and that the general recognition of such right would be a permanent cause of conflict.

7. The Japanese Government contends that it should be left to Japan and China to proceed to a settlement by and between themselves alone, but, that just and lasting settlement could be achieved by such method cannot be believed. Japanese armed forces are at present in enormous numbers on Chinese soil and have occupied large and important areas thereof. The Japanese authorities have declared in substance that it is Japan's objective to destroy the will and ability of China to resist the will and demands of Japan. The Japanese Government affirms that it is China whose actions and attitude are in contravention of the Nine Power Treaty; yet, whereas China is engaged in full and frank discussion of matters with their parties to that Treaty, Japan refuses to discuss it with any of them. The Chinese authorities have repeatedly declared that they will not, in fact that they cannot, negotiate with Japan

alone for a settlement by agreement. In circumstances, there is no ground for any belief that, if left to themselves, Japan and China would arrive in the appreciably near future at any solution which would give the promise of peace between these two countries, security for the rights and interests of their countries, and political and economic stability in the Far East. On the contrary, there is every reason to believe that if this matter were left entirely to Japan and China armed conflict with attendant destruction of life and property, disorder, uncertainty, instability, suffering enmity, hatreds and that the disturbance to the whole world would continue indefinitely.

8. The Japanese Government, in their latest communication, invite the Powers represented at Brussels to make a contribution to the stability of the Eastern Asia in accordance with the realities of the situation.

9. In the view of the Representatives of the above mentioned States met at Brussels, essential realities of the situation are those to which they draw attention to above.

10. The Representatives of the above mentioned States met at Brussels, are firmly of belief that, for the reasons given in above, just and durable settlement is not to be expected of direct negotiations between the parties. That is why, in the communication addressed to the Japanese Government, they invited that Government to confer with them or with the representatives of a small number of Powers to be chosen for that purpose, in the hope that such exchange of views might lead to acceptance of their good offices and thus help towards the negotiation of a satisfactory settlement.

11. They still believe that if the parties to the conflict would agree to a cessation of hostilities in order to give opportunity for such procedure to be tried, success might be achieved. The Chinese delegation had intimated its readiness to fall in with this procedure. The Representatives of States met at Brussels find it difficult to understand Japan's persistent refusal to discuss such a method.

12. Though hoping that Japan will not adhere to her refusal, the above mentioned States represented at Brussels, must consider what is to be their common attitude in a situation where one party to an international treaty maintains against the views of all the other parties that the action which it has taken does not come within the scope of that treaty and sets aside the provisions of the treaty which the other parties hold to be operative in circumstances.

The Representative of Sweden made the following statement:

No one can regret more deeply than does the Swedish Government to the fact that the Conference's efforts at mediation have so far remained without result. Having to take note of this fact, my Government, which adheres to the principles of the declaration but which does not possess the same political interest in the Far East as certain other Powers, feels that it is its duty to abstain from voting for this text.

The Representative of Norway made the following statement:

The Norwegian Government accept the invitation of this conference in desire thereby to contribute if possible to the settlement of the conflict in the Far East by peaceful mediation. Nobody deplore more than my Government that the efforts of the Conference towards such mediation have hitherto been fruitless. I am quite in accord with the principles underlying in the declaration before us and venture to express the hope that it may still prove possible to obtain through mediation a settlement on the basis of those principles. Referring, however, to my previous declaration made on 13th instant, I find it proper to abstain from voting.

The Representative of Denmark made the following statement:

I should like to associate myself with the statements just made by my colleagues from Sweden and Norway. Also my country deprecates that the efforts for mediation

have hitherto not met with success, and I fully share the hope that through the means of mediation it may still be possible to obtain some results. For similar reasons as those given by my Scandinavian colleagues, I also think it proper to abstain from voting on the text of this declaration, while fully in accord with the principles laid down therein.

The Representative of Italy made the following statement:

Italy considers the declaration before us as a door open not towards the settlement of the conflict, but rather towards the most serious complications.

Italy does not intend to assume responsibilities that might devolve therefrom, and therefore expresses her definitely contrary to the vote, whilst reserving her attitude as regards all that concerns the subsequent phases of the dispute.

編注一 本声明の和訳については、本書第91文書の九国条約会

議報告中の「十一」を参照。

二 本文書は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成
「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結
國會議経緯」より抜粋。

~~~~~

948 昭和12年11月19日 広田外務大臣より  
在ベルギー来栖大使宛(電報)

九国条約會議声明に対しては反駁聲明などは  
行わず事態を静観する方針決定について

本省 11月19日後8時30分発

第一一五號(極秘)

武府會議ノ聲明ニ關シ右ハ我方ニ通告モナキノミナラズ其  
ノ後ノ情勢ニ顧ミ此ノ際我方ヨリ反駁聲明等ヲ爲サズ事態  
ヲ見送ルコトニ決定セリ尤モ二十二日以後ニ於テ情報部長  
談等ノ形式ニテ我方ノ見解ヲ表示スル筈

尙事變ノ收拾ニ付帝國ハ日支直接交渉ノ方針ヲ堅持スルモ  
右ハ強チ我方ニ於テ前記直接交渉ヲ誘導助長スル爲ノ第三  
國ノ斡旋ヲ一概ニ拒否スルモノニ非ザルヲ以テ十月二十七  
日會議不参加ノ回答交付ノ際以來機會アル毎ニ在京英米獨

伊ノ四國大使ニ對シテハ前記直接交渉ノ機運醸成ニ盡力スル様希望ヲ表示シ居ル次第ナリ右御含ミ迄

在歐大使、瑞典、蘭、葡、壽府へ轉電アリ度シ

米へ轉電米ヲシテ墨へ轉電セシメラレ度シ

上海へ轉電セリ

~~~~~

949 昭和12年11月20日 広田外務大臣より
在英国吉田大使宛(電報)

九国条約会議内の対日空氣悪化を懸念する英

国側が英米による和平斡旋を提案したがわが

方は直ちには同意困難と回答について

本省 11月20日後10時10分発

第五〇八號(極秘、館長符號扱)

十九日在京英國大使ハ他用ニテ堀内次官來訪ノ際武府會議ハ二十二日更ニ會合スルコトナリ居ル處自分トシテハ同會議ニ於テ問題ヲ聯盟ニ移スカ又ハ支那ニ對シテ武器供給等ノ援助ヲ決議スルカ如キコトアリテハ甚タ面白カラスト思考シ本國政府ニ對シ成ルヘク五ヶ國委員會ヲ設ケ之ヲシテ引續キ日支兩國ト接觸ヲ保タシムルコトニ決定ヲ見ル様

意見ヲ具申シ居ル次第ナルガ同會議ヲシテ右ノ如キ穩カナ

ル決定ヲ爲サシムルタメニハ日本側ニテモ時局收拾ニ關スル何等カ方法ヲ考慮セラルルコトヲ得ザルヤ之ハ全然自分

一個ノ思付キナルモ例ヘハ英米二國ニ於テ「メデイエータ

ー」トシテニハ非ス「インターメデイアリ」トシテ日支双

方ノ主要條件ヲ取次ギ直接交渉ノ基礎ヲ見出スコトナシ

テハ如何ト申出テタルガ同日更ニ同大使ヨリ本大臣ニモ右

二國斡旋案ニ付テ同様申出アリタリ、仍テ當方ニ於テハ篤

ト考慮ヲ加ヘタル末不取敢次官ヨリ同大使ニ對シ諸般ノ事

情ヨリシテ此ノ際直ニ右ノ如キ案ニ同意シ兼ヌル旨回答セ

シメ置キタリ、右貴使限リノ極秘御含ミ迄

在白大使ニ轉電アリタシ

~~~~~

950 昭和12年11月22日 広田外務大臣より  
在ベルギー來栖大使宛(電報)

九国条約會議の声明に反駁する意向はなく日

中直接交渉実現に向けた列国の斡旋を希望す

る旨在本邦ベルギー大使へ説明について

本省 11月22日後5時発

第一一七號

二十二日白國大使次官ヲ來訪ロンドンタイムスノ所報ニ依レバ日本政府ハ十五日ノ武府宣言ニ關シ本日聲明ヲ發表セラルル趣ナル處事實ナリヤ本國政府ヨリ問合セ來レリト述ベタルニ付次官ヨリ差向キ其考ナキ旨答ヘ置ケリ

其ノ節大使ヨリ十二日ノ日本政府回答中列國ニ於テ現實ノ事態ニ即シテ東亞ノ安定ニ寄與セラルル所アラバ欣幸トスル旨述ベアル處其ノ意義如何ト質問セルニ付次官ハ右ハ列國ニ於テ日支直接交渉ヲ開始スル様支那側ヲ誘導セラレンコトヲ希望ストノ儀ナリト説明セル處同大使ハ右ハ過日外務大臣ヨリモ承ハリタル所ナリト云ヘルニ付日本政府ノ考ハ今モ變ル所ナシト述ヘ尙大使ノ問ニ對シ今日迄ノトコロ右幹旋ヲ申出デタル國ナキコト及支那側ノ意嚮ニ關シ情報ヲ供給セル國アルモ之ニ依レバ支那側ハ今尙九國會議ヲ賴リニシ直接交渉ノ意嚮ナキ模様ナルコトヲ説明シ置キタル趣ナリ

米ヘ轉電シ在歐大使ヘ轉報アリ度シ  
上海ヘ轉電セリ

951 昭和12年11月24日

九国条約會議報告書

十一月二十四日「ブリュッセル」會議報告書

一、「ブリュッセル」會議ハ米國政府ノ同意ヲ得タル英國政府ノ要請ニ從ヒ白耳義政府ニ依リ招集セラレタリ右會議ハ千九百三十七年十一月三日開會セラレタル處其ノ事業ハ今ヤ之カ本質的部面ヲ想起スルコトヲ望マシトスル段階ニ到達セリ

二、千九百二十一年ヨリ千九百二十二年ニ亘ル冬「ワシントン」ニ於テ相互ニ關聯セル一團ノ條約及協定調印セラレタル處就中重要ナルモノ一ハ支那ニ關スル諸原則及政策ニ關スル九國條約ナリキ  
右條約及協定ハ綿密ナル檢討ノ上自由ニ協定セラレタルモノナル處其ノ本質的目的ハ太平洋地域ニ於ケル安定及安全ノ諸條件ヲ確立スルニ在リタリ

九國條約ハ第一條ニ於テ左ノ如ク規定シ居レリ  
(一) 支那ノ主權、獨立竝ニ其ノ領土的及行政的保全ヲ尊重スルコト

(二)支那カ自ラ有力且安固ナル政府ヲ確立維持スル爲最完全ニシテ且最障礙ナキ機會ヲ之ニ供與スルコト

(三)支那ノ領土ヲ通シテ一切ノ國民ノ商業及工業ニ對スル機會均等主義ヲ有效ニ樹立維持スル爲各盡力スルコト  
(四)友好國ノ臣民又ハ人民ノ權利ヲ減殺スヘキ特別ノ權利又ハ特權ヲ求ムル爲支那ニ於ケル情勢ヲ利用スルコトヲ及右友好國ノ安寧ニ害アル行動ヲ是認スルコトヲ差控フルコト

以上ノ諸約定竝ニ其ノ他ノ諸條約ニ定メラレタル諸規定ニ基キ且之ニ照ラシ太平洋地域ノ情勢ハ十年ノ間眞乎ノ安定ト從テ右諸條約ニ豫見セラレタル方向ヘノ顯著ナル進歩トヲ以テ其ノ特徴トシ來レリ然ルニ最近數年間ニ於テ日支兩國間ニ聯繫セル紛爭續出シ右ハ竟ニ今次ノ戰鬪行爲ヲ誘發シタリ

三、會議招請狀ノ文言ニ從フモ「ブリュッセル」會議ノ目的トスル所ハ「九國條約第七條ニ基キ東亞ニ於ケル事態ヲ檢討シ且該地域ニ行ハルル遺憾ナル紛爭ノ終結ヲ促進スヘキ和協手段ヲ攻究スル」コトタラサルヘカラス、日本ヲ除ク外千九百二十二年二月六日ノ九國條約ニ署名シ

タル又ハ之ニ加入シタル一切ノ國ハ右招請ヲ受諾シ招請狀ニ表明セラレタル目的ノ爲「ブリュッセル」ニ其ノ代表ヲ派遣セリ

四、右會議ニ代表ヲ派遣シ且有效的ニ其ノ議事ニ參加シタル支那政府ハ九國條約ノ他ノ締約國ト同條約第七條ノ規定ニ從ヒ商議ニ入りタリ支那政府ハ其ノ現在ノ軍事行動ハ支那ニ於ケル日本ノ武力侵入ニ抵抗スル意思ニ基クニ外ナラサル旨ヲ宣言シ支那政府ハ九國條約ノ原則ヲ基礎トシタル平和ヲ受諾シ且條約ノ神聖ノ原則ヲ維持スル爲他ノ諸國ト其ノ全誠意ヲ以テ協力スル用意アルコト宣明シタリ

五、日本政府ハ會議ノ招請ヲスラ受諾シ能ハサルコトニ遺憾ヲ表明スルト共ニ「今次帝國ノ支那ニ於ケル行動ハ支那側ノ極端ナル排日抗日政策ノ強行特ニ實力ヲ以テスル挑發行爲ニ依リ餘儀ナクセラレタル自衛措置ニシテ帝國政府累次ノ聲明ノ如ク九國條約ノ範圍外」ナルコトヲ確言シタリ日本政府ハ更ニ多數國ノ會議ニ依リテ解決ヲ圖ルハ却テ事態ヲ紛糾セシメ公正妥當ナル解決ニ大ナル支障ヲ及ホスヘキ旨ヲ強調シタリ

六、千九百三十七年十一月七日會議ハ白耳義政府ノ仲介ニ依リ日本政府ニ對シ通牒ヲ送り右通牒ニ依リ日本政府ニ對シ特ニ指定セラレタル少數國ノ代表ト意見ノ交換ヲ爲ス爲一名若ハ數名ノ代表ヲ任命スル意思アリヤヲ質シタリ但シ右意見交換ハ係爭點ヲ更ニ明白ニ決定シ且日支紛爭ノ解決ヲ容易ナラシムル爲九國條約ノ範圍内ニ於テ且同條約ノ諸規定ニ基キテ行ハルヘキモノタリシナリ右通牒ニ於テ「ブリュッセル」ニ會合セル諸國代表ハ平和的解決ノ齋サレンコトヲ熱望スル旨ヲ表明シタリ

七、日本政府ハ千九百三十七年十一月十二日其ノ先ニ表明シタル見解ヲ堅持セサルヲ得サル旨回答シタリ右見解ハ支那ニ對スル今次日本ノ行動ハ自衛措置ヲ構成スルモノニシテ九國條約ノ範圍外ナルコト竝ニ兩當事國ノ共同ノ努力ノミカ最公正妥當ナル解決ニ到達スルコトヲ得シムヘク且本會議ノ如キ集團の機構ニ依ル干涉ハ徒ニ兩國國民心ヲ刺戟シ事變ノ圓滿解決ヲ阻礙スルニ過キサルヘシト言フニアリタリ

八、十一月十五日會議ハ一ノ聲明ヲ採擇シ右聲明ニ於テ南阿聯邦、「アメリカ」合衆國、濠洲、白耳義、「ボリヴィ

ア」、加奈陀、支那、佛蘭西、英國、印度、「メキシコ」、「ニュージーランド」、和蘭、葡萄牙及「ソヴィエト」社會主義聯邦共和國ノ代表ハ今次ノ紛爭ハ千九百二十二年ノ「ワシントン」九國條約締約國タル一切ノ國竝ニ千九百二十八年ノ巴里規約締約國タル一切ノ國ニ法律上關係アリ且事實上國際團體ノ成員タル一切ノ國ニ關係アルモノト認ムル旨ヲ確言セリ

九、前記ノ會議及日本政府間ノ意見ノ相違ニ鑑ミ會議ハ目下ノ所其ノ任務力和協的ニ平和ヲ回復スル爲日本ト連絡ヲ開始スルニ存スル限り右任務ヲ果スヲ得ルモノト認メラレス仍テ會議ハ其ノ事業ノ右段階ヲ終結シ且休會スルニ當リ新ナル聲明ヲ採擇ス

十、千九百三十七年十一月七日日本政府ニ送付セラレタル通牒ノ文言ハ左ノ如シ

(一)十一月三日「ブリュッセル」會議參加國代表ハ十月二十七日白國政府ノ招請狀ニ對スル日本帝國政府ノ回答竝ニ右回答ニ附隨セル聲明ヲ了知セリ

(二)日本帝國政府ハ右文書中ニ於テ就中支那ノ領土ヲ侵略スルカ如キ意圖ナキノミナラス却テ支那國民ノ物質的



精神的向上ヲ祈念スルモノニシテ又外國ノ在支權益ハ飽迄之ヲ尊重シツツ列國ト共ニ文化的及經濟的協調ヲ期シ居ラルル次第ヲ表明セラレタリ

(三) 右聲明ニ於テ述ヘラレタル諸點ハ千九百二十二年二月六日華盛頓ニ於テ署名セラレタル條約(九國條約)ノ根本原則ノ或モノヲ表ハセルモノナリ該條約締約國ハ右ニ關スル日本帝國政府ノ聲明ヲ了承セリ

(四) 加之日本帝國政府ハ日本ニ依ル九國條約違反ノ問題ヲ發生スル餘地ナキコトヲ言明セラレ且支那政府ニ對シ幾多ノ苦情ヲ陳述セラレタリ支那政府亦同條約ノ違反アリタリト爲シ日本政府ノ苦情ヲ拒否シ進テ支那ヨリノ苦情ヲ述ヘ居レリ

(五) 九國條約ハ正ニ斯クノ如キ事態ヲ目的トスル規定ヲ包含ス「ブリュッセル」ニ於テ行ハレツツアル意見ノ交換ハ本質的ニ此等ノ規定ニ基礎ヲ置キ第七條ニ規定セラルル充分ニシテ且隔意ナキ交渉ヲ構成スルモノナルコトヲ茲ニ指摘スルヲ要ス本會議ハ締約國間ノ紛爭ノ平和的解決ヲ援助スル目的ヲ以テ招集セラレタリ該紛爭ノ當事國ノ一方即チ支那ハ會議ニ代表ヲ派遣シ會議

ノ事業ニ完全ニ協力スル用意アルコトヲ表明セリ會議ハ其ノ協力特ニ望マシキ他ノ當事國即チ日本國ノ不參加ヲ遺憾トス

(六) 日本帝國政府ハ「東亞ニ於ケル利害ノ程度相異リ甚シキハ殆ト利害關係ヲ有セサル國ヲモ含ム多數國ノ會議ニ依リ之ヲ解決ヲ圖ルハ却テ事態ヲ紛糾セシメ之カ平常ナル收拾ニ大ナル支障ヲ及ホスヘシトノ確信」ヲ表明セラレタリ

茲ニ注意ノ要アルハ同條約ノ規定ニ依レハ同條約締約國タル總テノ國ハ該條約力之ニ賦與スル權利ヲ行使スル資格ヲ有シ、東亞ニ權益ヲ有スル總テノ國ハ目下ノ敵對行爲ニ依リ影響セラレ居リ且全世界ハ該敵對行爲ノ平和及國際團體ノ各員ノ安全ニ對スル反響ヲ憂慮シ居レルコトナリ

然レトモ「ブリュッセル」ニ會合セル諸國代表ハ此ノ點ニ關シ日本ノ有スル疑念ヲ解消シ得ヘシト思考ス即チ特ニ指定セラルヘキ少數國代表ト意見交換ヲ爲ス爲メ日本帝國政府カ一名若ハ數名ノ代表ヲ派遣セラルル意思アリヤ否ヤヲ承知致度シ右意見ノ交換ハ九國條約ノ

範圍内ニ於テ且同條約ノ規定ニ準據シテ行ハルヘキモノトス

右意見交換ノ目標トスル所ハ前記ノ點ヲ明ニシ紛争ノ解決ヲ求ムルニ在ルヘシ敵對行爲ノ繼續ヲ遺憾トシ、平和の處理ノミカ本件紛争ノ永續の且建設的解決ヲ招來シ得ヘキコトヲ確信シ且調停方法ノ有效ナルヘキニ信賴シ「ブリュッセル」ニ會合セル諸國代表ハ前記ノ如キ處理ノ實現センコトヲ切望スルモノナリ

(七)會議參加國ハ其ノ提案ニ對スル日本帝國政府ノ態度ヲ出來得ル限り速ニ承知センコトヲ重視スルモノナリ

十一、千九百三十七年十一月十五日ノ聲明ノ文言ハ左ノ如シ

南「アフリカ」聯邦、「アメリカ」合衆國、濠洲、白耳義、「ボリヴィア」、加奈陀、支那、佛國、英國、印度、墨西哥、和蘭、新西蘭、葡萄牙及「ソヴィエト」聯邦代表ハ次ノ聲明ヲ作成セリ

(一)「ブリュッセル」ニ於テ會合シタル上記諸國ノ代表ハ千九百三十七年十一月七日日本政府ニ宛テタル通牒ニ對スル十一月十二日附日本政府ノ回答ヲ了承シタルカ

日本政府カ依然トシテ日支間ノ紛争ハ九國條約ノ範圍外ニアリト爲シ該紛争ノ平和的解決ヲ達成セントノ努力ヲ目的トスル意見ノ交換ヲ行フコトヲ再ヒ拒絕セルコトヲ認ムルヲ遺憾トス

(二)本紛争ニ包含セラルル問題及利害關係ニ對スル日本ノ觀念ハ世界ノ他ノ大多數ノ國民及政府ノ觀念ト著シク相違セルモノナルコト明白トナレリ日本ハ紛争カ日支間ノモノナルヲ以テ右兩國ノミニ關スル所ナリト主張スル處之ニ反シ今次「ブリュッセル」ニ於テ會合セル上記諸國代表ハ本紛争ヲ以テ法理上千九百二十二年ノ華府九國條約ノ一切ノ締約國、千九百二十八年ノ巴里條約ノ一切ノ締約國及事實上國際團體ノ成員タル一切ノ諸國ニ關係アリト爲スモノナリ

(三)九國條約ニ於テ同條約締約國ハ極東ニ於ケル事態ノ安定ヲ目的トスル特定ノ政策ヲ採用スルコトノ希望ヲ確認シ且支那トノ關係ニ於テ又支那ニ於テ相互ニ或特定ノ原則ヲ適用スルコトニ同意シタルコト且又巴里條約ニ於テ締約國ハ「相互間ニ起ルコトアルヘキ一切ノ紛争又ハ紛争ハ其ノ性質又ハ起因ノ如何ヲ問ハス平和的

手段ニ依ルノ外之カ處理又ハ解決ヲ求メサルコト」ヲ約シタルコトハ之ヲ否定スルコトヲ得ス

(四) 日支間ニ於ケル現在ノ敵對行爲ハ一切ノ諸國ノ權益ノミナラス殆ト一切ノ國ノ有形的利益ニモ不利ニ影響シタルコトハ之ヲ否定スルヲ得ス右敵對行爲ノ結果ハ既ニ第三國國民ノ若干ヲ死ニ到ラシメ第三國ノ幾多ノ國民ヲ大ナル危險ニ曝シ第三國國民ノ財産ヲ廣汎ニ互ツテ壞滅シ國際交通ヲ杜絶セシメ國際通商ニ對シテ混亂ト損害トヲ與ヘ一切ノ國ノ國民ニ對シテ恐怖ト義憤トノ念ヲ抱カシメ全世界ヲ驅ツテ不確定ト不安トニ陥ラシメタリ

(五) 「ブリュッセル」ニ會合シタル上記諸國代表ハ從ツテ斯クノ如キ敵對行爲及ヒ之ニ基ク事態ハ各自ノ代表スル國ニ又之ヲ大ニシテハ全世界ニ不可避的ニ關係アル問題ナリト看做スモノナリ前記代表トシテハ問題ハ單ニ極東ニ於ケル二國間ノモノタルニ止マラスシテ法規、秩序アル手續竝ニ世界ノ安全及世界平和ノ問題ナリト認メラル

(六) 日本政府ハ其ノ十一月十二日附通牒ニ引用シタル十月

二十七日附通牒ニ於テ支那ニ對スル兵力ノ使用ハ支那ヲシテ其ノ現在ノ政策ヲ拋棄セシメント希望スルモノナルコトヲ確言シタリ「ブリュッセル」ニ會合シタル上記諸國代表ハ他國ノ內政ニ干渉スル目的ヲ以テ兵力ヲ使用スルコトニ對シテハ如何ナル國ニ依テ爲サルト雖法律上何等ノ根據存セサルコト竝ニ斯クノ如キ權利ヲ一般的ニ承認スルコトハ紛爭ノ不斷ノ原因タルヘキコトヲ指摘セント欲ス

(七) 日本政府ハ本紛爭ノ解決ハ日支兩國間ニ於テ且兩國限リニ依リテノミ爲サルヘキモノナルコトヲ主張ス然レトモ右ノ如キ方法ニ依リテ公正且恆久的ナル解決力達成セラレ得ヘシト信スルコトハ不可能ナリ現在多數ノ日本軍隊ハ支那領土ニ在リテ其ノ廣大且重要ナル地域ヲ占據シ居レリ日本官憲ノ宣言ハ其ノ趣旨ニ於テ日本ノ目的ヲ以テ日本ノ意思及要求ニ抵抗セントスル支那ノ意思及能力ヲ挫カントスルニアリト爲シ又日本政府ハ支那ノ行動及態度コソ九國條約ニ違反スルモノナルコトヲ確言セリ然ルニ支那ハ本件ニ關シ九國條約ノ他ノ締約國ト充分ニシテ且隔意ナキ交渉ヲ行ヒ居ルニ反

- シ日本ハ條約國ノ何レトモ之ヲ討議スルコトヲ拒絕セリ支那官憲ハ其ノ累次ノ宣明ニ於テ協定ニ依ル解決ノ爲ニ日本ノミト交渉スル意思ナク又事實上右ノ不可能ナルコトヲ明白ニシタリ斯ル狀勢ニ於テ日支兩國ノミニ委スルニ於テハ近キ將來ニ於テ兩國間ノ平和、他國ノ權利及利益ノ保障竝ニ極東ニ於ケル政治上及經濟上ノ安定ヲ約束スルカ如キ何等ノ解決ニ到達スヘキコトヲ信スヘキ何等ノ根據ナシ若シ事件ヲ全然日支兩國ノ決定ニ委スルニ於テハ生命及財産ノ破壊、無秩序、不確定、不安定、困苦、敵愾心、嫌惡及全世界ニ對スル混亂ヲ伴フ武力紛爭ハ永遠ニ繼續スヘキコトヲ信スヘキ凡ユル理由存在ス
- (ハ) 日本政府ハ今回ノ通牒ニ於テ「ブリュッセル」ニ代表セラレ居ル列國ニ對シ現實ノ事態ニ即シテ東亞ノ安定ニ寄與スヘキコトヲ要請セリ
- (九) 「ブリュッセル」ニ會合シタル上記諸國代表ノ意見ハ以上注意ヲ喚起セル諸點コソ正ニ事態ノ本質の現實ナレト爲スモノナリ
- (十) 「ブリュッセル」ニ會合シタル上記諸國ノ代表ハ如上

ノ理由ニ依リ公正且永續のナル解決ハ兩當事國間ノ直接交渉ヨリ期待スルコトヲ得サルヘキコトニ付確信ヲ有ス日本政府ニ宛テタル通牒ニ於テ日本政府力「ブリュッセル」ニ會合シタル諸國ノ代表又ハ右目的ノ爲選ハルヘキ少數ノ國ノ代表ト會商センコトヲ要請シタルハ斯カル意見交換ノ結果ハ其ノ斡旋ヲ受諾シ延イテ満足ナル解決ノ交渉ニ到ルニ資スヘキ希望ノ下ニ正ニ以上ノ理由ニ基ケルモノナリ

- (十一) 「ブリュッセル」ニ會合シタル上記諸國ノ代表ハ紛爭當事國カ斯クノ如キ手續ヲ試ル機會ヲ與フル爲敵對行爲ノ中止ニ同意スルニ於テハ今尙成功ヲ獲チ得ル望アルコトヲ信スルモノナリ支那代表部ハ右手續ニ同意スル用意アルコトヲ示シタリ「ブリュッセル」ニ會合シタル諸國ノ代表ハ日本カ斯クノ如キ方法ヲ討議スルコトヲ執拗ニ拒絕スルコトヲ理解スルニ苦シムモノナリ
- (十二) 日本カ右ノ如キ拒絕の態度ヲ固執セサランコトヲ希望シツツ「ブリュッセル」ニ代表セラレタル上記諸國ハ國際條約ノ一締約國カ他ノ一切ノ締約國ノ意見ニ反對シ自國カ執リタル行動ヲ以テ該條約ノ範圍外ニアリト

爲シ且他ノ締約國カ右事態ニ於テ適用アリト信スル條約上ノ條項ヲ看過スル事態ニ於テ其ノ共同ノ態度ノ何タルヘキカニ付考慮スルヲ要ス

瑞典代表「ド・ダルデル」氏ハ次ノ聲明ヲ爲シタリ

調停ヲ爲サントスル會議ノ努力カ今日迄成果ヲ得サリシ事實ニ對シテ深甚ナル遺憾ヲ感スルコト瑞典政府ニ勝ルモノアラサルヘシ右ノ事實ニ直面シタル瑞典政府ハ聲明ノ原則ニハ贊意ヲ表スルモノナルモ極東ニ他ノ列強ノ場合ニ於ケル如キ政治的利害關係ヲ有セサルヲ以テ本聲明ニ投票スルコトヲ棄權スルヲ以テ其ノ任務ナリト信ス

諸威代表「オーベル」氏ハ次ノ聲明ヲ爲シタリ

諸威政府ハ本會議ノ招請ヲ出來得ヘクンハ之ニ依テ極東ニ於ケル紛争ノ平和的調停ニ依ル解決ニ寄與セントノ希望ニ基イテ受諾セリ斯ル調停ニ對スル會議ノ努力カ今日迄何等ノ成果ヲ得サリシコトヲ遺憾トスルコト諸威政府ニ如クモノアラサルヘシ余ハ本聲明中ニ流ルル原則ニ全ク同感ニシテ右諸原則ヲ基礎トシテ調停ニ依リ解決ノ齎サルヘキコトノ尙可能ナルヘキコトヲ敢

テ希望スルモノナリ然レトモ本月十三日余ノ爲シタル宣言ニ鑑ミ余ハ投票ヲ棄權スルヲ以テ正當ナリト認ム  
丁抹代表「ヘンリック」氏ハ次ノ聲明ヲ爲シタリ

余ハ今瑞典及諸威同僚ノ爲シタル聲明ニ贊同セント欲ス丁抹國モ調停ニ對スル努力カ今日迄成功ニ到ラサリシヲ遺憾トスルモノニシテ余モ亦爰ニ調停手段ニ依リ何等カノ結果ヲ齎スコトノ尙可能ナルヘキヲ希望スルモノナリ聲明中ニ含マルル諸原則ニハ全幅の贊意ヲ有スルモノナルカ「スカンヂナヴィア」同僚ノ下シタルト同様ノ理由ニ基キ余モ本聲明ノ正文ニ投票スルコトヲ棄權スルヲ以テ正當ナリト認ム

伊太利代表「アルドロヴァンディ」氏ハ次ノ聲明ヲ爲シタリ

伊太利ハ本聲明ヲ以テ紛争ノ解決ノ爲ニスルニアラスシテ寧ロ其ノ最深刻ナル紛糾ニ對シテ途ヲ開クモノナリト思考ス

伊太利ハ之ニ基イテ發生スルコトアルヘキ責任ヲ取ル意圖ヲ有セス從ツテ之レカ票決ニ決定的ニ反對ノ意ヲ表ス但シ爾後ニ於ケル紛争ノ局面ニ關スル一切ニ就テ

ハ其ノ態度ヲ留保スルモノナリ

十二、千九百三十七年十一月二十四日ノ聲明ノ文言左ノ如シ

(一) 九國條約ハ世界ノ各國カ或種ノ原則ヲ明ニシ相互ノ關係ニ於テ約束ニ依ル或種ノ制限ヲ課シ且他國ノ主權ヲ尊重シ他國ニ對スル政治的若ハ經濟的ノ一切ノ霸權ヲ拋棄シ他國ノ内政ニ對スル一切ノ干涉ヲ相互ニ差控フヘキコトヲ嚴肅ニ約束セル數多ノ國際的文書ノ顯著ナル一例ナリ

(二) 此等ノ國際的文書ハ武力ニ訴フルコトナクシテ國際的安全及平和ヲ保持スルヲ目的トシ且依テ以テ諸國民間ノ關係カ相互ノ信賴、善意並ニ總テノ國ニ有益ナル商業的及金融的關係ヲ基礎トシテ成立シ得ヘキ機構ヲ構成スルモノナリ

(三) 此等ノ原則ヲ無視シテ武力ニ訴フルコトハ條約ニ依リ與ヘラルル保障ヲ基礎トスル國際關係ノ全組織ヲ動搖セシムルモノナルコトハ否定スルヲ得ス斯ル場合ニハ總テノ國ハ軍備ヲ不斷ニ増大シテ安全ヲ追求セサルヲ得ス其ノ結果トシテ一般のナル不安定ト不安全ノ感情

ヲ生ス此等ノ原則ノ有效性ハ武力ヲ以テ破壊スルヲ得ス此等ノ原則カ普遍的ニ適用セラレ得ルコトヲ否定スルヲ得ス最後ニ此等ノ原則カ文明ト進歩トノ不可缺ノ條件タルコトヲ爭フヲ得ス

(四) 本會議カ白耳義政府ノ送付セル招請狀ニ言ヘル如ク「九國條約第七條ニ基キ東亞ニ於ケル事態ヲ檢討シ且該地域ニ行ハルル遺憾ナル紛爭ノ終結ヲ促進スヘキ和協手段ヲ攻究スル爲」「ブリュッセル」ニ招集セラレタルハ此等ノ原則ニ合致スルモノナリ

(五) 十一月三日開會以來會議ハ和解ヲ促進シ且敵對行爲ヲ終止シ協定ノ締結ニ資セン爲日本政府ノ協力ヲ得ン爲終始一切ノ努力ヲ傾倒セリ

(六) 國際紛爭ノ公正且永續のナル解決ハ一切強力ノ使用ニ依リテ齎サルヘキモノニアラストハ會議ノ確信スル所ナリ會議ハ本紛爭ノ兩當事國ニ於テ一般的且永續の解決ノ先決要件タル敵對行爲ノ急速ナル終止ヲ齎サンカ爲他ノ諸國カ供與シタル支援ヲ利用スルコトカ其ノ直接且眞實ノ利益タルヘキコトヲ今尙信スルモノナリ同様ニ會議ハ満足ナル解決ハ紛爭ノ當事國ノミノ間ニ於

ケル直接ノ交渉ニ依リテハ到達シ得ス又内容ノ公正ニシテ一切ノ國ニ依リ受諾セラレ得ヘキ且永續スヘキ望ヲ有スル協定ハ他ノ主要ナル利害關係國トノ協議ノ方途ヲ選フニアラスンハ到達シ得サルヘキコトヲ信スルモノナリ

(七)本會議ハ九國條約ノ原則ハ世界平和ノ維持ノ爲又國家生活及國際生活ノ秩序アリ且進歩的ナル發展ノ爲尊重セサルコトヲ得サル根本原則ノ一ナルコトヲ重ネテ確言セント欲スルモノナリ

(八)會議ハ東亞ニ於ケル敵對行爲ノ速ナル終止ハ單ニ日支兩國ノミナラス一切ノ諸國ノ真正ナル利益ニ資スヘキコトヲ確信ス一日遅ルルニ於テハ人命ノ損失及財産ノ破壊ヲ増大シ紛争ノ解決ヲ一層困難ナラシムヘシ

(九)從テ會議ハ敵對行爲ノ終止セラレ平和的手續ニ移サレンコトヲ勸奨シテ熄マサルモノナリ

(十)會議ハ紛争ヲ平和的且公正ニ解決スヘキ手段ハ一切之ヲ等閑視又ハ省略スヘカラサルモノト認ム

(十一)會議ハ九國條約ノ諸原則ヲ遵奉シ同條約ノ目的ニ忠實ナルト共ニ參加國ヲシテ意見ヲ交換シ紛争ノ解決ヲ齎

スヘキ一切ノ平和的且妥當ナル方法ノ探究ヲ繼續セシムル爲茲ニ會合ヲ一時中止スルヲ以テ適切ナリト認ムルモノナリ右ト同時ニ「ブリュッセル」ニ會合シタル一切ノ諸國ハ九國條約ノ當事國タル事實又ハ東亞ニ特殊ノ權益ヲ有スル事實ニ鑑ミ東亞ニ於ル紛争力依然其ノ全體ノ關心事タリト爲スニ於テ何等淪ル所ナシ右ハ殊ニ東亞ニ於ケル事態及事變ノ推移ニ依テ一層迅速且直接ナル影響ヲ蒙レル參加國中ノ一部ノ諸國ニ於テ特ニ然リトス參加國中九國條約ノ當事國ハ明白ニ東亞ニ於ケル事態ヲ安定セシムルコトヲ目的トスル政策ヲ採用シタルモノニシテ右諸國ハ右目的ノ爲同條約ノ規定ニ準據スルコトヲ要シ右規定中最重要ナルヲ第一條及第七條ナリトス

(十二)會議ハ其ノ議長又ハ參加國中何レカノ二國ニ於テ議事ノ再開ヲ有益ナリト認ムル旨ヲ宣言シタル場合ニ於テ更メテ招集セラルヘシ

編注一 本文書の原文(仏文)は省略。

二 本文書は、昭和十二年十二月、条約局第三課作成



「ブリュッセル」ニ於ケル支那ニ關スル九國條約締結  
國會議經緯」より抜粋。

952

昭和12年11月24日

広田外務大臣より  
在仏国杉村大使宛（電報）

日中直接交渉に向けた第三国への斡旋要請に  
關し仏国を除外した理由について

本省 11月24日午後7時20分發

第三七八號（極秘、館長符號扱）

貴電第七〇二號ニ關シ

我方ハ時局拾收ニ關シ日支直接交渉ヲ根本方針トシ只右交  
渉誘導ノ爲ニスル第三國ノ斡旋ハ強チ之ヲ拒否セズトノ態  
度ヲ執リ居ル處右第三國ノ範圍ハ最小限度トシ即チ東亞ニ  
利害特ニ關係深キ英米及我方ト特殊關係ニ在ル獨伊ニ限定  
スルヲ望マシト認メ從來當地ニテハ四國使臣ト夫々其ノ趣  
旨ヲ以テ接衝シ居ル次第ナリ御含ミ迄

953

昭和12年11月25日

在ベルギー來栖大使より  
広田外務大臣宛（電報）

九国条約會議が成果なく閉幕した要因について

ブリュッセル 11月25日後發

本省 11月26日前着

第四〇〇號（極秘）

今次會議ハ御承知ノ通り遂ニ内容空虚ナル一報告書ヲ採擇  
シタルノミニテ終幕ノ已ムナキニ至リタル次第ニテ支那代  
表部ノ如キハ會議内外ニ於テ極度ニ憤懣ノ情ヲ洩ラシ居ル  
狀況ナルカ右ハ（イ）皇軍ノ殊ニ上海戰線ニ於ケル大勝ト南京  
政府事實上ノ崩壞（ロ）英米兩國ニ對スル閣下竝ニ現地大使ノ  
工作ハ「スカンデナビヤ」三國ノ消極的態度（ニ）伊全權不屈  
不撓ノ努力等ニ基因スルニ外ナラス殊ニ伊代表部カ日夜寢  
食ヲ忘レテ帝國ノ爲奮闘セル次第ハ全ク想像以上ニシテ之  
ニ對スル謝意表明方ニ關シテハ此ノ上トモ特別ノ御考慮ヲ  
煩度シ

伊ニ轉電セリ

954

昭和12年11月26日

広田外務大臣より  
在伊国堀田大使宛（電報）

九国条約會議における伊国代表の尽力に対し

## 同国外相へ謝意伝達方訓令

第二七八號

本省 11月26日後8時30分發

武府會議ガ我方ノ希望通無爲ニ終ハレルハ會議内部ニ於ケル伊國代表ノ活動ニ負フトコロ大ナルモノアリト思料スルニ付テハ貴大使ハ速ニチアノ外相ニ對シ會期中終始帝國ノ主張ヲ支持シタル伊國政府竝ニ同國代表部ニ對スル帝國政府ノ深甚ナル謝意ヲ申入レラルト共ニ既ニ歸伊セルト思ハルル「アルドロヴァンデイ」伯ニ對シテモ帝國政府ノ謝意ヲ傳達セラレ度シ

白へ暗送アリ度シ



955 昭和12年11月26日 在英國吉田大使より  
広田外務大臣宛(電報)

## 九国条約會議の閉幕に関する新聞論調報告

ロンドン 11月26日後發  
本省 11月27日前着

第九二四號

一、武府會議終了ニ付當地諸新聞ハ余リ大キク扱ハス社説ヲ

掲ケタルハ二十五日「タイムス」、「ガーデียน」ノミナルカ「タイムス」ハ會議ノ失敗ヲ認メ今回決議ハ聯盟決議ヨリ更ニ微溫のニシテ支那代表ノ失望セルハ當然ノコトナルカ何レノ國モ「イニシヤテイブ」ヲ執ルヲ喜ハサル目下ノ狀態ニテハ之以外致方ナカルヘシ但シ英政府ハ引續キ列國ト協調ヲ保チ平和恢復ニ努力シ居レリトナシ「ガーデียน」ハ同様論旨ヲ述ヘタル後若シ日本カ今後モ列國申出ヲ拒ミ續クル時ハ列國ハ聯盟ニ會議失敗ヲ報告シ如何ニシテ個別的ニ支那ヲ援助スヘキヤノ方法ニ付指示ヲ請フヘシト論シタリ

二、二十五日及二十六日諸新聞ハ日本軍ノ無錫占領等戰地「ニュース」ヲ大キク報道スルト共ニ二十五日「タイムス」ハ字垣大將ノ時局談(東京特派員發)ヲ、二十六日同紙ハ日本ノ對平和態度ニ關スル東京特派員電及香港事情ニ關スル同地特派員記事ヲ夫々大キク目立チ易キ個所ニ載セ居ル處上海租界及稅關ノ將來ハ依然強ク憂慮セラレ居ルモノノ如ク「ガーデียน」上海電ハ英、佛、米ハ日本ト海關問題ニ付商議中ナリシカ日本カ列國代表ノ介入ヲ斥ケ海關當局トノ直接交渉ヲ主張スルニ至リ停頓狀

態ニ陥リタル旨、日本ノ海關收入ヲ擔保トセル外債所有額ハ他列強ニ比シ極ク僅少ナレハ現地金融界ハ日本ノ態度ヲ理不盡高壓的ナリト目シ居ル旨報シ又「シチー」方面ニ資力ヲ有スル「フィナアンシアル・タイムス」ハ日本軍部ハ海關ノ支配ヲ獲得セント狙ヒ居リ右カ關係國ト相談ナクシテ實力ニ依リ遂行サルルニ至ラハ全支那ノ國際金融組織ハ破壊セラルヘク英、米、佛當局ハ緊密聯絡ノ上嚴重監視中ナリト報シタリ

在歐各大使ニ郵送セリ

~~~~~